
砂漠の巨人

水無月なづき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

砂漠の巨人

【Nコード】

N8930P

【作者名】

水無月なつき

【あらすじ】

砂漠の砂の力を利用して発展を遂げた国マッドスコープ。痩せた土地で魔術の力に頼りかろうじて国を維持してきたマッドガルド。

機械と電気を操る優れた文明を持った種族サゴマの自治区であるマッドベース。

三つの勢力が砂の大陸で激突する異世界ダークファンタジー。

砂漠の巨人 一

砂列車の車輪がいびつな音を立てて地上のレールと接合した。車輪は砂の海から次々と姿を現し、塩基性の土壌を走るレールの上に乗り上げていく。

断続的な振動と騒音で、コンテナの中で寝ていたリツコは目を覚ました。ベニヤ板の内張りが施された内壁から頭をもたげ、丸めた背筋を伸ばして座りなおすと、対面に座っているルカと目が合った。

あとどのくらいで着く？

分からない。

それもそうか、とリツコは思った。コンテナの内部には床の中央に置かれたランプの火が弱々しげに灯っているだけで、外界からの刺激は極めて乏しい。沈黙と暗闇が支配するこの閉ざされた空間に何時間も居続けていると、次第に時間に対する感覚がつかめなくなってくる。だが今の音から察するに、列車は丁度砂漠から礫砂漠へ出たところだろう。砂の上を走っていたときのあの静けさは消え、一定のリズムで車輪がレールの継ぎ目を踏む音が聞こえてくる。それに線路の上に出てしまえば、船のように砂の海を進むよりはスピードも出るのではないだろうか。

リツコはもう一眠りしようかと思ったが、この列車が今まさに戦地へ向かって進んでいるということを見ると緊張して眠れなくなつた。

戦争が始まってから三ヶ月。陸海空どの戦いにおいてもマッドスコープ軍がマッドガルド軍に対して優位に立っているとはいいがたい。戦局の要となる山岳地帯のマッドベースは既にマッドガルド軍によって要塞化されており、二週間前に行われた第一軍のマッドベース侵攻はマッドベース内部に辿り着くことすらできずにトンネル内で全滅するという始末だった。

第二軍が侵攻し、本格的なマッドベース攻防戦が繰り広げられ始

めてから六日後、マッドベースで奮闘するマッドスコープ軍への救援物資を輸送するための貨物列車にリッコたちはコンテナ一つを丸ごと使って紛れ込んでいた。水、食糧、医薬品、武器などが積み込まれたコンテナとともに他のコンテナ同様の貨物を装って砂砂漠の上を走る砂列車でマッドベース内部まで潜入しようという試みだ。列車がマッドベースに到着すれば救援物資はマッドスコープ軍の手に渡り、リッコたちはコンテナのままマッドスコープ軍制圧下のサゴマ居住区に引き渡され、協力者となるサゴマの手で国家機密である機械の部品として密封されたままマッドガルド行きの貨物列車に乗せられる。そのままマッドガルド王国の首都ガルナディアに侵入し、開戦前にマッドガルド軍によって捕らえられたままその消息が明らかにされていないフレイ少佐を救出しようというのが今回の作戦の目的だ。

硬い床と壁に身を預けて眠っていたためリッコは体のあちこちが痛んだ。あんまりいい寝覚めではない。

相変わらずビリーはマントに包まって深い眠りに落ちたまま斜向かいの隅でうずくまっている。色あせ、砂埃にまみれたマントは何色かも定かに見分けがつかず、裾から覗く履き古しのインディゴ染めは膝の部分が大きく擦り切れている。そのみすばらしい格好は一見して逃亡中の盗賊の姿を思わせた。

隣のエリイはずっと起きていたのか、壁にもたれて座ったまま天井の一点を見つめながら注意深く外の音に聞き耳を立てている。ふと首をかしげた拍子に珊瑚色の長い髪が胸元を大きく開けたフランネルのブラウスの上に垂れ落ちて柔らかかなうねりを作った。大きな襟とフードのついたグレーの外套は丈が長く、編み上げのブーツを履いた少女のかかとのその裾を踏まれている。

向かい側に座ったルカは思案げな様子でランプの明かりを眺めている。ランプの灯火は少女の顔を照らし、その表情に光と影を作り出し、若草色の瞳に小さなきらめきを反射させていた。紫紺のローブと緩やかなウェーブのかかった苜蓿色の長い髪は薄闇の中でオレ

ンジ色の光を浴びて実際とは違った色合いを見せている。隣に置かれたとんがり帽子は背後の壁に細長い影をぼんやりと投げ出していた。

リッコは駱駝の胃袋でできた三日月型の水筒を雑囊から取り出し、寝起きで乾いた口を潤した。表面のなめし皮が手のひらの汗でじつとりと滲む。

最初のうちこそ暇を持て余して会話を交わしたりもしたのだが、時間が経つにつれて四人とも余計な体力を割くのを疎んじてか互いに一定の距離を置いて四隅に陣取り各々自分の世界に没入し始めた。時折誰かが思い出したように何かをつぶやき、誰かがそれに言葉を返し、何かの話が続いたかと思うと不意に途切れ、また沈黙が訪れる。その繰り返しだ。早々に睡眠時間を稼ごうと床に寝転がったビリーがいびきをかき始めた頃、リッコもまだ付き合いの浅い仕事仲間と親睦を深めるのを諦めて睡眠を取ることを選択した。

「トンネルに入ったな」

エリーがぼつりとつぶやいた。耳を澄ますと外から車輪の音がトンネルの壁を反響するのが聞こえてくる。

トンネルの中まで入ってしまったえば空襲の心配はないだろう。護衛を伴わないねずみ輸送だったが、これでひとまず敵に見つかることはなさそうだ。

リッコは安堵の息を漏らし、脱力して背後の壁にもたれかかった。完全に油断しきったそのときだった。轟音とともに世界が横転し、リッコは宙に投げ出され、そのまま壁に叩きつけられた。

がしゃんとランプの割れる音がして、あたりは完全な闇に閉ざされた。

しこたま額を打ちつけたリッコは目の奥で火花が飛んだ。

「おい、大丈夫か」

後ろでエリーの声があった。

「リッコ、どいてやれ。ルカが下敷きにされてる」

「うう……ごめん。大丈夫？」

リッコは手探りを頼りに後ろへ退いて起き上がった。頭がくらくらする。暗闇もあいまって平衡感覚がつかめない。

「危つく強烈な頭突きを喰らうところだったわ……でも平気」

ぼつと小さな音がして、エリイの手のひらに火が灯った。蠟燭ほどの小さな炎であるにも関わらず、周囲はランプよりもずっと力強い赤い光で照らされる。

「どうした、何があった。敵に見つかったのか？ 今どのへんだ？」
今の騒ぎで目を覚ましたらしいビリーがエリイに声をかけた。寝起きの声でなんだか間が抜けて聞こえる。

「まだマッドベースには着いてない。手前のトンネルの中だ。どうやら列車が事故に遭ったらしい　落盤か？」

「落盤？ いや、それはないだろう。マッドベースは巨大な一枚岩だ。それを人為的にくりぬいたトンネルの中で落盤や落石、土砂崩れがあるとは思えない」

話しながらビリーは着衣を整え、マントを翻して立ち上がった。

「いずれにしても、もう敵陣の中だ。気を引き締めていこう。とりあえず外の様子を窺ってみるか」

「了解」

エリイは手のひらに灯した炎を握りつぶすようにして消し、腰に下げた鞘から剣を引き抜いたかと思うとその刀身に真っ赤な炎を宿らせコンテナの壁を立て続けに二回、大きく斜めに切り裂いた。闇の中でまばゆい火炎が八の字の軌跡を描く。ばかっとなんか蹴り倒し、三角形の穴を作るとエリイは身をかがめて外へ出て行く。

「おいおい、このコンテナはわざわざちゃんと中からも開けられるようにしてあるんだぞ……」

「相変わらず野蛮な奴……」

ため息混じりにルカがつぶやく。

「今後の作戦に支障が出なきゃいいけど……」
リッコは雑嚢を肩にかけてあとに続いた。

気密度の高いコンテナの中とは打って変わって、外の空気はひんやりと乾いていた。砂漠の夜は寒いのだ。

リッコたちの乗っていた砂列車の車両はレールの上から外れたところで横転していた。外から見るとエリイがコンテナに穴を開けた部分には実際には壁ではなく天井の部分だった。後ろに続く車両は全て横倒しに投げ出されている。列車の前方は砂煙が立ち込めていて見通しが利かない。白い砂塵の向こう側からはぼんやりと黄色いナトリウムランプの明かりが透けて見えるだけだ。

「脱線してるぜ。やっぱり線路に細工されてたんじゃないか？」

先に外に出てあたりの様子を窺っていたエリイが近くまで戻ってきて言った。

「とつくに破壊したつもりになってる線路をわざわざもう一度細工したりはしないだろ」

ビリーが声を潜めてそう言いながら、エリイに声のトーンを下げると手振りで命じた。

「先日の戦闘で敗れた兵士の体や、装甲車の残骸に乗り上げて脱輪したとか……？」

ルカが言う。

「とにかく原因を探ってみよう。列車の陰に隠れながら一列になって進め。しんがりは俺が務める」

リッコたちは列車に沿って慎重に前へ進んだ。別に足音を立てるなどまでは言われなかったが、リッコは人工的に敷き詰められた碎石の上で音を立てないように注意深く足を進めた。

前方の車両は蛇がのたくったように九十九折になっていた。まるで何かに激突したかのようだ。

先頭車両まで近づくと、不意に巨大な岩がトンネル内で空間を占拠しているのが見えた。列車の先頭、つまり運転席のある部分はその巨大な岩に押しつぶされている。それに続く後ろの車両が載せたコンテナも大きくひしゃげ、中の積荷があたりにはぶちまけられている。

リッコは上を見上げた。そこにはアーチ型のトンネルの丸い天井があるだけだった。表面が炭化したような黒ずみなどいくつか戦闘の傷跡が残ってはいるものの、落盤や落石が起こったような形跡は見受けられない。まるで突然空中から巨大な岩が現れたかのような不自然な光景だった。

「……誰かが仕掛けた罠？」

誰にともなくリッコは言った。

「手っ取り早く考えるなら、魔術によるトラップでしょうね。マツドガルド軍の」

いびつな形をした巨大な岩を見上げてルカが言った。この大きさならば確かに列車を止められるだけの質量も持っているだろうと考えると、リッコは少しぞつとした。

「魔術師にとつてはこのくらい造作もないことなの？」

「造作もない？ まさか。考えたくもないほど恐ろしい実力者の仕業だわ」

ルカは肩をすくめた。そのとき、エリイが「おい」と運転席を指して注意を促した。

運転士は死んでいるように見えた。頭部から赤黒い血を流してうずくまっている。だがルカがそばに寄って何事かを確かめると「まだ息がある」と言つて杖を取り出した。

不意にエリイが腰を低く落としてタックルをするようにルカを突き飛ばした。リッコは巻き添えを喰わないようにあわてて後ろへ飛び退いた。

「ちよつと、何よ!？」
「弓だ」

エリイは地に伏せたまま言った。ルカが先ほどまでいた運転席の扉のところに大きな矢が刺さっている。

リッコは矢が飛んできた方向を振り向いた。トンネルの向こう側で大きな炎がいくつも揺らいでいるのが見える。松明を持った人影と、その炎で火をつけた矢を弓につがえてこちらを狙っている人影

が数人、いや十数人

「伏せる！！」

叫ぶと同時にビリーがひしゃげたコンテナの中に飛び込んだ。リツコも一緒にコンテナの中に入った。床に転がっていたじゃがいもが腹を打った。おびただしい量の穀物とそれに伴う土の匂いがした。

空を切る音とともに幾重にも矢が飛来し、列車やコンテナの各所に突き刺さると鏃にまとった炎が周囲に火の息を広げ始めた。

「次のが来る前に逃げるぞ。体を起こすな。腰を落としたまま進め後ろだ！ 反対側に抜け道があるんだ。一旦列車の最後尾まで行くぞ」

「 運転士は！？」

ルカが言った。

「構うな。助けてる暇はない」

ビリーは口早に指示しながらすばやくコンテナから飛び降りて先導した。リツコがひしゃげたコンテナの隙間から抜け出したときには既にルカとエリイはビリーのあとに続いていた。リツコも身をかがめたままあとを追う。

自分が一番後ろだという焦りと敵に狙われているという恐怖とでリツコは背中に冷や汗が流れるのを感じた。

ショートブーツの爪先が不器用に足元の砂利を蹴る。

肩にかけて雑囊が前に垂れ下がりに足を上げるたびに膝を打つ。

肩紐を握る手が汗ばんでくる。

九十九折に屈曲した列車の角になった部分が近づいてきた。

あそこを曲がればひとまず物陰に隠られる。

ビリーが角を蹴って列車の向こうに回りこみ、早く来いと合図する。

ルカ、エリイがそれに続く。

リツコもあとに続いた　もう少しだ　そこで足を滑らせて転んだ。

「馬鹿！」

リッコが起き上がろうとするよりも早くビリーがリッコの腕をつかんで思い切り引っ張った。そのまま勢いをつけて起き上がるとともに列車の陰に転がり込む。

背後でいくつも列車に矢が突き刺さる音がする。

危なかった。リッコは動悸が激しくなるのを感じた。

「大丈夫か。走れるな？ 行くぞ。急げ！」

ビリーはもう一ヶ所列車が屈曲した部分を指して言った。ルカとエリイは先に進んで向こう側からこちらを見ている。

リッコはバランスを崩さないように雑嚢を両腕で胸に抱えながら走った。

同じ距離のはずなのに来た道よりも遠く感じる。

エリイたちに追いつくとリッコはちらりと後ろを見てから列車の陰に隠れた。敵の姿はまだ見えない。

「回り込んでる暇はない。ここからよじ登って向こう側に降りるぞ」
横転した車両を指してビリーが言った。

ルカもエリイもリッコより背が低かったが、横に倒れたコンテナは縦よりも高さが低く四人とも難なく登れた。

コンテナから飛び降りると、レールは横転した車両から大きく離れた場所に走っていた。

四人とも無事に降りてきたことを確認するとビリーは「あっちだ」と前方を指した。その先に一人の兵士が立っていた。

「反対側には誰もいないと思った……？」

ゆっくりと言いながら、兵士は手に持った槍を構えた。

四人は立ち止まって身構える。

「で、抜け道ってのは？」

前を見据えたままエリイが言った。

「あの野郎の向こうだよ」

ビリーは忌々しげに舌打ちする。

「ちまちましてると囲まれる。今ならあいつ一人だろ。一気に潰せ」

エリイは剣を構えた。鞘から引き抜くと同時に刀身に炎が宿る。炎の明かりが珊瑚色の長い髪に映えてまるで生きているかのように見える。

「ルカ。リツコの護衛は任せた。あいつは俺とエリイが相手する」
ビリーは亜麻紐で両脚の太ももに巻きつけた鞘から双剣を引き抜きながら言った。

「了解」

ルカがそう言うつてうなづくときとビリーとエリイは息を合わせて敵の兵士に斬り込んでいった。

二人が敵の兵士と刃を交える様子を注意深く見据えてから、ルカは「こつち来て」と言つてリツコの腕を引いた。

「え、何？ あの二人が敵を引きつけてるあいだに横から突破するんじゃないの？」

ルカがエリイたちが向かつていった方向とは反対側に連れて行くうとするので、リツコは疑問を口にした。

「すぐに決着がつくとは限らない。ぼんやりしてたら退路をふさがれちゃうでしょ。今のうちに後ろの敵を片付けておくのよ」

ルカは杖で列車側に寄れと合図すると最後尾の車両に向かつて走り始めた。リツコは列車に沿って走りながらあとを追う。

列車の末尾まで来るとルカは唇の前で人差し指を立ててリツコに目配せをした。

エリイとビリーが敵と戦いながら地面を蹴ったり刃をぶつけ合ったりする音が遠くに聞こえる。

リツコは息を潜めた。

列車の向こう側から十数人分の足音が聞こえる。最後尾の車両に向かつて徐々に近づいてくる。

ルカは背後の音に聞き耳を立てながら杖を握り締めた。翡翠の宝玉がはめ込まれたステッキだ。

リツコは天井を仰いで向こう側の様子を窺った。松明の炎らしきオレンジ色の明かりがトンネルの壁に反射している。

いよいよ出会いがしらに相見えるかと思ったとき、ルカはここで待っていると目配せするとロープの裾を翻して列車の向こうへ躍り出た。

トンネル内に悲鳴が響き渡ると同時に列車の向こうで大きな炎が立ち上った。悲痛な叫び声とともに衣服が燃え滾る音や肉が焦げる音が聞こえてくる。

リツコは耳を覆った。人間が生きたまま丸ごと燃やされているのだとはなるべく考えないようにした。

最初のうちは何人分もの悲鳴が同時に聞こえていたが、徐々に人数が減っていき、やがて最後の一人が残り、そしてついには誰も声を上げなくなった。

「終わったよ」

ルカが列車の向こうから戻ってきた。まだ残響が耳にこびりついているような気がする。

気がつくともリツコは両耳を押さえたまましゃがみこんでいた。

「大丈夫？」

ルカが心配げに顔を覗き込んできたのでリツコは努めて平静を装いながら「平気」と言って立ち上がった。

ひどいにおいがする。しばらく肉は食べられないかもしれない。

「諦めたほうがいい。既にお前たちの味方は全滅している」

諭すような柔らかい口調で兵士が言った。だがその穏やかな口ぶりとは裏腹に、大きな兜のバイザー越しに覗く目は鋭く釣り上がっている。

「戦意喪失を狙う気が。その手は喰わんぞ」

ビリーが注意深く間合いを詰めながら言った。

「残念だけど、本当の話」

兵士は本当に残念そうに言った。

エリイは剣の柄を握り締めて兵士の体を見据えながら大きく息を吸った。相手はエリイよりもずつと背が高かった。ビリーと比べてもまだ敵の兵士のほうが一回り大きい。

エリイはゆっくりと息を吐いた。

ビリーが横目でちらりと合図する。今だ。

エリイは地面を蹴った。

兵士はエリイに向かってまっすぐ槍を突きつける。エリイは上から剣で叩きつけた。穂先が地面に突き刺さる。

隙を突いてビリーが横から斬りかかる。兵士は咄嗟に槍を引き抜き石突でビリーを突き飛ばした。

すかさずエリイが袈裟斬りを繰り出す。兵士はそれを柄で受け止めそのままひねるように刀身を横に薙いだ。剣の重さに引かれて体勢が崩され長身を活かした重い蹴りを喰らう。エリイは後ろへ吹き飛んだ。

ずざざと硬い碎石が背中を打つ。エリイは体格と体重の差を痛感した。

兵士はビリーを狙った。ビリーは双剣を交差させその刀身で器用に槍を受け止める。

エリイは起き上がった。

兵士は槍を引いてさらに踏み込む。突く。ビリーは手首を返して横に受け流す。兵士はくるりと槍を回転させ石突でビリーの双剣を払いのける。

甲高い金属音とともに短剣が宙を舞う。エリイはその軌跡を目で追った。

ビリーの手に残るは短剣一本。

兵士は大きく踏み込み止めを狙った。ビリーは後ろに飛び退いて槍の射程から逃れる。

エリイは兵士の後ろに回りこんだ。その体越しにビリーと一瞬目が合う。エリイは飛ばされた短剣を拾いに行った。

兵士はもう一歩前へ踏み込む。足の動きに合わせてすばやく回転

させながら槍を突く洗練されたその手つきをエリイは見た。

ビリーは後ろへ下がった。かかどが壁を打つ。兵士が槍を突き出す。金属が岩を穿つ不快な音が鳴り響く。

エリイは短剣を拾ってその刀身に炎を宿すと振り返りざまに兵士に向かつて投げつけた。

炎をまとった刃が赤い軌跡を残しながら飛んでいく。

兵士は難なく槍で弾き返したが、相手がそれに気を取られた隙にビリーは間合いから抜け出した。

追撃をすべく兵士が槍を構え直したとき、突如トンネル内に強烈な奇声が響き渡り、列車の向こうで真っ赤な火炎が膨れ上がった。兵士は肩越しに背後を一瞥すると構えを解いて槍を地面に突き立てた。赤い炎の光を受けて地面の上で波打つように影が揺らぐ。

悲鳴はしばらく続いた。ビリーがエリイの隣に並んで向き直り、再び兵士と対峙してもその声はまだ完全には途絶えなかった。

思わず耳をふさぎたくなるような不快感と嫌悪感を催す悲鳴だったが、エリイは剣を構えて兵士の動きに注意を向けたままその声に耳を傾けた。声の主は一人、また一人と減っていく。

やがて悲鳴はやみ、兵士がぼつりとつぶやいた。

「十二人」

大きな兜の下で薄桃色の唇がゆっくりと動く。

「今ので十二人が死んだ。ここへ連れてきた部下が全員」

エリイは背後に目を向けた。誰もいない。だまし討ちをするわけでもなさそうだ。

「どうするつもりだ。刺し違えてでもあだ討ちしようってか？」

ビリーが言った。その問いに対し、兵士は軽い調子で槍を肩に乗せながらこう答えた。

「帰る」

エリイは一瞬耳を疑った。しかし兵士はその言葉通りに、エリイたちには目もくれず二人のそばを横切つてマッドベースへ続くトンネルの出口へ向かつてすたすたと歩いていく。

「おい」

エリイはビリーと目を見合わせた。一呼吸置いてうなづき合うと、エリイは剣を大きく振りかぶって兵士の背後めがけて斬りかかった。隙だらけだ。

エリイは剣を振り切った。しかしその切っ先は空しく地面に叩きつけられた。まるで夢から覚めるかのように兵士の姿は目前から消え去っていた。

エリイは思わず左右を見渡した。

「なんだ今の？」

「分かん。魔術か？」

ビリーも信じられないという顔をしている。見た目に反して、あの兵士は槍使いであると同時に魔法使いでもあったのだろうか。あるいはあの兵士とは別に他の魔術師がどこか近くに潜んでいるのかもしれない。エリイは注意深く周囲に目を走らせた。疑い深く目を凝らすと列車の陰から何者かがこちらの様子を窺っているのではないかと思えてくる。

「エリイ！」

びくつと飛び跳ねるようにしてエリイは振り返った。ルカとリツコがこちらに駆け寄ってきていた。

「なんだ、お前か。驚かすなよ」

「驚かしたつもりはないんだけど……」

ルカは肩をすくめた。

「それより、さっきのはお前か？」

「そう。私たちを襲った敵の弓兵部隊。たぶんあれで全滅だと思うんだけど……」

ふとルカは横を向いて列車の運転席を一瞥すると深紫色のトンがり帽子を目深にかぶり直してため息をついた。

「……それで、あなたたちがさっきまで戦ってた相手は？」

「逃げ帰ったぞ。止めは刺せなかったけどな」

ビリーが言った。ルカは「そう」と気のない返事をして何か考え

ている風だったが、結局何も言わずに視線を逸らした。

「あと、これ。さっきそこに落ちてたから」

リッコが隣から歩み出てきてビリーに短剣を差し出した。先ほどの戦闘でエリイが敵の兵士に向かって投げつけたときのものだ。

「おう、悪いな」

ビリーはそのまま短剣を受け取るうとして、やめた。

「いや、これはお前に渡しておこう。被護衛者とはいえ丸腰つてのもまずいだろっ」

「えっ、でも……」

「遠慮すんなって。ほら」

リッコはやや不安げな表情で逡巡したが、ビリーは構わず亜麻紐で太ももにくくりつけた鞘を一つ外してリッコに渡した。

リッコは恐る恐る鞘を受け取ってそれに短剣を収めると、どうしたものかといった調子で亜麻紐の部分を持って余した。

「おい。そのまま鞘にしまおうとするなよ。ちゃんと装備しなきゃ意味ないだろ」

亜麻紐を無造作に鞘に巻きつけて短剣を雑嚢にしまおうとしたリッコを見咎めてビリーが言った。

「……なんだ。やり方が分からないのか。ちょっと貸してみる」

そう言っただけでビリーはリッコの手から短剣を取って彼女の前にかがみ込んだ。

「お前、右利きだったよな」

「……うん」

ビリーはリッコの穿いているジーンズとベルトのあいだに短剣を鞘ごと差し込み、亜麻紐をベルトループとベルトの部分に巻きつけた。

「よし、これでいいな。ナイフの使い方はまた今度教えてやるよ」

結び目をしっかり固定するとビリーは軽快な調子で立ち上がった。

「それじゃ行くか。抜け道はこっちだ」

ついて来いと手振りで合図しながらビリーが言った。

少し歩くとビリーは壁に手を着いて何かを探りながら進んだ。やがて何かを探し当てると「ここだ」と言っただけでビリーは壁に面した地面の一部分を強く踏んづけた。

少し間を置いて、鈍重な地響きとともに少し先で地面が大きく沈下し、人が一人やつと入れるくらいの穴が開いた。

「ここだ」

「なるほどな……」

エリイは感嘆した。

「へえ、こんなところに」

リッコも興味深げに言った。

「一人ずつ入ろう。誰が先に」

突如ル力が虚空に向かつて杖から炎を吹き出した。何もなかったはずの空間から炎を浴びた兵士の姿が飛び出して来る。

肉を貫く嫌な音。

兵士は手に持った槍でビリーの体を容赦なく貫いた。

「まずは一人目」

ゆっくりと確認するようにつばやいて、兵士は槍を引き抜いた。

そのまま引き倒されるようにしてビリーの体が打ち捨てられる。

エリイは悪態をついて剣を抜いた。大きな音とともに勢いよく刃が燃え上がる。

「それと」

ル力が大きな火炎を放った。兵士は避けるそぶりも見せずまともに喰らい、オレンジ色の炎に包まれていたその身はよりいっそう激しく燃え上がった。かのように見えた。

「私に炎は通じない」

体全身を覆っていたはずの炎は徐々にその勢いを失っていき、やがて嘘のように消え去った。衣服の各所は焼け焦げ、鎧兜のあちこちが煤にまみれているものの、その隙間から覗く素肌が火傷を負っている様子は見えない。

「そんな……」

ルカは唾然とした。

リッコは鞘に収めた短剣の柄に手をかけて様子を窺っている。

ビリーは地面に倒れたまま苦痛にうめきながら両手で腹の傷口を押さえている。まだ意識はあるらしいがその傷は深く、背中から滾々と血が流れ出ている。

「ルカ。何でもいいから足止めをしろ。いいか、足止めだ。分かるな？」

「タイミングは任せる」

「言つなりエリイは地面を蹴った。」

「承知！」

ルカも合点がいったらしい。

兵士は槍を構えた。穂先がまつすぐエリイを捉える。

エリイは深く踏み込み体を前に倒して剣を下から薙ぎ払い、向かい来る穂先を上逸らす。

石突が下から繰り出されるのを横にかわす。兵士が一步後ろに下がるのが見える。

一拍置いて相手が槍を持ち直すのを待ち、向き直る穂先を剣で叩きつけると同時にエリイは肩を突き出して兵士の体に体当たりした。分厚い皮の腰当ての向こうは思いのほか柔らかく軽かった。

だが相手の体を吹き飛ばすには至らない。エリイは二、三步後退する相手に対し距離を詰めてクロスレンジに持ち込んだまま剣を振るう。

この距離ならば槍は使えない。

しかし懐に潜り込んだエリイの鼻面に不意に膝蹴りが炸裂した。

エリイは咄嗟に後ろに飛び退いて距離をとる。鉄の膝当てをまとも喰らって切れた唇から鉄の味がする。

「甘い。動きに無駄が多すぎる」

エリイが体当たりした拍子に兜が外れたらしく、兵士の素顔があらわになった。

「なんだ。お前、女だったのか」

エリイは唇をぬぐった。

「意外……?」

あごのあたりで切り揃えられた艶のある鮮やかな金髪はまっすぐと伸びて頬を覆い、切れ長の目は鋭く釣り上がっている。

「いや、女だと気づかなかっただけだ」

本当はてつきり男だとばかり思っていたが、エリイはなんとなく否定した。

「そう。まあ、いずれにしても、女だからって遠慮せずに全力でかかってくるといい」

兵士は地面に落ちて転がっていた兜を拾ってかぶり直した。顔の半分が再び隠れ、先ほどまでと同じ格好になる。しかし改めて見ると口元やあごのライン、首や肩幅、腰周りなど各所から女っぽさが感じられるような気もする。

「そういうお前は手加減してるだろ」

「悪いね。あんまり可愛らしいもんだから、つい」

兵士は微笑混じりに言った。兜の下から覗いた唇が楽しそうに笑うのを見て、エリイは顔が熱くなるのを感じた。

「何がだよ」

「可憐な少女が健気に立ち向かってくるのは微笑ましい」

兵士は頬に手を当てて悩ましげにため息をついた。

「俺は男だ」

舐めやがって。

エリイは爪先で足元の砂利を蹴飛ばした。

「その割には随分と声が高くて肌が白くて線が細い」

兵士はくすくすと愉快そうに笑った。

「ふん。何とでも言え」

エリイは剣の炎を激しく燃え滾らせた。

「そう睨むな。火傷しそう　っ!？」

兵士は槍を構え直そうとして不意にバランスを崩し、それを杖代わりに地面に突き立ててもたれかかった。

「やられた……」

悔しそつに兵士は言った。

エリイは後ろを顧みた。ルカが油断なく杖をかざしたまま右手を兵士に向けている。

作戦は成功した。両脚封じ。術者の両脚の動きを封じると引き換えに対象の人物の両脚の自由を奪う対歩兵魔術の一つ。

「いいぞ」

すかさずエリイは兵士に突進した。そのまま思い切り兵士の体を蹴倒す。足の自由を奪われた兵士は抵抗空しく無様に尻餅を着いた。そのままどかつとエリイは兵士の腹を踏む。

「今回は俺たちの勝ちだな」

エリイは兵士の胸に剣の切っ先を突きつけた。

「ルカ。術を解くなよ。まずは先にビリーを」

目を離れた隙に不意に膝に鋭利な痛みが走った。見ると兵士は大きく湾曲した短刀でエリイの膝を切り裂いていた。

「こいつ」

エリイは飛び退いて悪態をついた。

「油断も隙もない奴だ」

剣を鞘に収めてエリイはビリーの元へ駆け寄った。

「鎮痛薬は打ったか？」

「二つ打ったけど気休めにしか。これ以上は副作用が」

「すぐに手当てするから堪忍しろよ。リツコ、運ぶぞ。足は俺が持つ」

エリイはリツコと二人でビリーを抜け穴まで運んだ。リツコが応急処置を施していたが血は止まらず、運んでいるあいだにもぼたぼたと滴り落ち、地面に赤黒い染みを残していく。

「俺が先に下りる。合図したら両膝を先に入れて、尻から滑り落とすようにゆっくりと下ろせ。気をつける、はらわたが飛び出るぞ」

エリイは腰に差した剣が引っかからないように気をつけながら先に穴を降りた。

下の地面はすぐそこだった。足を着くと壁に取り付けられた白色

電球がひとりでに明かりを灯した。中は狭く細長い通路のようになっており、天井も低くエリイの背丈でも手が届くくらいだ。

「いいぞ、下ろせ」

だらんと穴からぶら下がったビリーの両脚を抱え込み、ゆっくりとエリイはリツコとタイミングを合わせながら彼の体を床に下ろした。

「大丈夫だ。降りて来い」

リツコが飛び降りてきた。エリイはそれと入れ違いに壁をよじ登って穴から顔を出した。

「ルカ！ こつちだ、急げ！！」

エリイが大声で呼んで手招きするとルカは飛ぶようにこちらへ接近する。エリイは頭を引っ込めた。ルカが移動するために術を解けば相手も動けるようになる。

ルカが穴から滑り込んできた。広いつばが引っかかって脱げたとんがり帽子をあわてて腕を伸ばして引っ張り下ろす。

「この抜け道はおそらく小柄なサゴマのために作られている。槍と鎧で武装したままじゃあの狭い穴から降りることはできないはずだ」

「分かってる　どいて。リツコ、救急箱を出して。あと水を」

エリイは後ろへ下がって場所を空けた。ルカがビリーのかたわらに座り込んで傷の様子を確認する。リツコが雑囊から取り出した救急箱を床において蓋を開けるとルカは中から薄い皮膜のような手袋を取り出して手早く両手に身につけた。

ルカはビリーの傷口をふさいでいた包帯、止血用の紙、綿布の類を全てはがした。

「水」

リツコが三日月形の皮の水筒を差し出す。それを受け取るとルカは「手伝って」とエリイに声をかけてビリーの体を横に倒し、腹と背中との傷口を洗い流した。

「タオルと、あと吸湿紙を。吸湿紙には消毒液をかけて、タオルはそう。四角く畳んで」

ルカはビリーの背中に四角く畳んだタオルを敷くと、その上に消毒した紙を引いて彼の体を元のように寝かせた。

「血液製剤」

合成繊維の袋に細長い管がついたようなものを取り出すとルカはその管をビリーの腕に刺した。

「ペンライト」

リッコが小さな筒状の電灯を手渡した。ルカはそれをくわえると傷口に指を入れ大きく開いて覗き込んだ。

「血が、邪魔……」

ルカはしばらく眉間にしわを寄せたまま傷口の中を観察していたが、不意にライトを口にくわえたまま手袋を左手だけ外し、ローブのポケットから細長い小さな箱を取り出すとエリーのほうへ突き出してぶつきらぼくに「開けて」と言った。エリーは受け取って箱を開けた。

眼鏡だった。

「ありがとう」

ルカは片手で器用につるを広げて眼鏡をかけると再び手袋をはめた。エリーは手に持ったままの箱をどうしたものかと思ったがとらあえず蓋を閉めて預かっておくことにした。

傷口を指で広げ、ペンライトで照らしルカは片目をつぶって事細かに中の様子を見ていたが、やがてライトを口から離してリッコに「麻酔」と言った。

「鎮痛薬ならさつき打ったけど」

「違う。それじゃなくて、青いのがあるでしょう」

リッコは救急箱の中をまさぐった。エリーにはよく分からない小さな薬瓶や細かい器具などが入り乱れている。

「エリー。靴を脱がせて。片足だけでいい」

エリーは言われた通りにビリーの靴を片足だけ脱がせた。皮紐が途中で千切れたぼろぼろのデザートブーツだ。

素足を露出させるとルカはビリーのかかとに何かを刺した。

「ハサミ」

リッコは先端が湾曲した銀色の細長い鋏を取り出した。ルカはそれを受け取ると右手の親指と中指で傷口を器用に広げ、鋏で中の何かを切り始めた。

ルカはビリーの腹の中で何かを細かく切り取って外に投げ捨てた。ぼろ布のように見えたが、状況から考えておそらく小腸の一部だろう。

鋏を綿布でぬぐってリッコに返し、ルカはまた左手の手袋を外して眼鏡を押し上げると、今度は腰から杖を取り出した。

手袋をした右手で傷口を開き、そこに杖をかざすと翡翠の宝玉に光が宿り始める。隣で見えていたリッコが息を呑んだ。エリイからはよく見えないが、おそらく治癒の魔術で傷がふさがり始めているのだろう。

「針と糸。縫合糸が一番太いのを」

ルカは杖をしまつてペンライトを片付けると再び手袋をはめた。

「……全部魔術で治らねえのか？」

「ちよつと黙ってて」

ようやくビリーがまともに言葉を口にしたが、ルカはそれを一蹴して表皮を引き合わせ、慎重に針で縫い始める。

「体が熱い……」

「リッコ、保冷剤を頭に載せてやって」

「保冷剤？ これのこと？ 冷たくないけど」

「叩いて潰せば冷たくなるから」

リッコは床に置いて拳で叩くと、それをビリーの額の上に載せた。「それと、エリイ。消毒はしなくていいから、脱脂綿に水を含ませて傷口を拭いて、あとは絆創膏で傷をふさいでおきなさい」

縫合作業を進めながらルカが言った。エリイはルカの背中越しにリッコから脱脂綿と水筒と絆創膏を受け取ると、膝の切り傷を簡単に手当てした。ビリーの負った傷に比べると全く大したことはないが、思ったより傷は深かった。短刀で切られたオリーブ色のカーゴ

パンツの膝の部分は出血で真っ赤に染まり、鮮血はブーツの中まで垂れ落ちている。エリイは絆創膏を膝に貼るとブーツを脱いで適当に血を拭き取った。

「よし。次は背中」

ルカはビリーの体をひっくり返した。エリイもそれを手伝った。リッコがビリーの額からずり落ちた保冷剤を拾ってビリーの頭を自分の膝の上に載せた。

背中の上にあてがっていた吸湿紙はべっとりと血糊が固まっていた。それをはがすとルカはまた針で傷口を縫い始める。

リッコは保冷剤をビリーの額に当てながら「もう大丈夫」と囁いた。

エリイはふと頭上の穴を見上げてあの兵士はもう諦めて帰ったのだろうかと思いをめぐらせた。上には何と言って報告するのだろうか。貨物列車にねずみが四匹紛れ込んでいた？ やはり止めを刺しておくべきだったかもしれない。ここまで運んできた大量の救援物資も結局マッドスコープ軍の手に渡ることはないのだろうか。

「言うておくけど」

縫合を終えると綿布をテープで貼りつけながらルカが口を開いた。「こんな風に槍で体を貫かれたりしたら、多くの場合は命を落とす」体をひっくり返し、腹の傷も同じように綿布で覆うと包帯で胸部を軽く巻きつけた。

「脊椎 損傷なし。腹大動脈、下大静脈 損傷なし。肝臓、門脈 損傷なし。肋骨と小腸の一部を損傷。肋骨はひびが入っていただけだからそのまま修復。小腸は切って繋げた。軟部組織はそのまま修復。表皮は縫合。縫合糸は時間が経てば勝手に皮下組織に吸収されていくから、そのまま放っておいて。食事の際には鉄分とたんぱく質を十分に摂ること。私のほうからの説明は以上。何か質問はある？」

ルカは手袋を外し、その他の器具と一緒に片付けながら言った。

「いや、大丈夫だ。おかげで助かった。大したもんだな。お前、一

体何者なんだ？」

「魔術師。アステナ王国国家認定の中級魔術師。どこの馬の骨とも分らない野良魔法使いって訳じゃないから安心しなさい」

そう言つてルカは眼鏡を外す。エリイが手に持っていた箱を差し出すと「ありがとう」と言つて受け取りそれに眼鏡を入れてローブのポケットにしまった。リッコがぱちんと音を鳴らして救急箱の蓋を閉める。

「エリイ、悪いんだけど麻酔が切れるまでのあいだおぶつてやってくれない？」

「ああ、分かった」

「即効性がある分切れるのも早いから、すぐに歩けるようにはなると思うけど」

エリイがビリーの体を背負うのを見てからルカは先へ進んだ。リッコは雑嚢をまさぐつて中から何か小型の機械のようなものを取り出すとそれを腰に差してあとからついてくる。

白っぽく落ち着いた色彩の内装とゆつたりと静かな賑わいのある瀟洒な雰囲気のカフェでジャケットは一人先に席に着いていた。

アステナ王国はリーヴの世界で大陸の中央に位置し、八ヶ国との国境に接している。険しい山脈に囲まれた内陸の小国だ。痩せた土地で人々は金属と機械を頼りに細々と生き、周辺諸国に対して国力が高いとはお世辞にも言えず、幸運にも国内を取り囲む大山脈が天然の防壁として働きなんとかその脅威を凌いでいた。しかしそんなアステナが周辺諸国に対して絶対の自信を誇るものが二つあった。一つは、高度な魔術文明。もう一つは、塔の存在だ。

塔は不可能を可能にしてくれる夢のような存在だ。塔を介して別の世界へと渡り、元の世界には存在しないような知識、技術、あるいは鉱石などの希少な物質を持ち帰ることができる。それは現在、一つの世界に二つずつしか存在しないといわれている異世界への架

け橋だ。

アステナ政府は塔の研究を専門とする機関を設立した。その組織はアストラピアと呼ばれ、塔の向こう側の世界についての情報収集を主な仕事としている。そしてその最前線に立つ武装した遠征部隊のうちの一つ、アステナの首都アナスタシアに拠点を置くアストラピア三番隊 ジャック・スリーロード曹長はその三番隊の隊長だった。ルカ、エリイ、リツコの三人の部下を持つ小さな部隊の指揮官だ。

ジャックは部下をマッドスコープの支部に残したまま、マッドベースの塔から単身アイリスの世界へと渡り、エルザリア連合王国の使者ラヴェンナ・ベルクシュタインとの対談に赴いていた。

ラヴェンナは前回会ったときとほとんど変わらない格好で現れた。焦げ茶色のローブと、先端が後ろに折れ曲がったつば広のトンがり帽子。膝丈のスカートから覗く細い足は黒ストッキングに包まれ滑らかな光沢を帯びている。

ラヴェンナは店の入り口付近でしばらくきよるきよるとあたりを見回していたが、ジャックが軽く手を挙げて合図すると彼女はそれを見つけてこちらに向かってきた。茶色いブーツが板張りの床の上でこつこつと硬い音を鳴らす。

「二ヶ月ぶりか。無事に再会できて嬉しい限りだ」

ラヴェンナが椅子に腰を下ろすのを待ってからジャックは声をかけた。

「随分と間が空いたな」

楚々とした顔立ちに引き締まった表情、そして氷のような冷たさと透明感のある声は、実際よりも年上の娘を思わせる。

「緊張した状態が続いてるんだ。迂闊に塔には侵入できない。遅くなってしまうって申し訳ないが、しばらく様子を窺っていたのさ」

「で、用件は何だ」

「まあそう急くな。まずは話を聞いてほしい おっとそうだ。その前に、メニユールの文字が読めなくて困ってたんだよ。代わりに注

文してくれないか。俺は君と同じのでいい」

「皮肉なもんだな。統一言語は話せるのに統一文字は読めないなんて」

ラヴェンナは机の脇からメニューを取ってそれを広げながらため息混じりに言った。

「え？ 統一文字なのか、これ？」

「冗談だ。それはロディーナと呼ばれる文字でエルザリアとミルザ、ヴェロニカ及びその周辺諸国で使われているだけのものに過ぎない」
ラヴェンナは無表情のままそう言って説明した。

「なんだ。エルザリアの文明はもうそこまで先に進んでいるのかと思つて焦つたよ」

「結局のところ、統一文字なんて存在しない。そんな便利なものが生まれるのはまだずつと先のことだろう」

メニューの文字に目を伏せたまま話していたラヴェンナはふと顔を上げて「コーヒーでいいか」と言った。ジャックがそれにうなづくとラヴェンナは呼び鈴を鳴らしてウエイトレスを呼んだ。

クリップボードを持ったエプロンドレスの女性が現れるとラヴェンナはジャックには聞き取れない言葉で何事かを話した。おそらくエルザリア語かそれに相当する言語で注文を伝えたのだろう。

「さて、本題だが」

ウエイトレスが調理場へ去っていくのを見送ってからジャックは切り出した。

「サラの世界のマディミール大陸には現在我々が把握しているだけで三つの国がある。厳密には、二つの国と、一つの地域だ。マッドスコープと、マッドガルドと、マッドベース。俺たちアストラピアはマッドスコープの塔からサラの世界へやってきて、マッドスコープの支部を足場にマディミール大陸で活動をしている。アストラピアがサラの世界へ訪れて以降、アステナとマッドスコープは同盟関係にある。そこで近年、サラの世界における二つ目の塔がマッドベースにあることが分かった。サゴマの自治区であるマッドベース

は現在マッドガルド領なんだが、ここで俺たちアストラピアはマッドスコープとマッドベースが同盟を結ぶことが望ましいと思ってる」

「マッドガルド領なのか」

「問題はそこだ。簡単に説明するぞ。かつてサゴマは他の人間たちと同じようにマッドガルドで暮らしていた。だがサゴマはマッドガルドから追放される。そして北西の山岳地帯に移り住み、自治区を形成してひっそりと生活するようになった。それが今のマッドベースだ。サゴマは独立を望んでいる。そのサゴマ自治区を支援しているのがマッドスコープだ。だがマッドガルドが反発する。マッドベースを独立させまいとしてくるわけだよ」

「自分で追い出しておいて独立はするなと」

「な？ おかしいだろ？ しかも先月ついにマッドガルドがマッドベースを併合させようという動きを見せてきた。それで今睨み合いが続いてるんだよ」

「なるほどな」

ラヴェンナは言葉では理解を示したが、その抑揚は平板で真意はつかめない。ジャックはこのあとどのようにして彼女を説得すべきか少し考えた。

コーヒーが運ばれてきた。白いマグカップに淹れられたホットコーヒーを二つテーブルに並べると、ウェイトレスは伝票を置いて去っていった。

ラヴェンナはコーヒーにグラニュー糖とコンデンスミルクを注ぎ、ティースプーンでかき混ぜた。深みのある暗赤色の液体が穏やかなクリーム色に染まっていく。ジャックはラヴェンナがなぜか左手にだけ皮の手袋をはめていることに気づいた。

ラヴェンナはコーヒーに口をつけ、一口飲むと「続けてくれ」と言ってマグカップをソーサーに戻した。無愛想だが、舌で唇を舐める仕草に若干のあどけなさを感じる。ジャックは話を続けた。

「いざマッドベースを独立させるとなると、どうしてもマッドガル

ドとの武力衝突は視野に入れないといけない。近年、魔術文明を飛躍的に発展させてきたマッドガルドを相手に、マッドスコープの兵力だけで渡り合うのは心許ない。もちろん俺たちも援護はするが、アストラピアは軍隊と違って戦闘を専門とした部隊じゃない」

「それで私に協力しろと」

ラヴェンナの藍色の瞳が広いつばの下からジャックを射止めた。

「その通りだ」

ジャックは強くうなづいた。

「現代の戦争は魔術師の戦いだといっても過言じゃない。抜群の機動力を誇る魔術師部隊が敵の戦力の要だ。それに対抗するにはこちららも魔術師で立ち向かうしかない。騎兵や歩兵だけで魔術師と戦うのは難しい。陸上の戦闘でも、海上の戦闘でも、常に戦局の鍵を握るのは、唯一の航空戦力である魔術師だ。マッドスコープに戦闘能力を持った魔術師はいない。本部にも増援を要請しているが、アストラピアは慢性的な人手不足でまだ最前線で戦える者は極めて少ない。マッドスコープ支部の者と、本部からの増援の者とを合わせてまだほんの数名しか集まっていない。一人でも多くの魔術師の協力を得たいんだ」

ジャックはそこで言葉を切った。相手に考える時間を与えるためだ。

ラヴェンナは腕を組み、深くうつむいて考え込む。墨のような真っ黒い髪が眉を覆い、長く濃い睫毛と交錯する。

「残念だが要求を受け入れるのは難しいな。問題は私にもマディミール大陸での任務があるということだ。仮に協力したとして、お前たちの作戦通りに動けるとは限らない」

「そこを何とかできないか」

「お前たちのところにも魔術師はいるんだろう。それにアステナは元来魔術に長けた国だと聞いた。私が一人加わったところで何が変わる」

「猫の手も借りたい状況なんだよ」

「猫の手か……私の使い魔を貸してやろう。かなり有能だぞ」

ラヴェンナは背もたれに体を預け、真顔でそう皮肉った。椅子の脚が不機嫌に軋む音を立てる。

「こいつは粗相した。猫の手扱いだなんてとんでもない。君の實力は聞き及んでいる。協力してくれれば頼もしい戦力だ。作戦通りに動けなくなつていい。できる限り融通は利くようにする」

ジャックは精一杯譲歩した。

不意に間が空いて、ジャックにはラヴェンナが次に口を開くまでの時間がやたらと長く感じられた。

「武力衝突を視野に入れる　と言ったな。実際のところ戦争を回避し得る可能性はどの程度ある」

「もちろんマッドスコープもマッドベースも、そして俺たちアストラピアも、戦争を回避するためには最善を尽くす。だが実際には単なる時間稼ぎにしかならないだろう。現実として、マッドベースが独立するにあたって戦争を完全に回避できるという見通しは今のところない」

「戦争が避けられないとすれば、開戦の予想時期は」

「戦争はいつ起こってもおかしくないような状態だが、今日や明日にも全面戦争が開始されるってわけでもないだろう。アストラピアの目測としては、少なくともあと二ヶ月　上手くいけば向こう三ヶ月は開戦を引き伸ばせるかもしれない。それまでのあいだにマッドベースとの連携を図り、必要な物資、及び人材を確保し、できる限り軍備を整える」

「二ヶ月から三ヶ月か」

ラヴェンナはまたわずかに逡巡したが、今度は決断を下すまでにそう時間はかからなかった。

「いいだろう。私も協力しよう」

「恩に着る」

ジャックはその後ラヴェンナに詳しい作戦の内容を伝えた。諸々の準備を整える時間を考慮してラヴェンナは三日後にサラの世界へ

訪れると約束し、ジャックはいち早く朗報を持ち帰るべくその日のうちにアイリスの世界をあとにした。

ちなみにコーヒー代はラヴェンナが支払った。ジャックは手持ちの金をエルザリアの通貨に両替しておくのを忘れていたのだ。それを聞くとラヴェンナは「貸しだからな。この間抜け」と冷やかな目を向けてきた。

しばらく細長い通路が続いていたが、リッコたちは不意に開けた空間に出た。

「地下水脈……？」

先頭を歩いていたルカは不意に立ち止まって口を開いた。通路の先は筒状の大きな空間に横から穿たれ、その下には川が流れており、向かい側の通路までは吊り橋がかけられている。

「念のため一人ずつ渡ろう。エリイ、下ろしてくれ。もう大丈夫だ」「大丈夫なのか、この橋？」

ビリーを背中から下ろすとエリイは左足に体重をかけたまま右足で用心深く吊り橋を踏みながら言った。下を流れる川はかなり低い位置にあり、落ちたら上つてこれそうにない。

「お前の体重なら落ちたりしないから安心しろ」

ビリーに茶々を入れられてエリイはじろりと彼を睨んだ。

「ふん。じゃあ俺が先に行つてやるよ」

エリイは胸を張つてそう言ったが、いざ足を踏み出してつり橋が大きく軋む音を聞くと彼女は怖気づいたのか咄嗟に両手を伸ばして欄干を握り締めた。

へっぴり腰になって髪の毛を逆立てながら進むエリイの姿がおかしくてリッコはつい吊り橋をゆすつてからかってみたくなったが、それで橋が落ちたら笑い事では済まないのでやめておいた。

エリイが対岸へ辿り着くとルカが「先に行つて」と促した。それに従つてリッコはゆっくりと吊り橋を渡り始めた。

吊り橋はぎしぎしと軋み、一步踏み出すごとに小刻みに揺れる。欄干に手をかけると通路の壁にかかっていた白熱電球のケーブルが吊り橋の綱と一緒に向こう岸まで張られていることに気づいた。

足元を見下ろしてみると川は砂の上を流れている。リッコは最初、岩盤の中を水が流れていてその浸食で川底がここまで削られているのだと思ったが、どうやら違うようだ。川縁はマッドスコープの砂漠で見かけたようなオレンジ色の細かな砂に埋もれ、その上を透明な水が流れている。リッコは天井を見上げた。やや高い位置に水によって浸食されてむき出しになったものと思われる岩盤がある。やはり川はかつてあの位置を流れていたのだろうか。あるいは雨季には水位が増して天井まで全て水の中に沈むのかもしれない。吊り橋の綱は岩盤の壁を穿った小さな穴にセメントのようなもので固定した金具に結びつけられている。天井から壁にかけては全て一繋ぎの岩盤のようだ。川底だけがなぜか砂漠の砂で埋もれている。

マッドベースは巨大な一枚岩だとビリーは言っていた。それが本当だとすればあの川底の砂は何だ？

リッコは川の上流のほうに目を凝らした。白熱電球の取り付けられている通路の中とは違って川の流れてくる広い空間は真っ暗で見通しが利かない。反対側の下流も同じく闇に吸い込まれるようにして水が流れていく。ただ水の流れる音のみが聞こえてくるその情景は、暗澹とした空間の中で密度の濃い暗闇と澄み切った透明な水とが互いに溶け込んでいく様を思わせる。

橋を渡り終わると欄干の綱をつかんでいた手が砂埃で真っ白になった。リッコはジーンズの太ももの部分で手をはいた。

今度はビリーが吊り橋を渡ってくる。まだ麻酔が完全には切れていないらしく、不安定な足場でどこちない歩き方ではあったが、手すりをつかみながら一步一步慎重に進み、やがて橋を渡り終えた。

最後にルカが橋を渡り、四人は再び通路を進み始める。

両脇の壁に一定の間隔で小さな白熱電球を取り付けた細長い通路がまっすぐと続いている。水の流れる音が遠ざかっていき、四人分

の足音だけが静寂の中で息を忍ばせる。

リツコは腰に差した歩数計の画面を確認してみた。見通しの利かない狭い空間の中で大まかな距離を測るためのものだ。この隠し通路の中に入ってから計りだしたのだから当たり前だが、まだあまり進んでいない。リツコはなんだか時間の流れを遅く感じた。予め地図の上で大体の距離を確認していても、初めて通る道はやけに長く感じるあのときの気分と似ている。

通路はしばらくまっすぐと続いていたが、やがて右方に折れ曲がった。リツコは立ち止まってペンと手帳を取り出すと歩数計を仕掛けてからこれまで歩いた距離を概算して書き記した。そして曲がり角の概ねの角度を目測してメモを取ると歩数計をリセットして再び歩き始めた。

「仕事熱心だな」

リツコがメモを書き取るのを見てビリーが言った。

「一応ね」

現地の地理情報を整理してまとめるとというのが、今回のリツコに課せられた任務の一つだ。非戦闘員であるリツコは元来、エリイやルカと同じ三番隊の所属ではなく本部の연구원として働いていたが、あるとき測量士として起用されて以来、護衛を伴って現地赶赴情報収集とともに最前線での測量も同時に行うことができ一石二鳥ではないかということと三番隊に編入されたのだ。いち早く現地の情報を調達するという意味では重要な任務なのかもしれないが、リツコとしては難儀な話だった。本来の作戦のために行動する部隊の後ろを引つついて歩くのはなんだか足手まといな気がしたし、リツコ自身も危険に身を晒すことになるからだ。

ちなみにビリーはマッドスコープ支部の者だ。本部の三番隊とは別の部隊の所属になる。マッドベースにおいての土地勘があるということで、案内役として三番隊の三人と行動をとりにしているのだ。「分かれ道だ」

先頭を歩いていたエリイが立ち止まって言った。

「そこは左だ」

ビリーがエリイと入れ替わって先導した。リツコは歩数計の数値と分かれ道の向きと角度、そして実際に進んだ方向とを書き取りながら進んだ。距離の計算はあとですればいい。

これまでずっと一本道が続いていた地下通路は不意にその様相を変え、奥に進むにつれて迷宮のように入り組んだ構造になっていく。

「俺もよそ者だから詳しいことは知らんが」
先を進みながらビリーが話し始める。

「ここは昔、かつてマッドスコープとマッドガルドがマッドベースの支配権をめぐって戦争をしていたときに作られたものらしい。サゴマは外敵から身を守るため地下に迷路のような壕を作り、その開発は戦争が終わってからも続いた。今からおよそ二百年前のことだ」
「よそ者って？」

リツコは聞き返した。土地勘があつて案内役をするというくらいだからつきりビリーはマッドベース出身の者だと思つていたので。
「俺は元々サラの世界の人間じゃない。塔の向こう側からやってきたんだ。マッドベースの塔の向こうはアイリスの世界って呼ばれる。ロモコ大陸の古都アリアーネ。それが俺の故郷の名前だ」

「へえ。こつちの世界にきたのはなんで？」

「ご先祖様のことを詳しく知りたいと思つてな」

「ご先祖様？」

鸚鵡返しにリツコが聞くと、ビリーはぼわつと右手から大きな炎を吹き出した。シルバーのスタッドピアスが真っ赤な炎を反射させる。炎は勢いよく立ち上つてすぐに消えた。びっくりして後ろへ下がってしまったリツコはあとで歩数を一分マイナスして計算しなければならぬと思つた。

「ザラさ。俺はザラの血と、それによる発火能力を受け継いでいる。いわゆる炎術使いつて奴だ」

エリイと同じだ。

「ザラはかつてサゴマと一緒にマッドベースで暮らしていたらしい。」

それがやがてマッドベースの塔からアイリスの世界に現れ、ロモコ大陸へ移住してきた。当時その塔の近辺に住んでいたロモコ民族と、移住してきたザラとの混血の子孫が俺ってわけだ。連中の中にはザラの血を憎んでいる奴もいるらしいが、俺はこの能力を気に入っている。是非純血のザラとやらを一目見てみたいと思つてサラの世界までやってきたつてわけだ。ところが、実際にマッドベースに来てみれば既にザラは姿を消していた。残っているのはヘンテコな姿をしたサゴマだけだ。おまけにあいつら外部の人間に対してやたら排他的なんだよな。そもそも言葉通じる奴が少ないし。あらかた事情の説明を受けるとすぐに追い出されちまったよ。でもうちの隊長のフレイ少佐はかつてマッドベースに住んでいたザラの末裔なんだ。来てみて正解だったな　おっと、誰か来るぞ」

不意に前方の曲がり角から人影が現れた。かなり小柄で、マントとフードに身を包んでいる。

あれがサゴマ？

「エリイ、よせ。どうやら味方みたいだ」

剣を抜いて今にも襲いかからんとしていたエリイをビリーが制止した。

マントの者はおずおずとこちらへ近づいてくるとフードを脱いだ。中から現れたのはサゴマではなく、人間だった。

「ルピカです。列車が遅れていたの何かあったのかと思ひ様子を見にきたのですが、ご無事そうで何よりです」

ルピカと名乗る少年はエリイやルカよりもさらに一回り背が低く、年齢も幼く見える。真つ白な明るい金髪と鮮やかなブルーの瞳で凛々しく中性的なその容貌は、澄んだボーイソプラノの声もあいまって美しい少女の姿を思わせる。

「おう。わざわざ悪いな」

「いいえ」

ルピカはリツコたちの姿を見ると向き直つて佇まいを正した。

「マッドスコープ支部所属のルピカ・ロロ」マッドスコープです。

三番隊の皆さんとサゴマの仲介役として参りました。どうぞよろしくお願いします」

礼儀正しくルピカは頭を下げる。

「ロロ＝マッドスコープ？」

ぶしつけにリツコは口にした。

「王子様だよ」

隣でビリーが補足した。

「えっ、あっ、その、ごめんなさいっ」

王子と聞いてリツコはあわてて謝った。

「いえ、気にしないでください。今の僕はアストラピアの一員として行動していますので、どうぞ部下だと思って接してください」

王子が、部下？ リツコは啞然としたが、あまり考えないようにした。

エリイとルカが自分の名を告げてルピカと挨拶を交わしていたので、リツコもそれにならって自己紹介をした。

ルピカとともに先へ進みながら、ビリーが簡単に事の顛末を説明した。列車が事故に遭いマッドガルド軍に襲われたという話をする。ルピカは「やはり列車が止められたというのは本当でしたか」と言って、マッドベースの事情を話した。

ルピカが言うには、マッドベースは現在完全にマッドガルド軍の制圧下であり、六日前に突入してきたマッドスコープ軍はほぼ全滅し、ごく一部の生き残りのみがこの地下壕に逃げ込んで生き延びているとのこと。それを聞くとビリーは「あの野郎の言った通りだったか」と舌打ちした。ルピカは、トンネル内で事故に遭った列車の積んでいた救援物資はマッドガルド軍が回収しに行くらしいという話を耳にして、リツコたちをマッドガルド軍よりも早く救出しようと駆けつけてきたようだ。そして地下の隠し通路からマッドベースへ向かい、マッドガルド軍の目を盗んでサゴマ居住区に潜伏しようというわけだ。また、ルピカは外部の者に対する警戒心の強いサゴマのために予めリツコたちよりも先にマッドベースに潜入し、アス

トラピアの作戦に協力してくれるよう事前に打ち合わせをしていたとも話した。

あれこれと話しているうちに、地下通路の様子はどんどん複雑化していった。この地下壕を作ったサゴマたち自身ですらその全貌は把握し切れていないのではないかとメモを取りながらリツコは思った。

やがて階段が現れて、この迷宮もやっと終わりかと思いきや、厄介なことにその階段がまたやたらと長かった。その段数が二五〇を超えた頃、徐々に風が流れ始め、冷たい空気が吹き込んできた。

顔を上げると果てには白熱電球とは別の明るみが差し込んできている。外だ。

リツコたちは地上に出た。

群青色の空の下、山の稜線を縁取るようにオレンジ色の光が滲み出ていた。夜明けが近い。空もほんのりと明るみを帯びている。ひんやりとした空気が肌を刺す。

リツコは歩数計の数値を書き取ると電源を切ってそれを雑嚢にしまった。

どうやらこの出口は完全にサゴマ居住区の内部にあるらしく、見渡す限りマッドガルド兵の姿は見えない。石造りの家屋が続くマッドベースの街並みは高低差に富み、ここからはかなり広い範囲が見渡せる。マッドスコープ軍がたつた六日足らずで全滅したというのもうなづける。ここはまるで天然の要塞だ。

マッドベースの内部は盆地のようになっており、街全体がぐるりと岩山に囲まれている。足元にはしっかりと土があり、あたりにはいくらか草木も生えている。いまいちどという構造なのかはつかめないが、ビリーが一枚岩と呼んでいた部分から抜け出てきたということは確かなようだ。あの視界の彼方に見える岩山のような稜線もマッドベースを構成している一枚岩の一部なのだろうか。だがその稜線も一ヶ所は途切れており、その形は視力検査のランドルト環

を思わせる。高地になった部分が岩山のような稜線をさらに越えて地平線の彼方まで続いているのだ。ここから見る限りではそれはマッドベースの一枚岩の上にさらに高台となる地面が覆いかぶさっているように思える。リッコはマウントオーガスタスのような巨大な岩石の塊がさらに巨大な山の斜面に食い込んでいる様子をイメージした。岩山はマッドベースのほんの一部分に過ぎず、最高峰は土でできた山なのかもしれない。

その高台になった場所を見上げると、遠方には物見櫓が立ち並んでいるのが見える。ここからその姿は確認できないが、今でも弓兵が目を光らせているのではないだろうか。リッコは咄嗟に物陰に隠れようかと思っただが、やめておいた。どうせあんなところから見つかりはしない。

「酋長のところへ案内します。ついてきてください」

ルピカはフードをすっぽりをかぶって頭を隠し、居住区の奥へ向かった。リッコたちはそのあとに続いた。

リッコの胸のあたりまでの高さの石塀が柵田のように続き、随所に石段がありその地形は砦の外堀を思わせる。居住区はひっそりと静まり返り、生活感がまるでない。街路の脇には背の低い外灯が並んでおり、そばを通り過ぎるたびにひとりでに明かりを灯していく。石造りの家屋はどれも妙にこじんまりとしている。それは斜面の多い土地で十分な広さが確保できないためばかりではないらしい。家の入り口に取り付けられたポリ塩化ビニル樹脂の扉もやけに小さく、子供の遊具を連想させる。どうやらここに住んでいるサゴマというのは、人間と比べるとかなり体格の小さい種族のようだ。

「ここが酋長の家です」

居住区の奥地、あまり目立たないところに位置したそれはやはり他の家と同じように小さくうらぶれて見えた。

「酋長はマディミール語、テレネア語のどちらも通じますので、安心してください」

ルピカがエリィ、ルカ、リッコを見て言った。三人は緊張した面

持ちで小さくうなづいた。ビリーだけが余裕のある表情をしている。ルピカはドアノッカーを鳴らした。こんこん、こんこん、と二回に分けて金具を叩く音が響く。

すぐには反応が返ってこなかった。家主は寝ているのではないかとリツコは思った。しかしやがて中から何か湿った重たいものがひたひたと這うような音が聞こえ、ノブをつかみ鍵を開ける気配がして、扉が開いた。

エイリアンだ。リツコが初めに抱いた印象はそれだった。

子供のような背丈の割に大きな豆型の頭部には額の側面に握り拳ほどのサイズの黒い複眼が一對突出しており、その内側には蛙の卵のような単眼がさらにもう一對ついている。鼻はなく、小さくすぼめた黒い唇の上に向日葵の種のような細長い鼻孔が二つ並んでいるだけだ。耳はどこにあるのか分からず、毛髪もなく、頭は真ん丸く禿げ上がっている。鱗に覆われた緑灰色の肌にうつすらと内臓の透けて見える白い腹は魚類の体を思わせた。

「アストラピアの者だな。話は聞いている。入れ」

酋長は老人のように低くしわがれた声で言った。事前にルピカの説明を受けてはいたがそれでもリツコは酋長が人の言葉を喋れるということに衝撃を覚えた。

水かきの残る四本指の手で扉を押し開けると酋長は長い尻尾を翻して中へ入っていく。

「では、失礼する」

ビリーが頭をかかめて扉をくぐる。リツコは「お邪魔します……」と小さくつぶやきながらおずおずと中へ入った。ルピカが最後に扉を閉める。

部屋の中は質素で華やかさに欠けていた。壁、天井、床は全て灰白色の表面がそのままむき出しになっている。部屋の中央にはスチール製のテーブルと椅子が置かれている。どちらも折りたたみ式で、そしてやはりどれもが子供用のサイズのように小さい。奥にはキッチンがあり、シンクの横に置かれた鍋からは甘い香りが漂ってくる

が、ガスコンロのようなものは見当たらない。流し台の面した壁には罎戸で閉め切られた出窓がある。キッチンの中には食器棚があり、右にはよく分からない金属製の重厚な箱がある。何かの機械の装置だろうか。天井から吊るされている笠をかぶったりリング状の丸い蛍光灯が仄かに九十年代以前の日本の家庭を想起させる。

「座りたまえ」

長方形のテーブル一つに対して、椅子は四つしかなかった。部屋の中には六人いる。酋長は椅子が足りていないことに気づくと「おっと、すまない。すぐに用意する」と言って書斎から肘掛け椅子を一つ、納戸から丸椅子を一つ持ってきた。

各々それぞれの椅子に腰掛けた。テーブルは炬燵や卓袱台よりは高いが一般的なダイニングテーブルよりは低いといった中途半端な高さで椅子もかなり低く、ルカは座り心地が悪そうに何度もスカートの裾を引つ張っていた。

「状況は想定していたよりもかなり悪い。マッドスコープ軍は壊滅し、補給作戦は失敗。事態は予定通りに進まず、当面の作戦も変更しなければならぬ。だが安心してくれ。マッドガルド軍も我々サゴマの居住区にまでは攻め込んでこない。奴らが野戦陣地を築いて支配下に置いているのも、マッドベースの地上部分だけだ。内部の地下壕、地下通路はまだその存在すら知られていない。ひとまずお前たちをここで匿うことはできるというわけだ」

酋長はそこまで話すと言葉を切って立ち上がった。

「疲れただろう。積もる話もあるだろうが、まずは食事にしよう」
リッコはぐうとお腹が鳴るのを感じた。あわててその音をこまかすように「手伝います」と言って立ち上がった。ルカも一緒に席を立ち、二人は酋長に指示されるまま食事の準備に取り掛かる。

鍋を開けると中にはとうもろこしのスープが入っていた。中身は既に十分に温まっており、もくもくと白い湯気が立ち上る。鍋の下にいくつボタンがあることから察するに、どうやら誘導加熱を利用した電磁調理器のようなものらしい。リッコは人数分の椀にスー

ブをよそった。

ルカはテーブルに食器を並べている。フオークもスプーンもやけに細長い。リッコは酋長の顔を見て理解した。サゴマは口が小さいのだ。

酋長はばかつと重厚な金属の箱の蓋、もとい扉を開けた。冷蔵庫だ。酋長は中からグラタンやパイなんかを作るのに使うような土焼きの平鍋を取り出すとフライパンを調理器にかけてその中身を加熱した。アスパラとベーコンとじゃがいもと玉葱のオリーブオイル炒めだ。しばらくすると冷えて固まった油脂が溶解し、じゅーじゅーと小気味よい音を立てる。そのあいだに酋長は納戸からオレンジの入った籠を持ってきて果物ナイフと一緒にテーブルに置いた。フライパンから香ばしい匂いが広がってくると酋長は火を止めて中のものを土焼きの平鍋に戻した。ルカがどこからか杓子を持ってきてそれを鍋に添えた。

リッコとルカが席に着くと酋長は冷蔵庫から筒状の容器を取り出し、ルカがテーブルに並べたコップにその中身を注いだ。「ラクダのミルクだ」と酋長は言った。白い液体がなみなみと注がれていく。ミルクの容器をテーブルに置くと酋長は「さあ、好きなだけ食べてくれ」と言っただけで席に着いた。

リッコは「いただきます」と手を合わせてとうもろこしのスープに口をつけた。ルカは手短かに食前の祈りを囁くとみんなの取り皿に料理を取り分け始めた。その途中で「酋長は召し上がらないんですか?」とルカが聞いた。酋長はただ椅子に座ってミルクを飲んでいくだけだ。

「我々サゴマはお前たち人間と違って二、三日に一度しか食事を取らないのだ。それゆえ、我々が口にするもの多くは保存が利く食べ物ばかりだ。あまり日持ちがしないものは余ってしまったもどろせあとで困る。遠慮せずに食べるといい」

「え? 二、三日に一度?」

リッコは思わず聞き返した。

そもそもサゴマが人間とほとんど同じものを食べるというのがリツコにとっては疑問だった。サゴマにはサゴマの食事があるのではないだろうか。調理されたものをちまちまと皿によそって食べるのではなく、野生の小動物を生きたまま捕食したりするのではないだろうか。あるいは自分たちにこんな風に食事を振舞うのは、肥えさせておいてあとで食ってしまったためではないだろうか、などとリツコはあらぬ疑いを立てた。

「サゴマは僕らのような哺乳類から進化した生き物と違って、常に体温の維持に大量のエネルギーを浪費し続けることがないんです。そのため一日の大半を睡眠に割り、哺乳類をはじめとする他の多くの恒温動物と比べて活発に行動できる時間が制限される代わりに、平均寿命が非常に長いと言われています」

ルピカが説明した。

「そういうことだ。我々も体温を調節するための機能がないわけではないが、人間たちほど能動的に体の中で熱を起こすことはない。それに我々は体温が摂氏五十度を上回ったり摂氏三十度を下回ったりしても命を落とすことはない。ただ行動が制限されるだけだ」

酋長はルピカの説明にうなづきながら、蛙の卵のような単眼をぱちくりさせた。よく見ると目蓋が二枚折り重なっていることにリツコは気づいた。リツコは酋長と会話をするときには単眼と複眼のどちらの目を見て話せばいいのか判断がつかなかった。酋長の目からは世界はどのように映っているのだろうか。

リツコは細くて扱いにくいフォークでアスパラとベーコンを刺して口に運んだ。奥歯でそれを噛み、じわりと口の中に肉の味が広がった瞬間、ルカが敵兵を焼き尽くしたときのあの強烈な異臭が蘇り、リツコは不意に喉元まで不快感がせり上がってくるのを必死にこらえた。リツコは強くあごを噛みしめ、努めて表情には出さないようにしながらミルクで中のものを喉に流し込んだ。リツコはなるべく他のことを考えるようにしながら既に皿の上に取り分けられた分のベーコンを全て片付けると、それからはベーコン以外のものを進ん

で口にした。

とうもろこしのスープは懐かしい味がした。リッコは少しか郷の料理を思い出した。ビリーやエリイはその味が気に入ったのか何度もスープをお代わりした。酋長はその様子を微笑ましそうに眺めていた。

ルカと酋長が後片付けをしているあいだ、リッコは表に出て煙草に火をつけた。もうすっかり太陽は地平線の上に昇り、朝の清々しい日差しを受けて空は真っ青に澄み切っている。リッコは地べたに腰を下ろし、石造りの壁に背を預けると煙を深く吸い込んだ。空を見上げて、ゆっくりと煙を吐き出す。ずっと穴倉の中にいたもんだから、陽の光が随分とまぶしく感じる。

「ヤニ、持ってねえか？」

玄関から出てきたビリーがリッコの隣にどかっと座り込んで言った。

「今ので最後」

リッコがにべもなくそう言うと、ビリーはリッコの手から煙草をひったくって残りを吸った。

なれなれしい男だ。

リッコは無言のままポケットから新しい煙草を取り出して火をつけた。オイルライターのフリントがとがった音を鳴らす。

「なんだ、まだあるじゃねえか」

「あんたに渡す分はないってこと」

「つれない奴だなあ」

ビリーはからからと笑った。

朝日を受けて蒼むした緑色の部分が見える岩山の峰の近くを大きな野鳥が滑るよつに飛んでいた。今日は天気がよく空気も澄んでいて遠くまで見渡すことができる。

「なあ、お前……一体どこからきたんだ？」

いつかその質問は来るだろうなと思っていた。

「話すとき長くなるよ」

リツコがそう断ると、ビリーは無言で続きを促した。

「グレゴリウス暦二〇十二年　今から十二年前、当時私がまだ七歳だった頃　私たちの世界に一つ目の塔が現れた」

リツコは予め用意していた答えを、少しずつ整理しながら話し始めた。

「塔は、ユーラシア大陸の西の果て、スペインという国で発見された。当時のスペインの国力はまだヨーロッパの中でも主要国に次ぐ水準といった程度のもので、世界有数の大国とは比べ物にならないかった。ところが塔が現れて以降、事態は一変。スペインは一挙に世界中に対して絶大な存在感と発言力を誇る大国となった」

そこで一度リツコは言葉を切った。煙草をくわえ、ゆっくりと深く吸い込んだ。じじ、と紙煙草の先端が焦げる音がして、喉の奥で煙が鼻孔をくすぐり香ばしい匂いが広がっていく。煙を吐きながらリツコは人差し指でとん、と叩いて脇に置いた小さな灰皿に灰を落とすとした。

「独裁政権崩壊後、一九七八年に新スペイン憲法が制定されて以来、スペインは地方分権志向が高まっていた　要するに地域ごとの仲が悪くてまとまりがないってことだけだ。特に経済格差が問題とされていた南部と北部の対立は根強く、中央政府が完全にスペイン全域を支配するまでには少し時間がかかった。でも結局、スペインは国内を安定させると塔からの利益を独占して塔を保有する唯一の大国として台頭し、その影響力を全世界に行き渡らせた」

リツコは最後の一口を名残惜しみながら吸い、短くなった吸殻の火をもみ消すと灰皿にしまつて蓋を閉じた。

「それまで世界はいくつかの经济圈に分かれていて、危うい力関係の中でなんとか拮抗を保っていた。それがスペインの台頭によってバランスが崩れたのね。世界中の国々が混乱し、誰もが自分たちの足元を安定させようと奔走していたとき、スペインはそんな中で一人勝ちしようとした。誰とも手を組まず、一人で中立の立場を保と

うとした　もとい、それはもちろん中立なんて名ばかりで世界の全てを敵に回すことになるんだけど　まあ、それだけならまだよかった。問題はそれからさらに数年後、ユーラシア大陸の東の果て、周りの全てを海に囲まれた国で二つ目の塔が発見された。これが私の生まれ育った国、日本　」

リッコは青い空の果てを眺めながら言った。あの地平線の向こうにも祖国の姿はないんだと思うと少し寂しくなった。

「当時はね、まさか日本に二つ目の塔が現れただけで世界があんな風になるとは思ってたなかった。けど思ってた以上に日本の政治家は馬鹿だった。日本は真つ二つに分裂した」

乾いた涼しい風がそよそよと吹いた。背の低い下草がのびのびと風に吹かれて揺らいでいく。

「私は塔を保有している側にいた。向こうで私は今のアストラピアみたいな組織に所属してその活動に関わっていたんだけど、あるとき事故に巻き込まれて　気がついたらリーヴの世界のアステナ王国に迷い込んでたってわけ。私のいた世界は私の国ではイヴの世界って呼ばれてたんだけど、アストラピアの人に連れて行かれて事情を説明しても、私がどこをどう経由してきてそこに現れたのか皆目見当つかなかった。つまり私は時空を超えた迷子さんってこと」

まだ明かしていないことがいくつかあったけれど、リッコはそこでひとまず話を終えた。

「なるほどな」

「ビリーはゆっくりとうなづいた。

「未知の世界の住人ってわけか。どうりでアストラピアがお前を手放そうとしないわけだ」

「丁寧に扱ってくれるのはありがたいんだけど、その割にはこき使われてる気がするんだよね」

「それだけ期待されてるってことだろ」

「過度な期待はプレッシャーだよ」

「そんなことで音を上げるようなタマには見えねえけどな」

リッコは不安げな口ぶりを装って言ってみせたが、どうやらベリ
ーには見抜かれていたようだ。確かにリッコは実際のところ組織か
らの過度な期待のせいで仕事が増えることを面倒くさがっているだ
けで、それ自体に気詰まりを感じているわけではない。

キッチンの片付けが終わり、リッコたちは再びダイニングのテー
ブルに着いていた。

「さて、本題だが」

ベリーが話を切り出した。

「まずはうちの隊長　フレイ少佐の消息について何か知っている
ことがあれば教えていただきたい」

酋長は食後の温かいコーヒーと、そしてなぜか口取りにチーズを
振舞っていた。リッコはマグカップに口をつけた。コーヒーはやた
らと味が薄かった。

「少佐はマッドガルド軍に連れて行かれた。それ以降の消息は知ら
ん。まだ投獄されているのかもしれないし、あるいはもう既に処刑
されてしまっているのかもしれない」

酋長から返ってきた答えは、リッコたちアストラピアが予め想定
していた内容とほとんど変わらなかった。そして、そこにそれ以上
の具体的な情報は含まれていない。

「連れて行かれたというのは、隊長がスリーロード曹長に代わって
改めてマッドベースに来て話を伺った日のことぞ？」

「その通りだ。我々もその後の消息は全くつかめていない。あれ以
来、三ヶ月間ずっとだ」

酋長の答えは変わらなかった。ベリーは「うーむ」とうつむいて
うなる。その間、ルピカが何か言いたげにベリーのほうを見ていた
が、彼が何か話すよりも早くベリーが先に口を開いた。

「明らかになったことが二つある。一つは、隊長はここで戦死した
のではなく、少なくともその時点ではまだ生きていたということ。
もう一つは、隊長はここで姿を消して行方不明になったのではなく、

確かにマッドガルド軍に捕まって連れて行かれたということ。ここから想定される状況は二つ。酋長が付言された通り、まだマッドガルドのどこかで身柄を拘束されているか、あるいは既に処刑されているかのどちらかだ」

当たり前前のことをまとめただけだが、ビリーはそう言うて状況を整理した。確かにビリーの言う通り、状況の確認が取れていなかったこれまでと比べれば、ある程度今後の方針は定まったといえる。

リツコはチーズをつまんで口に運んだ。意外とそれは美味かった。イメージしていたような味とはやや毛色が違っており、リツコは少し驚いた。

そうか、これが駱駝のチーズか、とリツコは二つ目を口にしながら気づいた。乳牛のチーズとは違うのだ。

「で、これから具体的にどのような手段を講じていくかだが」
問題はそこだ。リツコたちが乗ってきたコンテナは列車ごとトンネル内で大破してしまった。さらにマッドガルド軍が回収に向かったとのことなので、あのコンテナを隠れ蓑として再び使うのは難しい。

「予定していた作戦としては、マッドベースからマッドガルドへの貨物列車のコンテナの中に国家機密の機械の部品として密封されたままの状態で紛れ込み潜入　ということだったが、ここからマッドガルド兵に見つからずに列車の中まで忍び込めるだろうか。酋長、御身の意見を伺いたい」

「ここから生身のまま歩いてマッドガルド行き列車まで潜り込むというのは無理だ。途中で歩哨が見つかる。あれは予め箱の中に隠れた状態で列車に運ばれてくればという前提の上で可能だった作戦だ」

酋長はコーヒーの入ったマグを口に運んだ。円筒状の縦に長いマグだ。サゴマの食器はとにかく小さな口で飲み食いすることを考えて作られているようだ。

「だが少々危険でも構わなければ、いい案がある。見たところ、お

主とそこのお嬢さんはザラだろう」

酋長はちらりとエリイのほうを見て言った。駱駝のチーズに夢中になっていたエリイは不意に自分が話題に上げられてきよとんとした顔をする。

「地下の格納庫に、炎を動力として空を飛ぶことのできる乗り物がいくつか残っている。先の戦争でかつてのザラが使っていたもので、我々はそれを火力船と呼んでいる。大昔の骨董品だが、フレイ少佐の話聞いてこんなこともあるうかと一通りの整備はしておいた。動作の保証はできませんが、お前たちなら動かすことができるはずだ」

「少佐とはどんな話を？」

思わずリツコが口を挟んだが、酋長は「それはお前の知るところではない」と一蹴して元の話が続けた。

「ザラが二人いれば二台動かせる。元々複数人が乗るためには作られていないが、二人ずつ乗ればなんとかなるだろう」

今この場にいるのは酋長を除いて五人だ。一人余ることになる。

「了解した。恩に着る」

ビリーは酋長に一礼するとルピカに向き直った。

「ルピカ、ここまで世話になったな。すばらしい活躍だったぞ。王子殿下の名に恥じない働きだ。帰り道は気をつけてくれ」

「いいえ、僕もついて行きます」

ルピカは本来マッドガルド潜入作戦に直接的には加担していない。リツコはビリーの言葉に納得したが、ルピカは断固として譲らなかつた。

「危険な任務になるんだぞ。すぐには帰ってこれなくなるかもしれない。下手をすれば命を落とす危険だつてある」

「覚悟はできています。僕は一人でも戦えます。足手まといにはなりません。必ず役に立ちます。お願いです。連れて行ってください」

ルピカは真摯なまなざしでビリーを見上げた。まっすぐとビリーを射止めるトルコ石色の双眸には幼いながらも雄々しさを思わせる決意が宿っている。こんな瞳で見つめられたら敵わんだらうなあ

リッコは思った。事実ビリーは折れた。

「分かったよ。お前の意思を尊重しよう。エリイとルカと三人でならなんとかなるだろう」

総重量何キログラムのパーティーだ。

「私は一人で飛べるから平気だけど」

ルカが言った。魔術師は幕で空を飛ぶことができるのだ。

「そうか。なら問題ないな」

ビリーはメンバーの頭数を数えてうなづいた。

「話はまとまったようだな」

一連のやり取りを見守っていた酋長が再び口を開いた。

「出発は日没後にしよう。マッドベース上空は絶えず哨戒の魔術師が飛び交っている。闇の乗じて抜け出すんだ。移動の疲れもあるだろう。今日は一日ゆっくり休んでくれ」

そう締めくくると酋長は「地下壕の入り口だけ先に教えておこう」と言ってリッコたちを納戸の奥に案内した。納戸は両側の壁に調味料や果物のジャム、酒類、保存食などの置かれた棚が並んでおり縦長の狭い空間になっていた。他にも足元には豆、とうもろこし、じやがいもなどの食材が入った木箱や袋などが置かれ雑然としている。納戸の中だけ床が板張りでおがくずの匂いがした。体の小さい酋長は難なく奥へ進んでいくが、リッコたちは狭い中で足の踏み場を探したり腰をかかめて進んだりしなければならなかった。やがて目当ての場所に辿り着くと酋長は足元にしゃがみこんで跳ね上げ式の蓋のようになつた扉を開けた。床下には人が一人やつと入れるくらいの大きさの穴が開いている。トンネルの中で見たあの隠し通路と同様に小柄なサゴマは難なく滑り込めるが、鎧を身にまとった人間の兵士は窮屈するという寸法だ。

「この奥が格納庫に続いている。他にも睡眠室や図書室、浴室などの地下街もその途中にある。自由に使ってもらって構わんが迷子にならんような」

手短に説明すると酋長は居間に戻って「食事は残っているものを

適当に使ってくれ。食材は日持ちのしないものから先に片付けてくれるとありがたい」と言った。ル力がそれに深々と礼を言って頭を下げる。

「日が暮れたら格納庫まで案内する。それまでのことは任せた。あまり外には出るなよ。何かあったら呼んでくれ」

それだけ言うと酋長は書斎の寝台の上で横になった。真っ黒い箱型の寝台はまるで棺のように見える。酋長が枕元で何か操作すると自動的に蓋が閉まった。カプセルベッドだ。

あんな風に密封してしまつて酸欠とかにならないんだろうか。あるいはサゴマは呼吸などという原始的な生命維持活動はそもそも行っていないのかもしれない。

「というわけだ。それじゃ各自、十七時までにはこの部屋に集合ということにしよう」

ビリーが一時解散を促すとエリイは早々に「寝る」と言つて書斎の脇の小さなソファで丸くなった。列車の中で寝ていたリツコは平気だったが、エリイはもう完全に熟睡の体勢に入っていた。ル力は部屋の中を一通り見回すと「この家には毛布つてもんがないのかしら？」と言つて自分の上着をエリイの体にかぶせた。

砂漠の巨人 二

リツコは地下壕の探索をすることにした。跳ね上げ戸から床下に入り、小さなはしごのかげられた縦穴を降りる。意外と深さがあり、数メートルは土の地面が続いたが、やがて岩盤層の内部に辿り着いた。足を下ろすとトンネルから続いていた隠し通路と同じように自動的に電灯がつく。硬い壁に囲まれた通路は殺風景で生活感に乏しく時が止まったように静まり返っている。

雑嚢は部屋に置いたまま、リツコは羅針盤と量程車、歩数計、筆記用具など必要なものだけを持ってきていた。縦穴の真下で行き止まりになった部分の壁に量程車の車輪を合わせると、それを転がして羅針盤で角度を確認しながら距離を測り始める。

マッドベース領地内の測量のために持ってきた測量器具のほとんどは残念ながら役に立ちそうになかった。その土地の一部でもマッドスコープ軍が制圧していれば少しでも地上部分の測量を進めることができたかもしれないが、全域がマッドガルド軍に制圧されてしまっていては仕方がない。制空権を握られている限り地上で迂闊な動きはできない。リツコはこれからまたしばらくあの重たい荷物を無意味に持ち運ばなければならぬのかと思うと少し気が滅入った。魔術師を中心に多くの者が好んで使っているリングがあれば荷物の持ち運びに煩わされることはないのだが、その扱いにはある種のこつのようなものが必要らしく、リツコはまだその技術を習得していない。根本的な構造は魔術師が魔術を行使するのに用いる杖と同じ原理らしく、当初はその多くが指輪を模して作られていたためリングと呼ばれている。小さな宝玉がはめ込まれており、指輪や腕輪、あるいはペンダントなど基本的にアクセサリとして身につけられる形になっている。使用者の意思に従って特定の物体をリングの中に封じ込め、また必要なときにはそこから取り出すという仕組みだ。物体をリングの中から解放するためには予め余裕のある広さの空間

を確保しておく必要があり、狭い場所では失敗しやすい。成功すると水素が燃焼するときのような小気味よい破裂音を立てて瞬間的な空気の膨張とともに中のものが現れる。ただしその対象は、使用者自身の所有物に限られる。つまり自分の持ち物以外は封じ込めることができないというわけだ。

このあたりがリツコにとってはややこしい話となってくるのだが、魔術師にはその技術上の概念に支配力というものが存在する。魔術師が何らかの物質や物体を魔術によって操るためには、その対象を自分のものとして支配している必要がある。例えば魔術師が箒を使つて空を飛ぶのは、その箒を自分のものとして、さらにいえば自分の体の一部として支配していることが重要らしい。その物体の形状、大きさ、質量、硬度など様々な要素を熟知していることが支配力の強さに影響する。両者に絶望的な力量差でもない限り魔術によって相手の所有物を奪うことはできないというわけだ。

それと同じようにリングでものをしまうのもその対象を自分のものとして支配している必要がある。まだ使い慣れていない道具などはなかなかスムーズに出し入れすることができない。最初のうちはなくしても困らないもので何度か練習してこつをつかんでおかないと、一度しまったはいいがそれから取り出すことができないという事態に陥ってしまうことがしばしばある。単純な構造物ならまだいいが、雑多な荷物が入った雑嚢をまるごとしまい込んで再び取り出すということを造作もなく行うためには途方もない訓練が要求される。おまけに雑嚢の中身は頻繁に変化する。リツコはリングを使いこなすのを諦めて当面のところは自分の手で荷物を持ち運ぶことを選択した。

車輪のついた小さな箱型の量程車を紐で引つ張りながら歩く姿は、リードで首輪を繋いだ小犬を散歩させるのとよく似ている。量程車は小さい割にはやや重たいつくりになっている。車輪の滑走を防ぐためだ。天然ゴムで覆われたブリキの車輪の回転数を箱の内部で歯車が計数し、距離を測るといふ仕組みだ。地面や床が平らでありさ

えすれば縄や鎖で測るよりは手間がかからないし、歩測よりも正確だ。とはいえ誤差が出ないわけではない。リツコは常に一定の歩幅で歩く技術が既に身につけていたので、歩数計も併用して精度の向上を図っている。

一本道はすぐに終わり、通路は入り組んだ構造の地下街のような場所に出た。人がすれ違うのに苦労するような細い通路とは打って変わって、道幅が広く天井も高い。各所に案内板があり、広い道を基幹として葉脈のように通路が伸びている。天井は通気管や水道管のように見えるパイプが網羅しており、その付近にはコードやケーブルの類が幾本も束になって走っている。

リツコは案内板の文字を読みに行ってみたが、それは何語で書かれているのかも分からなかった。マディミール語のようにも見えるが、もしかしたらサゴマ独自の言語に由来する文字が使われているのかもしれない。いずれにしてもリツコが読める文字はアステナ王国で使われているテレーニユという文字だけだ。未だに数字を書くうとするアラビア数字のほうが先に出てくる。テレーニユは統一言語であるテレネア語から派生した比較的歴史の新しい表音文字で、その綴りと発音はかなりの割合で一致している。そのためテレネア語を母語としない者にも分かりやすく習得が容易なのだ。テレーニユはアステナを含むリーヴの世界の国々で使われているだけだが、テレネア語は塔をまたいだ異世界でも共通語や公用語としてより多くの国々で話されている。統一言語といえれば仰々しいが、異なる文化圏同士の接触による混成言語がクレオール語のようにその話者の子孫たちに受け継がれていつて定着したものだ。リツコは考えている。

リツコは元来た道の経路を手帳に図引きして簡単にマッピングしながらしらみつぶしに通路を進んで各々の施設を歩いて回った。途中で二人のサゴマとすれ違ったとき、リツコは友人の家で主が席を外しているあいだに他の兄弟や姉妹と顔を合わせたときのような気まずさを覚えた。何と言えればいいのか、そもそも言葉は通じるのか

などと思いながら、リッコはとりあえず軽く会釈をした。一人はちらりとリッコを一瞥するときこちなく頭を下げた。もう一人はリッコの量程車をじろじろと見ていたが、別のサゴマがリッコには分からない言葉で何事か話して注意を促すと無言のまま立ち去った。かたかたと骨を鳴らすような不思議な声だった。あるいはそれは声ではなかったのかも知れない。

医務室のような場所では生き残りのマッドスコープ兵がサゴマの手当てを受けていた。白いシートと布団の敷かれた人間用のサイズのベッドが並び、負傷したマッドスコープ兵は熱にうなされるようにしてそこに横たわっている。何人かのサゴマは負傷した兵士たちの包帯を取り替えたり、診察をしたり、彼らに食事を取らせたりしている。普段は衣類を着ていないサゴマが地肌の上から化学繊維の衣服や手袋を身につけているのはなんだか奇妙な光景だった。あご全体を覆うような白いマスクは引っかける耳がないためバンドのようなもので後頭部に固定している。サゴマの一人は大きなデスクでカルテのような書類に何か書き取っている。デスクの向こう側には手術台のようなものが見える。

リッコは医務室の入り口のそばでしばらくサゴマたちの様子を眺めていたが、邪魔になってしまっただけでいいけないと思いつき去ろうとした。だがそのとき不意に後ろから「やあ」と声をかけられた。人間の声かと思つたが、振り向いて医務室の中を確認しても兵士たちは全員ベッドに寝たままだ。視線を移すとデスクに座ったサゴマがリッコのほうを見ていた。リッコは「こんにちは」と言つてぺこりとお辞儀した。

「君が今回の戦いで救世主として現れたアストラピアかい。お目にかかれて光栄だよ」

サゴマはマスクを外すと椅子を引いてリッコのほうに向き直りデスクの前に置かれた丸椅子をぱんと叩いた。リッコは量程車が転がっていかないようにロックをかけると歩数計を一時停止させて医務室の中に入った。他のサゴマたちの奇異の視線がリッコに集まる。

「僕はここで彼らの治療を担当している医師だ」

リッコは丸椅子に座った。人間の腰の高さに合った大きさの椅子だ。

「私は、ええつと……アストラピアで測量士として働いてる……リッコです」

リッコはぎこちなく答えた。まだサゴマと会話するには慣れていない。

「仕事の途中だったら申し訳ない。せつかくだから何か話しておきたいと思つてね」

「いいえ、どうせ暇を持て余していたので」

むしろあなたこそ仕事ではないのか、とリッコは思った。

後ろで他のサゴマが何か言った。かたかたと木琴を打ち鳴らすような奇妙な声だ。医師が振り返つて何か喋った。同じように不思議な声で。リッコはガラガラヘビの威嚇音を連想した。

「悪いね。ここの連中は君ら　つまり人間たちのことをあまりよく思つてない奴もいるんだ。どうか気を悪くしないでくれ」

「今のはサゴマの言葉ですか？」

「ああ、そうさ。僕らサゴマの独自の言葉だ。言葉といつても厳密には、君たちが使っているような声帯とは別の発声器官によるものだけだね」

「別の発声器官？　あのカラカラっていう乾燥した蓮の実を鳴らすような音でコミュニケーションを取ってるんですか？」

「いや、違うね。あれはただ僕らが言葉を発する際に一緒に生じるノイズのようなものさ。僕らサゴマの喉には君が乾燥した蓮の実と言つたような器官があつて、その音を鳴らすことで特殊な音波を生させるんだよ。その音波が僕らにとっての言葉の本質であつて、カラカラと聞こえる音は人間でいうところのただの鼻息みたいなものだよ。まあでも実際のところ、僕らは音波による言葉とは別にそのカラカラと鳴る音によつて抑揚や感情を表現しているともいえるね。人間たちの耳には僕らの発する音波は聞こえないみたいだけど、

僕らが喋るときに鳴る喉の音は聞こえるだろう？ それである程度は意思疎通を図ることもできるみたいだよ」

「あなたが人間の言葉を話すことができるのはどうしてですか？」

「人工声帯だよ。僕や酋長のように他の人間とコミュニケーションを取る必要のある立場の者は、人工的に作られた声帯を喉に取り付けて話しているのさ」

声帯なんて人工的に作れるものなのだろうか？

「僕らも人間の言葉を理解することはできるんだよ。それは人間と同じ声帯を持たない他のサゴマも同じさ。もちろん中には分からない奴もいるけどね」

リツコは流暢に人間の言葉を話す医師の口元を注意深く観察した。黒い唇の内側には暗灰色の歯茎に小さな薄い歯が並んでおり、その奥からざらざらした細長い舌が覗いている。医師の喋り方は舌足らずで聞き取りにくい部分もあったが、声自体は人間のそれとほぼ同質のものだった。リツコは違和感を覚えた。仮に声帯を人工的に作ることが可能だったとしても、その声はあまりにも人間のものと酷似しすぎていたからだ。

「ところで、君は魔術師というものの存在についてどう思う？」

医師は不意にそんな問いを投げかけた。リツコは何と答えたものかと少し考え込んだ。他のサゴマがリツコの背後を通りかかって薬品棚から何かの小瓶を持って行った。

「最初はすごく驚きました。私が住んでいた世界の国々でも、魔法や魔術のように扱われるものはありました。でもそれはどれもここでいうところの魔術のように知識や技術が体系化され大きな一つの文明として確立したものではありませんでした。私の世界の文明は主に機械と電気と化石燃料で成り立っていたんですけど、その水準は全体的に見れば魔術による文明のそれを凌いでいたと思います。それでも魔術は私たちの文明を遙かに凌駕する部分を数多く持っています。私にはそれがとても興味深いです」

「機械と電気か。君の世界の文明は僕らサゴマの持つ技術とかなり

共通している部分があるといえるね」

「医師は何度も小刻みにうなづいた。」

「魔術師に対して抱いている雑感としては、僕も君の意見に同感だ。僕らから見ても彼らの技術力はすさまじいといわざるを得ない面がある。これを見てくれ」

「医師はデスクの引き出しからペトリ皿を取り出した。中にはビー玉程度の大きさの丸い小石が真つ二つに割れたようなものが入っている。」

「これはあそこで寝ているマッドスコープの兵士の体から摘出したものだ。魔術師の操る弾丸さ。兵士はこれでマッドガルドの魔術師に撃たれたわけだよ。ただの石ころのように見えるだろう？ ハンマーで叩いてもなかなか割れない。ただ表面が砕けるだけだ。これは専用のカッターで半分に切断したものだけど、断面を顕微鏡で見ると内部は一つの核を中心に砂、塵、埃、粘土などが幾重にも折り重なってできているのが分かる。上空で冷やされた水蒸気が凝結核に付着して水滴を作るのと原理的には同じだね。魔術師はこれを瞬時に空中で作り上げる。まるで錬金術のようにね。そして無数に作り出した弾丸を発射して敵を襲うというわけさ。恐ろしいだろう？」

「……マッドスコープ軍はマッドベースでの戦いでどのようにして敗れたのですか？」

「地の利だよ。マッドベースの地形は防衛側が圧倒的に有利なんだ。斜面が多く起伏の激しいマッドベースではマッドスコープ軍の用いていた大弓や弩砲なんかの武器はその力を十分に発揮できなかったといえる。それに対してマッドガルド軍の魔術師たちは空を自由に飛び回ることができる。すり鉢状の狭い地形に追い込まれ魔術師たちの空からの攻撃を受けたマッドスコープ軍はひとりもなかった。僕が見ていた限りでいえることはこのくらいかな」

「なるほど……」

「それにしても僕が驚いたのは、この弾丸で撃たれた兵士が何とか

一命を取りとめたことだよ。人間の体の構造は非常に複雑で興味深いね。僕らの体と比べて根本的な相違点がいくつもある。特に一番驚いたのはやっぱり自然治癒力だよ。人間の表皮は僕らサゴマの体とそれと比べて随分と柔らかくて薄いのに、みるみるうちに傷がふさがっていく様はまるで魔法のように神秘的だったね。一度手足が千切れても放っておけばまた新しいのが生えてくるのかとさえ思ってたよ。ただ腹部を切開したときはこんな消化管で生きていけるのかと心配になったけど。胃が一つしかないなんて、人間は一体どうやって食物からエネルギーを摂取しているんだい？ 小腸もあんまり短いもんだからこれ以上切除しても大丈夫なのかと随分とためらったもんだよ。あと盲腸がもはや消化管としてほとんど機能していないのを見たときは本当にびっくりしたね。一体何を食べて生活していたらあんな体になってしまふんだい？ その割にはやたらと肺がでかくて大きく二つに分かれていたし……肺そんなにいららないだろ……」

次々とまくし立てられてリツコは思わず吹き出した。人間の体の仕組みを不思議に思うサゴマの様子が面白おかしくてリツコはこらえ切れずにけらけらと笑った。

「私たちから見ればあなたたちサゴマも充分不思議に見えますよ。目が四つもあるし、肌が鱗に覆われてて毛が生えてないし、指が四本しかないし、尻尾が生えてるし、背が低い割に頭がでかいし、服を着ていないし、すっぱんぽんだし……」

「服といえばずっと気になっていたことがあつたんだ。君らはいつも何かしら衣服を身にまとっているけれど、そんな状態で人間の雌は繁殖期になったらどうやって異性にセックスアピールをするんだい？」

リツコは腹を抱えて笑い出した。他のサゴマたちが怪訝そうにこちらを見たがりツコは構わず笑い続けた。

「確かに あなたの言う通り 人類は 間違つた進化を遂げたのかも しれない」

ひいひいとあえぎながらリツコは途切れ途切れに言葉を紡いだ。際限なく膨らんでくる下品な妄想をリツコは必死にかき消そうとした。

「でも　まず問題なく　行えますよ。私たちは主に防寒のために衣類を身につけているんですけど、季節を問わず女性は男性に比べて薄着になる傾向があるといえますね」

「なるほどね。薄着のピークが繁殖期のピークというわけか」

何か勘違いしているような気がするけども、大体合ってるから反論できない。

「人間は僕らサゴマと比べてかなり早い段階で子供を産むよね。世代交代の間隔が極めて短い。その分、進化も目覚ましい速度で行われていくというわけだ。人間の体の構造がサゴマに比べてかなり複雑化しているのはそういうった要因もあると思う。その割に、子供を産んでからの寿命が長い。子育てを終えてからも、さらにその子供

つまり孫の祖父母にあたる存在として生き続けるケースも多々ある。祖父母というものの出現は、親と子の二つの世代しか存在しないのと比べてより多くの知識が伝達されることを意味する。これはサゴマにも同じことがいえる。僕らは寿命が長いためより多くの知識や技術を次の世代に残すことができる。しかし僕らは完全に体が成熟しきってからでない子供を産むことができない　いやそれは人間も他のどの動物も同じか。要するに老化が遅い代わりに出産も遅いというわけさ。だからサゴマは進化の速度が極めて遅い。人間と比べるとサゴマは身体的機能は弱いといえるね。同じ知的生命体でも色々の違いがあるもんだ」

医師は随分と話好きのようだった。あるいは人好きなのかもしれない。人間に対する関心が強くなければわざわざ負傷した者を手当てしたり人工声帯を喉に取り付けてまでコミュニケーションを図ろうとしたりはしないだろう。

話しているうちにリツコは徐々にサゴマに対して親近感を抱くようになっていった。得体の知れない謎めいた化け物のようにすら思ってい

だが、その実態が明らかにされるにつれて偏見じみた印象は払拭され、自分たちと共通する部分も多いことからなんだか安心したような気持ちになった。だがサゴマの生懸について詳しく知れば知るほどリッコは同時に恐怖感や不信感も募らせるようになった。

サゴマは人間以上に優れたより高次な存在なのではないか？ サゴマはその内心では人間たちを未開な土人のように見下しているのではないか？ その気になりさえすればサゴマが人類を滅ぼすのは造作もないことなのではないか？

卑屈な猜疑心だとは知りつつも、その感情を完全に取り払うことはできなかつた。

やがて医師は「おっと、長話になってしまつてすまないね。僕も仕事の続きをやらなきゃいけない」と言つて不意に話を打ち切つた。「本当に興味深い話ばかりだつたよ。ありがとう。また何か面白い話があればぜひ聞かせてもらいたいね」

ほとんど自分が一方的に喋つていただけにも関わらず、医師はそう言つて別れを告げた。

「いえいえ、こちらこそ。お仕事の邪魔をしてしまつてすみません。それじゃ私は失礼します」

リッコは礼をして席を立ち、医務室をあとにした。

マッドベースの最奥、街全体が眺望できる高地にマッドガルド軍の駐屯する野営地が設営されていた。遙か後方には晴天を貫くようにしてそびえる果てしなく高い塔の姿がうつすらとかすんで見える。世界と世界を繋ぎとめる力を持つ不思議な塔だ。

野営地の中心部には一際大きな天幕が張られている。マッドガルド王国の最高指導者ファーナ女王の所在する場所だ。

マッドガルド軍の近衛兵長リンフォーン・ローデヴェイクは兜を脱いで脇に抱えると小さく息をついて天幕の中へ入つていった。

「ローデヴェイク中尉です」

天幕の外皮は羊毛でできており、内部には絢爛な刺繍の施された

緞帳が下ろされている。

「どうぞお入りなさい」

正面の薄いレースのカーテン越しに女王が言った。

「失礼します」

リンフォオーネが手を触れるよりも早く、レースのカーテンはひとりに左右に開いた。女王はゆったりとした大きな背もたれのある籐椅子に悠然と鎮座している。

「報告します。マッドスコープ方面のトンネル内にて貨物列車が一本、事故に遭っていました。マッドスコープからの輸送列車と思われます。積荷のほとんどは水、食糧、医薬品、武器などの救援物資。それから作業員が四人紛れ込んでいました」

女王は臙脂色のドレスを身にまもっていた。腰まで伸びた黒い髪は黒曜石のような艶と光沢を帯びている。一国の統治者であると同時に強大な実力を持った魔法使いであるファーナ女王はその身に圧倒的な気品と風格を兼ね備えている。やや面長だが妖艶なその容姿には人を惑わせるような不思議な魔力が宿っているように感じられた。

「そのうち一人は魔術師で、私をおいて他の者は全員やられました。申し訳ありません陛下」

リンフォオーネは咎められるかと思っただが、女王は何も言わなかった。部下が全滅したとの報に動じる様子はなく、ただ黙って続きを促すようにリンフォオーネの瞳を見据えている。

「ですが他の一人は始末　　少なくとも深手は負わせました。恥ずかしながら残りの敵は力及ばず取り逃し、その三人は隠し通路のようなものから地下へ潜り込んでいきました」

「やはり地下に隠れ家がありましたか」

それを聞くと女王は得心したようにゆっくりと深くうなづいた。

「いいでしょう、中尉。それが分かったことで敢えて敵を取り逃したことによる利点は得られたといえます。見張り塔の者にはこれまでに以上に厳しくサゴマ居住区を監視させるように言いなさい」

女王は鋭く爪の伸びた細長い指で南の方角　　おそらく物見櫓のあたり　　を指して言った。

「はい、陛下。それと列車の運転士は私が見たときには既に死亡していました。積荷の物資は他の隊に回収に向かわせています」

「承知しました。明日以降あなたには首都の防衛を命じます。明朝には近衛兵を連れてガルナディアまで戻りなさい」

「了解です」

一礼して立ち去ろうとすると、女王が背後から「中尉」と言って呼び止めた。

「言い忘れていました。メルヴィル大佐があなたに話があるようです。あとで行ってみるといいでしょう」

「分かりました」

天幕を出るとリンフォオーネはシルカ・メルヴィル大佐の元へ向かった。

マッドベースの高地は涼しくて過ごしやすい。下界の砂漠と比べるとまるで天国のようだ。元々南国育ちのリンフォオーネにとってはこの乾燥した暑苦しい砂漠の気候も嫌いではなかったが。

野営地で兵士たちはそれぞれ髭を剃ったり朝食を取ったりコーヒを飲んだり煙草を吸ったりしていた。兵営のほとんどは亜麻の日覆を張ってその下を土嚢で囲っただけの粗末なものだった。

少し坂を下り、野営地の外れにある驟馬の畜舎に面した場所に出ると、小さな天幕の前でメルヴィル大佐が部下の兵士と立ち話をしていた。

「来たわね中尉。待ってたわ」

大佐はリンフォオーネの姿を認めると嬉しそうに対応した。

話はまだ済んだのか、「戻っていいわ」と言って部下を帰らせる。大佐は天幕の中へ入るようにリンフォオーネを促した。

「話があるの」

中には横長の四角い机が一つと、それに向き合うようにして何かの木箱が二つ椅子代わりに置かれている。その脇では肘掛け椅子に

座ったメリー参謀長官が退屈そうにあくびをしながら机に置かれたランプの明かりを頼りに分厚い本を読んでいた。

「まあ座って頂戴」

リンフォオーネは木箱の上に腰掛けた。机を挟んで向かい側に腰を下ろすと大佐は色あせた菜種油色の大きなとんがり帽子を脱いですぐそばに置かれた小さなキャビネットの上に載せた。身にまとったローブもそれと同じ色をしている。大佐は元来マッドガルド軍所属の士官ではない。エルザリア出身の上級魔術師だ。

「あなたたちにとってはすごくお得なことだと思っただけど、みんな怖がつちゃってなかなか話に乗ってくれないのよね」

大佐はゆったりと大きなウェーブのかかった亜麻色の長い髪を鬱陶しそうに肩の向こうへ押しやった。

「というわけで中尉の実力を見込んでのことなんだけど」

そこで大佐は一旦言葉を切って、こちらに身を乗り出してきた。

鮮やかな碧眼がまっすぐとリンフォオーネの瞳を射止める。

「体内に硬化ウイルスを投与してみない？」

大佐は嬉々として提案してきたが、リンフォオーネには彼女の言っていることがよく分からなかった。

「シルカも物好きね」

ぱたん、と本を閉じてメリー長官がため息をつき、あきれたような目線を大佐に向ける。雪のように白い肌に紺碧色の瞳。まっすぐと伸びた銀色の長い髪。その身を優しく包み込む白亜の綺羅。そして見る者をぞつとさせるほど端麗な容貌。まるで生きたまま宝石になったかのような美しい女だった。大佐と同じくエルザリアから来た士官だが、軍人のようにはまるで見えない。

「人生は道楽よ」

大佐が言い返した。長官は「あらそう」と言って手元の本を膝に置いて目を伏せる。

そのとき不意に長官と目が合った。

言いようのない焦燥感がリンフォオーネを襲った。すぐさまこの場

から逃げ出したいという衝動に駆られた。

「で、順を追って説明するけど」

大佐の声ではっとしてリンフォーネは我に帰った。

「多くの魔術師はね、自分の体から盾を作り出すことができるの。こんな風にね」

大佐はローブの裾をまくって、肘まで腕を露出させた。

腕の一点に何やら小さな黒い染みができたかと思うと、それはあつという間に広がっていき、やがて腕全体を覆い尽くさんとしていた頃、不意にそれは大きく膨れ上がり、ついには傘のように腕から丸い板状のものが突き出してきた。

「どう？」

「こんなに近くでまじまじと見るのは初めてです。触ってみてもいいですか？」

大佐はうんうんとうなづいた。リンフォーネは女の腕から突き出た異形の物体に手を触れてみた。

それは鋼のように硬かった。普通の人間が持つ皮膚の角質層などとは比べ物にならなかった。

「これはね、人体に含まれる元素を複合して炭素繊維として練り上げたものなのよ」

「炭素……？」

「そう。ダイヤモンドは知ってるでしょう？ 炭素原子の共有結合によつて鋼を凌ぐ硬度を持った物質。これは立方晶窒化炭素といって理論上他のどの物質よりも硬い構造を持つといわれているの。それでこの炭素でできた黒い盾を私たち魔術師がどのように作り出しているかというと、人工的に塩基配列を組み替えられたDNAを持つウイルスを自らの体内に投与して、それをコントロールすることです」

大佐の腕の黒い盾は射精を終えた男性器のようにみるみるうちにしぼんでいき、元通りの綺麗な肌になった。

「自由に出し入れすることができるようになるのよ。これによつて

魔術師は敵の弾丸を防ぐことができる。もちろん剣や弓矢の類もね」
「無敵ですね」

「無敵？ いいえ、それは違うわ中尉。これにはもちろん弱点もある。一つは、熱に弱いこと。炎を浴びればあっという間に炭化して使い物にならなくなってしまう。おまけに大抵の魔術師はこの盾を自分の体から切り離して扱うことができないから、ひとたび火をつけられれば自分の体ごと一緒に燃やされる羽目になる。もう一つは、見通しが利かないこと。氷のように透き通っていれば盾で身を守りながら向こう側の様子を窺うこともできるでしょうけど、この盾はあいにくその性質上、真つ黒で完全に不透明。体全身を覆うほどの大きさの盾を作れば、ただ自分の視界を奪うだけになってしまう。さらにもう一つ。形状を変化させるのが難しいこと。この盾は何も考えずに作り出せば毎回決まって平たい円盤状になってしまう。半球状に作ることはできれば敵の攻撃を受け流すのにより便利になるけれど、それには高度な技術が要求される。あとさつきも言ったけど自分の体から切り離して操ることができるのはごく限られた実力者のみ。これだけ扱いが難しいことを考えれば、魔術師としての教育を受けていない一般の兵士が硬化ウイルスの投与を嫌がるのも無理はないけどねえ」

「ウイルスの投与による副作用は……？」

「副作用？ 使い方を誤れば大怪我をするってことくらいかしらね。腕がポキッと根元から折れて片腕失った人とかいるし。それとこれは人体を構成する成分を分解、再構成させて練り上げるものだからあんまり頻繁に出し入れしていると無駄に体力を消耗することになる。あとは表皮が硬化したまま元に戻らないとかはよくあるけど、そういうのは大抵すぐに治せるし大して心配することじゃないかな」

「なるほど」

「私としてはね、この能力を魔術師だけが扱えるものに留めておくのはもったいないことだと思ってるのよね。あなたみたいな優秀な兵士がこの硬化ウイルスを使いこなすことができれば今の魔術師至

上主義といった兵力のバランスももつと変わってくるんじゃないかしら？　ねえ中尉、そう思わない？」

リンフォオーネは下唇に指を当てて少し考え込んだ。

「大佐もそのウイルスを投与されたのですか？」

「ええ。それと、もちろんこのことは陛下にも將軍にも話を通してあるわ。別に今すぐ答えを出そうとしなくてもいいのよ。ゆっくりとよく考えてから決めなさい」

リンフォオーネはちらりと長官のほうを盗み見た。本を膝に抱いたままこつくりこつくりと船を漕いでいる。

「いいえ、その必要はありません大佐。今すぐ打ってください」

リンフォオーネは左腕の籠手を外してシャツの裾をまくった。

「本当のいいの？」

その言葉とは裏腹に遠慮する気など微塵もなく大佐は嬉しそうに目を輝かせた。

「はい」

それにうなづく大佐は待ってましたとばかりに隣のキャビネットの引き出しから注射剤の入ったバイアル瓶と注射器を取り出した。慣れた手つきで注射筒に注射針を差し込むと大佐はそれでバイアル瓶の栓を刺して中の薬剤を一定に目盛り到達するまで吸い上げる。

「ちよつとちよつとするよ」

言いながら大佐はリンフォオーネの腕を握ってこりこりと親指で静脈の位置を探った。

やや褐色を帯びた柔らかい肌に銀色の細い針が突き刺さる。

「鍛え上げられた兵士の強靱な肉体と、洗練された魔術師の繊細な技術の融合　興味深いわ」

注射を終えると大佐は注射筒から注射針を外してバイアル瓶と一緒にキャビネットの引き出しにしまった。

「あなたが実際に前線で黒い盾を利用しながら戦ってみせれば部下たちもこの硬化ウイルスの実用性に気づくはず。中尉ならきつといい見本になれるわ」

その後、大佐はリンフォオーネに硬化ウイルスの扱い方を詳しく話して聞かせた。

「ちよつとコツがいるけど大丈夫。すぐに慣れるから」

一通りの説明を済ませると大佐はかたわらに置いた帽子を手にとつて立ち上がった。

「朝食にしましょう。まだ何も食べてないでしょ？」

「ええ」

リンフォオーネも一緒に席を立つ。

「長官は？」

「ああ、いいの。そのまま寝かせといてあげて。メリーは少食だし、あんまり人と一緒に食事したがるタイプでもないから」

長官の深くうつむいた寝顔を見ながらその言葉を聞くとリンフォオーネはなぜかどこか引つかかるところがあるように感じたが、特に何も追及せず大佐に従つて外に出た。

空は綺麗に晴れ渡り、心地よい風が吹く中で燦々と輝く朝日の光が清々しい。

昼過ぎまで探索を続け、作業を一段落させるとリツコは途中で見つけた浴場に足を運んだ。

広い浴槽の中でリツコは歩き疲れた脚を思いつき伸ばし、頭の下にタオルを敷いてぐったりと縁にもたれかかった。そのまま天井を見上げるとドーム状になった丸い岩肌がぼんやりと湯気で揺らいで見える。湯船は浅いが、底に尻をつければ肩まで浸かれた。じんわりと温かい湯の中で体の髓までほぐされていく。透き通った湯の中で頼りない脚がゆらゆらと気ままに漂う姿が水面に映る。

浴場はかなり立派なつくりだった。丸天井は広々と高く周囲の壁は正六角形をかたどっている。中心にピザを四分割したような形で浴槽が四つ並び、それぞれ中の湯の温度が違う。一つはどう考えても人間が風呂として入るためのものではなく、一つは丁度いい湯加減で、一つはぬるま湯、もう一つは水風呂だった。

壁に沿って並んだ洗い場にはオリーブの石鹸が備え付けられているだけだったが、そのうち一ヶ所には他の人間が使ったものと思われるシャンプーが置いてあったのでリッコはそれを拝借した。

砂漠の空気は微細な砂を孕んでいる。湿度が極めて低く、空気中には常に塵や砂埃が落ち着きなく漂っているのだ。そのため髪の毛や頭皮、顔の毛穴、目蓋の裏、鼻孔や爪の隙間など体の隅々まで全身砂まみれになってしまふ。そんな砂漠の砂を体中から綺麗さっぱり洗い落としてリッコは生き返った気分になった。

マッドベースの地下には実に様々な施設があった。図書室、睡眠室、厨房、食堂、食糧貯蔵庫などの生活空間に始まりインフラ関連の浄水場、下水処理場、廃棄物処理場、発電所、中で何が行われているのかよく分からない工場の類や、果てには納骨堂まで。まだまだ最深部には辿り着けていない。

ひとまず測量はここまでにして、あとで部屋に戻ったらデータを集計しよう。

ばしゃ、とリッコは浴槽の湯をすくって顔に浴びせた。熱い湯の感覚が肌に気持ちいい。

そのとき、がらりと引き戸が開いて珊瑚色の髪の毛の少女が入ってきた。エリイだ。

エリイはリッコの姿を認めると一瞬ぎよつとしたような顔で立ち止まったが、そのまま何事もなかったかのように洗い場へ向かった。だばあと頭から湯をかぶり、シャンプーを泡立ててわしゃわしゃと髪を洗い始める。頭から垂れ落ちた白い泡がくびれた腰の上を流れていく。

洗い終わってすすいだあと、腕につけていたヘアゴムで長い髪を結わえ上げる仕草が妙に艶っぽく見えた。普段は後ろ髪で隠れているか細いうなじの曲線美があらわになる。

リッコはちよつとのぼせそうになりながら、両手で頬を扇いだ。肌、白いんだなあ。

石鹸で体を洗うエリイの肌は白い泡に包まれて、その薄桃色の滑

らかなグラデーションがより浮き立って見える。

足の爪先まで入念に洗い終わると、エリイは体を流してこちらへ向かってくる。

「あ、そこ熱いよ」

エリイが隣の浴槽に入ろうとしていたのでリッコはあわてて制止した。

「え？」

言いながらエリイは既に片足を思いっきり湯の中に突っ込んでいた。

「！！！！」

声にならない叫びを上げて足を引っこ抜くと同時にエリイは後ろにのけぞった。

「あぶな」

間に合わない。

濡れた床で足を滑らし、そのまま大きく尻餅をつく。

「熱っ！ 熱っ！！」

じたばたとエリイは熱湯に入れてしまったほうの足を激しく振るわせる。

「そっちが水風呂になってるから早く冷やしな」

今度は用心深く手で温度を確かめてから、どぼんと足を水に浸す。

「あれ？ 今」

エリイが尾骨のあたりを触りながら不思議そうに首を傾げた。

「なんか床が妙に軟らかかったような」

「打ち所がよかったんでしょ」

しばらく足を冷やしてから、エリイは訝しげに自分が尻をついたところの床を爪先で探っていたが、やがて何も異変がないことを確認すると彼女はリッコと同じ浴槽に入ってきた。ざば、と中の湯が少女の体の分だけ溢れ出る。

「ふう。危うく釜茹でにされるところだったぜ」

「大丈夫なの？ 火傷してない？」

「ザラは熱に強いんだ。あんなぬるま湯で火傷を負ったりなんかしない」

「その割には随分と取り乱してたけど」

「うるさいな。いくら熱には強くても熱いもんは熱いんだよ」

「ふうん。変なの」

髪をアップにして耳を出したエリイの姿はなんだかいつもとは違った雰囲気を醸し出しているように見えた。

「あのさ、聞いてもいいかな」

「何だ」

「エリイってほんとに女の子なんでしょ？」

「またその話か。何度も言ってるだろ。俺は男だ」

「ねえ、それだとまずいんじゃない？　なんで一緒にお風呂入ってるの？　私大声上げてもいいの？」

「あー……えっと……」

露骨に狼狽しながら、エリイは視線をさまよわせた。

「だからなるべく目を向けないようにだな……」

やっとのことで弁解するものの、その声は尻すぼみに小さくなっ
ていく。

「何？　聞こえない」

リッコが迫ると、エリイはくるりと背を向けた。

「どうということなのかなあ〜？」

リッコは後ろからエリイの首に抱きついた。ふわ、と珊瑚色の柔
らかい髪が頬に触れる。

びくつとエリイは肩を揺らすのが、抵抗しない。

「……離れてくれ」

「どうしたの？　女同士でこのくらい気にすることないでしょ？」

「男だつて言ってるだろ」

「こんな体なの？」

「……体は女なんだよ」

「体は？　中身は男ってこと？　それじゃもしかして、実は今すこ

ジャックは確かにそう言っていた。だが実際にはその後わずか三週間足らずで戦争は勃発した。結果としてマッドスコープは十分な軍備を整えることができないまま戦争に臨むこととなった。

ラヴェンナが本国から命じられた任務は、言付かった親書を兵士としてマッドガルドに潜伏しているというロモコ民族の頭首に手交せよとの内容だった。ジャックから協力を依頼されたときラヴェンナがその応諾を渋ったのは、マッドスコープと手を組んでいるアストラピアの立場では任務の遂行に支障が出るのではないかと考えたからだ。しかし結局のところラヴェンナはエルザリア人である自分が一人でサラの世界まで来てマッドガルドに上手く入り込めるかという自信がなく、アストラピアの庇護の下で行動することを選択した。また、どうせ戦争が始まってしまふのならば戦闘に乗じて容易にマッドガルドへ侵入できるだろうという打算もあった。

ジャックの依頼を受けてから実際にサラの世界へ訪れるまでラヴェンナには三日の猶予があったが、彼との対談の内容は本国には報告していない。ラヴェンナはアストラピアの機密情報を安易に外部へ漏らさないほうがいだろうと考えていたし、そもそも政府は任務を遂行するまでのあいだの中間報告を強く要求していなかった。あるいは何か他の無意識的な情動がラヴェンナにそうさせたのかもしれない。

ラヴェンナがサラの世界に訪れてから約二週間後、マッドガルドはマッドベースへ兵を送った。さらにその六日後、マッドガルド軍はマッドベースにてサゴマと会合していたアストラピアのフレイ少佐を捕らえ、マッドベースとマッドスコープを繋ぐ鉄道のレールを切断した。

そして戦争が勃発した。

開戦直後、マッドスコープはまずマッドガルドとの国境付近の陸路から軍を進撃させた。マッドガルドの目的はマッドベースを制圧、併合するための軍事経路を確保すること。それに対してマッドスコープの目的はマッドベースからマッドガルド軍を撤兵させることだ。

鉄道のレールが切断された状態では安易にマッドベースへ乗り込んでも補給路を維持することができない。そのためマッドスコープは逆にマッドガルド側の補給路を攻撃してマッドベースへの経路を遮断しようという作戦に出た。

しかし補給路の維持がネックになるのはマッドスコープ側にとっても同じことがいえた。砂漠特有の微細な砂の力を利用した兵器を駆使用するマッドスコープ軍は砂漠の上では防御に優れ圧倒的な優勢を誇ったが、礫砂漠及び岩石砂漠においては機動力で勝るマッドガルド軍の魔術師部隊を相手に苦戦を強いられた。岩石砂漠の上で効率的に輸送を行う手段を持たないマッドスコープ軍は、進撃すればするほど補給路の維持が困難になっていくというジレンマに陥っていた。

それ以上の詳しいことはラヴェンナには分からない。戦線は膠着し、不毛な睨み合いが続いているのではないだろうか。あるいはとくにマッドスコープ軍は敗れてしまっているのかもしれない。いずれにしても予想されるのはあまりいい状況ではないことは確かだ。日の出が近づいてきた。太陽の姿はまだ見えないが、天を覆う空の色が徐々に明るみを帯びてくる。同時に海も仄かな光に照らされて波の動きがあらわになる。夜明け前のこの時間、空の色は常に刻一刻と変化していく。ラヴェンナは戦争のことなど忘れて朝焼けの色に見惚れそうになった。

マディミール大陸は丁度ヘアピンのような形をしている。泥砂海と呼ばれる海を挟んで南東にあるのがマッドガルド、その北西に位置するのがマッドスコープだ。そのマッドスコープの領土の東端には、マッドガルド側の海に面したところで大きく弧状に突き出た半島がある。マッドスコープの本土を防衛するに当たって重要な拠点となるスラージャ半島だ。

魔術師部隊を主力とするマッドガルドは海軍力において圧倒的に勝っていた。二百年前に行われた二度に渡る戦争においてもマッドスコープはスラージャ半島、及びその内陸に面する湾岸の諸都市を

海からの攻撃によってマッドガードに制圧されている。占領された諸都市と引き換えに、マッドスコープは一度は手にしたマッドベースの支配権を渋々手放すことになったのだ。時が流れ、魔術文明のさらなる発展を遂げたマッドガードが再びここを狙って攻めてくるのは明白だった。

しかし敵は未だ現れていない。スラージャ半島沖での哨戒を連日連夜行い続け、もはや一ヶ月近くが経つ。海上では偵察の魔術師一人たりとも確認できていない。マッドスコープは警戒態勢を解くには至らないものの、徐々に哨戒のために割く艦船と魔術師の数を減らしていった。今では旗艦となる母艦一隻を中心に、護衛艦四隻が航行をともししているだけだ。母艦の上では四人の魔術師がそれぞれ六時間ごとに一人ずつ交代制で哨戒を続けている。敵艦を発見したら当直の魔術師は直ちに基地へ戻りその旨を伝え、護衛艦隊は対空戦闘に備え戦陣を形成しながら徐々に撤退し、増援艦隊との合流を図るとというのが今回の作戦の概要だった。だがこの作戦には穴がある。沖合いで護衛艦隊が敵影を視認してから哨戒の魔術師が基地まで戻って増援艦隊を呼び、護衛艦隊がそれと合流するまでにはどんなに早くとも二時間はかかる。それまでのあいだ母艦一隻と護衛艦四隻、魔術師三人のみで耐えろというのは無茶な話だった。これは明らかにどうせ敵は現れないだろうということを想定して行われた作戦だ。多くの戦力を海上に配置して肩透かしを喰うくらいならば戦力を温存して前線の見張りは全滅しない程度の数に抑え、あくよくば敗北を喫しても艦の一隻、魔術師の一人でも生き残っていれば戦闘の報告は得られるだろうという魂胆だ。こんなところで戦力の出し惜しみをしているようでは戦いに勝つことはできないのではないかとラヴェンナは思っていた。

魔術師が飛行を続けられる時間には限りがある。長時間に渡る飛行は緊張の連続で疲労しやすく、また敵との戦闘を交えれば心身にかかるさらに負担は増大する。単純な飛行においては自覚を伴う程度のものではないが、それが逆に大きな落とし穴となる。集中力の

欠如した魔術師は注意散漫になり、戦闘に際してはふとした拍子に命を落とす危険を招くことが多々ある。判断力の低下が危険を察知してから回避するまでの動きを鈍らせるのだ。ゆえに哨戒、索敵のために一度に多くの魔術師を飛ばすことは同時にいざ敵軍と接触したときに戦える状態の魔術師の数を減らすことも意味していた。

ラヴェンナは大きなあくびをした。夜明けまでに敵が姿を見せなければ今日も戦闘を交えることはないだろう。魔術師にとって海上での夜間飛行は非常に困難だ。しかしその一方で艦船は夜の闇に紛れて距離を稼ぐことができる。敵が攻撃を仕掛けてくるとすれば夜明け前である可能性が最も高い。その次に考えられるのは日中、太陽の光が丁度水平線を反射させる時間帯だが、こちらは方角が限られている。

ぼんやりと霧がかかったように滲む空の下で水平線の輪郭がかすかに見分けられるようになった頃、薄い雲を背に大きな鳥が飛んでいるのがくつきりと見て取れた。鳥はまっすぐとこちらへ向かってくる。

突如、ラヴェンナは胸がざわついてきた。鳥にしてはやけにまっすぐと飛んでいる。羽ばたくこともなく、滑空する様子も見えない。

「九時の方向に敵影視認！！ 魔術師が一だ！！！」

ラヴェンナは母艦へ急降下しながら全力で叫んだ。

見張り台まで降りて当直の水兵に同じ言葉を繰り返す。

「九時の方向に敵魔術師ー！！ 総員戦闘配置につけー！！！」

水兵はラツパを鳴らして声高に叫ぶ。

甲板へ降りると程なくして帆が畳まれ、砂を動力とする艦の原動機が大きなうなり声を上げる。

ハッチからフラヴィニー大尉が出てきた。アステナ出身の上級魔術師であり、この艦の指揮官だ。

「艦影は見えただか？」

大尉は顔面の左半分を巨大な腫瘍に冒されている。片側だけ見ればかつてはかなりの美貌を誇った女性であることが窺えるが、今で

は見る者に恐怖を与える人相だ。ラヴェンナは未だに大尉の顔を直視するのに抵抗があった。

「いいえ」

「なら様子を見て来い。敵は偵察一人だけかもしれない。艦を一隻でも見つけたらすぐに戻って来い。魔術師だけなら撃ち落してしまつて構わん」

大尉は腫瘍でバナナのように膨れ上がった左手を振るつて言った。「今すぐ援軍要請に向かうべきです」

「あわてるな。伝令には他の者を向かわせる」

「私が飛んだほうが速い！」

「ベルクシュタイン」

黄色くにごつた左目がぎよろりとラヴェンナを射止める。

「君は貴重な戦力だ。哨戒と伝令だけに使うのはもったいない分かるな？」

その容姿の醜悪さに似合わず透き通つた綺麗な声で大尉は言った。「……了解しました」

上手く言い包められたと思いつつも、ラヴェンナは指示に従つて甲板から飛び立つた。

じつとりと湿つた潮風が頬をなでる。海の上は寒流の影響を受けてひんやりと肌寒い風が吹いている。

さっきの敵はどこへ行った。まさか本当に鳥だったんじゃないだろうか。

ラヴェンナは高度を上げた。視界が一気に広がり、ある程度の高さに達すると徐々に水平線が沈んでいく。

見つけた。あそこだ。

瑠璃色に広がる視界の果てにぽつんと小さな黒い影が浮かんでいる。箒の柄を握り締め、敵影に向かって突進する。湿つて硬くなつた髪が風になびく。

もう向こうはこちらに気づいているだろう。先手必勝だ。

先制攻撃を仕掛けるべくラヴェンナは氷の弾丸を作り出した。水

分に富んだ海の上ならばいくらでも弾は作れる。それにラヴェンナは氷を操る類の魔術を得意としていた。敵との交戦に備え、ラヴェンナはできる限り多くの弾丸を用意する。

まもなく射程圏内に達するかと思われたとき、敵の魔術師が先に動いた。

敵は一気に上昇する。まだ日は昇らない。逆光の心配はない。ラヴェンナはあとを追った。

まだだ。まだ撃てない。

空戦においては弾道が敵の移動方向と平行に近づくようにしなければどれだけ撃つても弾を無駄にするだけだ。

ラヴェンナは確実に距離を詰めていく。

だがその前に限界高度に達するか。

相手が先に折れた。魔術師は宙返りするように背面飛行を経て後退していく。チャンスだ。ラヴェンナは弾丸を連射した。

氷の弾が空を引き裂く。魔術師は螺旋を描くようにして避け、標的を見失った弾丸は虚空の彼方へ消えていく。

ラヴェンナは再び弾丸を生成し、敵の魔術師を射撃する。

だがおかしい。敵との距離が開いているような気がする。いや、実際に距離は開いていた。弾は敵に届く前に失速し弧を描いて落ちていく。

ラヴェンナは全速力を出している。敵は今まで手を抜いていたのか？ なぜだ？

やられた。

誘き寄せられていたのだ。敵は一人ではなかった。他の魔術師の影が空の向こうに無数に映る。その数ざっと二、三十といったところだろう。

艦の姿は見えない。敵の母艦はどこにあるのだ？ 本土から直接飛んでくるような距離ではないはずだ。

まずい。このままではやられる。

ラヴェンナは敵艦を探すのを諦めて逃亡を図った。いずれにして

も敵の母艦を含む艦隊がすぐそこまでやってきているのは確かだ。追いつかれやしないだろうな。

ラヴェンナは怖くなった。先ほどの魔術師はあとからラヴェンナを凌駕する速度を出していた。そして今は背後から二、三十人の魔術師たちが追ってきている。ラヴェンナを凌ぐ速さを持つ相手が何人いるか分からない。着艦するまでに間に合うかどうか。

ラヴェンナは後ろを顧みた　　撃たれる　　咄嗟に急降下して避ける。

直線距離でも追いつかれるのは時間の問題だというのに回避行動のために軌道を曲げていたら余計に時間を食ってしまう。おまけに敵は複数いる。

ラヴェンナは恐怖に怯えた。筭を握る腕が震え、心臓は激しく胸を打つ。顔が引きつり喉が渇くのを感じた。

後ろを見る。複数の角度から幾重にも弾丸が発射される。交錯する弾道の隙間を縫って回避する。

前を向き、重力を利用して速度を上げる。

海面が切迫する。無数の弾丸が海面に突き刺さり立て続けに水柱を作って水飛沫を巻き上げた。

ひゅん、と耳元を氷の弾が掠めていく。ラヴェンナは一瞬耳が吹っ飛んだのではないかと思った。

ラヴェンナは海面すれすれを飛んだ。ここで上昇すれば距離を詰められる。だが水平に飛べば被弾する。板挟みの中でラヴェンナは上昇を選んだ。氷の弾が海面を撃つ音が遠ざかっていく。激しく波打つ脈動が鼓膜を過敏に震わせる。

母艦はどこだ。まだそんなに遠く離れてはいないはずだ。

まさか方角を見失ったのではないか。だとすればここで死ぬことになる。

敵の弾幕をかいくぐり、くるくるとループしながら周囲の海を見渡した。

運がいい。

ラヴェンナは味方の母艦を発見した。箒の柄を握り直してまっすぐと艦へ向かう。

気を取られたそのときだった。どす、と左肘に鋭い痛みが走った。腕を撃たれた。

がくんと体が左に傾く。

腕はまだ動くか？ 止血はどうする？

考えている暇はない。ラヴェンナは一目散に母艦へ飛んだ。

だがそこでラヴェンナはまだ何も状況は好転していないことに気づいた。自軍の航空戦力は自分自身を含めて魔術師四人だけだ。五隻の護衛艦隊で対空射撃をしたところでこの数が相手では沈められるのは時間の問題ではないのか。ラヴェンナはただ敵を連れてきただけということになる。

撃たれた肘がずきずきと痛んだ。骨は平気だろうか。戦えなくなるのは嫌だ。

そうだ。私はまだ戦える。一人でも多く敵の頭数を減らしておくべきだ。

意を決し、ラヴェンナは背後に向かって弾を乱射する。

撃墜などできなくてもいい。ただ一矢報いるつもりで反撃した。

こちらにも撃たれる。必死に避ける。

だが不意にバランスを崩した。腕を撃たれた影響だ。

ざわっと背筋が凍りつく。落ちていくあの感覚。

危ない。

そう思ったときにはもう遅かった。

ラヴェンナは体を宙に投げ出され、箒を右手に持ったまま落下していった。

嫌な光景だ。数十人もの魔術師の群れが空を覆っている。

「グリフィス、お前は基地へ戻って増援艦隊を呼べ。今すぐにだ」

リアン・フラヴィニ―大尉はハッチから部下の魔術師二人を甲板に連れ出してきて言った。

「しかし大尉、私が伝令に向かえば残る魔術師は二人だけになってしまいます」

グリフィスはそのごつい体格に似合わず心配性な男だった。

「二人いれば充分だ。空戦において敵を一人撃ち落とすのに最低限必要な人数は二人、ないし四人だ。分かるな？ 増援を呼べ。急ぐんだ」

「すぐに戻ります」

グリフィスは基地へ飛んだ。

「サルヴァレッツァ、お前は私のあとに続け」

言うなりリアンは箒にまたがり甲板を蹴る。

「はい」

緊張した面持ちでサルヴァレッツァは箒に乗ってリアンのあとについてくる。

「弓兵は水平に飛んでくる敵を狙え！ 弩砲は真上の敵を撃ち落せ！！」

浮上しながらリアンは母艦の水兵に指示を出す。

「いいか、敵の動きに照準を合わせようとするな。引きつける。近づいてくる敵を迎え撃つんだ」

敵の空襲を受けて護衛艦隊は一斉に回避行動を取っていた。三日月形の長い航跡が海の上に五つ並ぶ。

「行くぞ、サルヴァレッツァ。まずは私が編隊から外れた敵を狙い撃つ。お前は後ろで援護しろ」

「大尉と運命をとものにします」

細い声で大胆なことを口にする。見た目の割に肝っ玉の据わった女だ。

「いい度胸だ。よし、ついてこい！」

リアンは急上昇して母艦の上空に躍り出た。四隻の護衛艦が母艦の周りで輪形陣を作って旋回しながら対空射撃を繰り返している。

敵の魔術師は巨大な氷の槍を生成して急降下するとともに艦体を狙ってそれを叩きつけてくる。艦底に穴を開けて艦を沈めようとい

う戦法だ。

敵の意識に最も大きな隙が生まれるのは攻撃の瞬間だ。それが獲物に止めを刺すような一撃であればなおその意識は攻撃に集中し、同時に外へ向けた注意力は失われる。敵が艦を狙う瞬間が何よりの好機だ。

敵の魔術師が大きな氷の槍を抱えて最前線の護衛艦に飛来する。海面間際まで高度を落とすと舷側の弓兵が猛烈に矢を連射する。

魔術師は矢の雨をかいくぐり巨大な氷塊を発射する。しかし突如海面から現れた氷の壁によってその攻撃は防がれた。サルヴァレツアだ。

魔術師は艦上の水兵をやり過ごし上昇してくる。今だ。

丁度その真上から様子を窺っていたリアンは敵の死角から急降下して射撃した。

ピンゴ。

体を撃ち抜かれ敵の魔術師は動きを止める。その隙にさらに突進するように接近しリアンは至近距離から激しい炎を浴びせた。

敵は燃え上がり、黒い煙を巻き上げながら墜落していく。

撃つだけ撃つてそのまますれ違つるように離脱する。攻撃の瞬間に隙が生まれるのは自分も同じ。リアンはそのことをよく分かった。

形勢は二対多数ではない。こちらには艦という絶好の囷が五隻もいる。リアンを狙う敵の迎撃はサルヴァレツアに任せ、自分は艦を狙う敵を撃ち落せばいい。一人ずつ確実に潰していけば徐々に戦局はこちらの有利に傾いていく。単純なゲームだ。恐れることはない。

自軍の艦の対空射撃の弾幕を盾にして巧妙に身を守りながら戦場の様子を窺う。常に敵弾の飛来に怯えなければならぬのは相手も同じことだ。

リアンは左腕から黒い盾を作り出し、いつでも弾を防げるように備えた。座布団ほどの大きさの盾は空戦において身を守るのに適し

たサイズだ。空気抵抗も少なくて済むしさほど視界の妨げにもならない。

敵の魔術師たちが次々と巨大な氷柱を作りながら艦へ向かって急降下していく。

艦は全速力で旋回し、艦体をそらして回避する。しかし攻撃は防ぎきれず、舷側や甲板に氷の槍が幾本も突き刺さる。

砲兵が矢羽のついた極太の槍を弩砲から発射する。上空を滑空する魔術師は体を槍に貫かれ、そのままぐらりと箒から投げ出され墜落していく。

次はあいつを狙おう。

リアンは護衛艦の矢弾に阻まれながら母艦への攻撃に躍起になっている敵の魔術師に狙いを定めた。

帆を畳んだ艦のマストをかいくぐり、隙だらけな敵を迎撃すべく接近する。

だがその前に横から護衛艦が舵を切って母艦の前に立ちほだけ、舷側の弓兵がその魔術師を撃ち落した。

手柄を取られてしまったな。

どうやら他の味方も考えていることは同じなようだ。

しかしやはりこちらは圧倒的に火力が足りない。一人、また一人と着実に撃墜してはいるものの、こちらが敵を殲滅するよりも早く敵の魔術師たちは次々と味方の艦に攻撃を当てていく。

このままではどの艦も沈められてしまう。なんとか時間を稼がなければ。

だがリアンが味方の艦を狙う魔術師を各個撃破していくうちに敵はリアンとサルヴァレッツアの二人を先に始末しようと思ったのか、艦への攻撃を止めて二人に狙いを定めてきた。

好都合だ。

「サルヴァレッツア！ お前は艦の護衛を続ける！！」

リアンは味方の艦から離れて大きく上空へ舞い上がった。敵の魔術師が糸に引かれるようにして追ってくる。

いいぞ。そのままかかってこい。

半数はリアンを追うのを諦めて艦を攻撃しに戻ったが、味方の水兵もそこまでやわじやない。少しくらい平気だろう。それにサルヴアレツツアもついている。

リアンは限界高度ぎりぎりまで上昇し、そのまま魔術師の群れを飛び越えるようにして敵が元やつてきた方角へと向かった。

後ろから十人ほどの敵が迫りくる。中には今にもリアンに追いつかんと接近する者もいた。

だがこれでいい。飛行速度には個人差がある。距離に差がついたところで一人ずつ相手にしていけば人数差というハンデは失われる。リアンは後ろから撃ってくる敵の弾を旋回しながらかわしつつ応戦した。この状況では追う者よりも追われる者のほうが幾分有利だ。追われる者がどの方向へ逃げるのかは予測できないのに対して追う者は必ず相手に向かってまっすぐに進行する。進路の予測という面に関しては追われる者のほうが圧倒的に有利だ。また弾丸の相対速度も追われる者のほうが圧倒的に有利だ。

聡明な魔術師の何人かはこの狙いを読んでリアンの後方から離脱した。しかし半数近くの魔術師は一直線上に並んだままリアンのあとを追いつつ、ことごとく撃墜された。

天涯が露草色に澄み渡り、海面が朝焼けの空の色をそっくりそのまま映し出す。

敵艦だ。

大きな二隻の母艦を先頭に護衛艦が各四隻後ろに並び、計十隻の艦隊が二つの単縦陣を編成して航行している。とっくにこちらの存在は伝わっていたのか、早くも完全に戦闘態勢に入っている。蒸気機関を動力とする艦船は太い煙突から黒々と煙を吹き上げながらこちらに向かって直進しており、白い軌跡がまっすぐと長く後方へ伸びていた。

敵艦を見つけたら何発か攻撃を加えて揺さぶりをかけようかと思っていたが、数が多すぎてこれでは迂闊に近づけない。

そして背後には敵の魔術師がまだ六人追ってきている。

リアンは敵艦には近づかず横にそれるようにして旋回し、そのまま高度を下げて海面に接近する。

速度を落とし、海面付近の水温を上げる術式を組む。急激に海水を熱して蒸発させ、蒸気霧を作り出す。煙幕代わりだ。

霧の中に身を隠しながら進路を味方の艦へ転向する。

霧を抜けると上昇ついでに背後の敵に上から突風を叩きつけた。

ほんの牽制のつもりだったが敵の一人は強烈な風に煽られバランスを崩してそのまま海面に叩き落された。残るは五人。

敵は大きく螺旋を描きながら油断なく追ってくる。敵の撃ってくる弾を避けつつこちらでも応戦するものの、リアンの発射する弾はなかなかその標的を捉えることができなくなってきた。向こうもやり手だ。

なんとか味方の元へ戻ってくると護衛艦の一隻が大破して炎上していた。度重なる攻撃を受けその航行能力を失った艦が敵の魔術師によって火をつけられたのだ。その艦体の大部分が木材でできているマッドスコープの艦はひとたび炎を放たれると火の勢いを抑えることができなくなってしまう。

リアンはサルヴァレッツァと合流すべく自軍の母艦に接近する。

大尉が戻ってきた。誘き出していった敵の数がもうかなり減っている。

ラヴェンナは炎上する護衛艦の消火活動を他の水兵に任せ、敵の魔術師を迎撃すべくサルヴァレッツァとともに大尉の元へ向かった。応急手当を受けたばかりの傷がずきずきとまだ痛む。

「後方から支援します。ベルクシュタインは敵の迎撃を」

「後援なら大尉につけ。私には必要ない」

ラヴェンナはサルヴァレッツァの提言をきっぱりと断った。動体視力に優れたラヴェンナはその視界に捉えてさえいれば敵の弾丸など蚊のように遅く見える。無論死角は生まれるが、どうせ三人しか

いないのならば援護は自分に当てるべきではない。

ラヴェンナとサルヴァレッツァが大尉の背後から向かい来る敵に弾丸を連射する。敵は散り散りになって旋回し、大尉はなだらかにターンして向き直る。

三対五。残りの魔術師は艦上の弓兵や砲兵が撃ち落した分を除いてラヴェンナとサルヴァレッツァが二人で全て葬った。形勢逆転とまでは行かないが、だいぶ風向きが変わってきていた。

散開した敵は再び一ヶ所にまとまって編隊を組むと、そのままこちらに振り向くことなく引き返していく。

「敵が退いていく……」

サルヴァレッツァが隣でぽつりとつぶやいた。

「……勝ったのか、私たちは」

ラヴェンナはその光景が少し信じられなかった。

「馬鹿な。あいつら何考えてんだ」

大尉が釈然としない面持ちでこちらに近づいてくる。

「すぐそこまで敵の艦隊が来ていたんだ。母艦二隻に護衛艦八隻。

合わせて十隻だ。みすみすチャンスを手放してまで奴らがこのまま大人しく帰るとは思えない。一旦母艦へ戻るが、気を抜くなよ」

油断なく言いながら大尉は右目の眉尻をきりりと吊り上げた。

「大尉、お怪我は」

サルヴァレッツァが寄り添うようにして言った。

「平気だ。あの程度の連中相手に傷を追ったりはしない」

ラヴェンナは耳が痛かったが気にしない振りをして黙っていた。

母艦へ戻って甲板に降りると大尉は「私は艦長に戦果を報告してくる」と言っただけの中へ入っていった。

炎上する護衛艦は既に水兵たちの手を離れ、ただ沈没するのを待つだけの状態になっていた。乗員はみな海へ飛び込み、他の護衛艦の者が小船を出して救助に向かっている。

敵に撃たれて墜落した自分を救出してくれた艦だったのでラヴェンナは何とかしてやりたいと思っていたが、あぁなってしまうとは

仕方がない。しかしそれを見て胸を締めつける途方もない寂寥感を拭い去ることはできなかった。

炎の波に飲み込まれて艦のマストが崩落した。おびただしい量の火の粉を撒き散らしながらばきばきと燃え滾る音を立てる。もくもくと立ち上る黒煙は海風に煽られて遙か西方へ果てしなく流されていく。

東の空を見ると、小麦色の太陽が水平線の彼方から顔を出していた。

「日の出だ」

ラヴェンナは誰にともなくつぶやいた。

海面の反射が太陽へ向かって一直線に黄金の道を作り出している。

「綺麗……」

隣でサルヴァレッツァが感嘆の声を漏らした。潮風を受けて銀色の繊細な髪が後ろになびく。

青一色の空の下で水平線のそばだけが帯状に砂漠の砂塵を思わせる橙色に染まっていた。

海の上で燃え盛る護衛艦はそのまましばらく漂流していたが、やがて一際大きな音を立てて真っ赤な炎が膨れ上がると、竜骨もろとも艦体が真っ二つに裂けて沈んでいった。

沈没する護衛艦が大きな渦に飲み込まれていき、その姿がいよいよ完全に海の中へ消えていこうとしていたとき、ハッチの蓋が開いて中から大尉が現れた。

「これより全軍撤退する」

不本意ながらといった表情で大尉は言った。

「増援艦隊の到着を待っていたら敵艦隊に追いつくことはできないかといってこのまま追撃を仕掛けても余計な犠牲を払うことになるだけだ。そもそも敵艦の動力は蒸気機関だ。砂で動くこの艦よりも足は速い。敵を見つけてから追いかけるような戦い方では勝てないとの艦長の判断だ」

「しかし大尉」

「考えてもみる、ベルクシュタイン。今回の作戦の目的は何だ？

スラー ज्या半島を防衛することだ。自軍の損害は護衛艦一隻沈没。他の艦もひどく傷を負っている。それに対して敵艦隊は無傷だ。戦果だけ見ればマッドガルド軍の勝利だろう。しかし我々は本土の防衛に成功した。事実奴らはこれ以上魔術師を失うことを恐れて後退を始めている。今後敵が海からここまで攻めてくることはないだろう……これでもいいんだ」

本当にそれでいいのだろうか。ラヴェンナは悔し紛れに東の空の果てを睨んだ。海の上にぽっかりと昇りきった太陽がまばゆい輝きを放っている。隣ではサルヴァレッツァが思いの外穏やかな表情で同じ空を眺めていた。

しかし大尉の言った通り、護衛艦隊が増援艦隊と合流して基地へ帰投するまでのあいだ敵が再び襲ってくることはなかった。

マッドガルド兵が攻めてきた。リツコたちは格納庫へ向かった。

リツコは既に地下街の構造をある程度把握していたが、火力船が置かれているという格納庫がどこにあるのかはまだはつきり分かっていなかった。おそらくあの工場のような施設が並んでいたあたりではないかと概ねの見当はついているものの、その道案内は酋長頼りだ。

細い通路の曲がり角。壁越しにルカが杖を構えて敵兵を迎撃する。ごうん、と大きな炎が膨れ上がり、敵の兵士が火達磨になって燃え盛る。

狭い空間の中では歩兵は魔術師の火炎放射を喰らうと逃げ場がない。完全に炭化して黒い泥人形のようになった焼死体が曲がり角にいくつも積み重ねられていくのを見ると敵兵はやがて戦意を失って引き返していく。

ルカは順調に敵の進撃を食い止めてきてはいるものの、複雑に絡み合った地下街の中で兵士たちはあらゆる場所から攻め込んでくる。

ルカが何度撃退しても次々と新たな敵が現れてくる。

「お主、まだ戦えるか」

ビリーの背中に負ぶさった酋長がルカに声をかけた。

「平気です」

開けた場所に出た。道幅が広く天井の高い空間で、脇から細い通路がいくつも続いている。

「左に向かって進め。右側の壁に沿って一番奥から手前に二つ目の道が最も近い」

酋長の指示に従ってリツコたちは格納庫を目指して突き進む。酋長を背負ったビリーが先導し、敵を迎撃するルカがしんがりを務める。

背後の通路、リツコたちが通ってきたのとは別の場所から敵兵が溢れ出てきた。

すかさずルカが真つ赤な炎を勢いよく放射する。帯状の火炎が通路の入り口を封鎖する。かろうじて攻撃を逃れた兵士たちを再びルカが狙い撃つ。いくつもの鋭い炎の槍が次々と発射され寸分の狂いもなく兵士の体に命中していく。

燃え盛りながら死に際に放たれた敵の弓兵の矢が飛来する。ビリーと酋長が危ない。

「ビリー避けて!!」

振り返ったビリーの顔の鼻先で矢は軌道をそらされ耳元をすり抜けていった。

標的を見失った矢はそのまま背後の壁に突き刺さる。

「危ねえところだったぜ」

はは、と笑ってみせながらビリーは再び前に向き直って先へ進んでいく。

「おい今のお前がやったのか？」

走りながらエリイがルカに問いかけた。

「何が？」

「矢の軌道を変えただろ」

リッコはまっすぐと前を向いてビリーのあとを追った。

「私は何もしてないけど」

「気のせいか」

細い小道へ滑り込み、曲がりくねり絡み合う通路の果てまでただひたすらに走り続ける。

角を曲がり、階段を降り、交差路を直進し、真っ暗で誰もいない厨房のような場所を通り抜け、また階段を降りる。

発電所が近づいてきた。どどどど、と腹の底まで響くような鈍重な振動音が床越しに伝わってくる。

「ここまで来ればもう大丈夫だろう。格納庫はすぐそこだ」

工場のような施設に沿って伸びた道を進み、その果てにある階段を降りると天井の高い広々とした場所に出た。空間の広さの割に電灯の数が少なく、施設の中はやや薄暗い。

地下街の中でマッドガード兵と接触してからここへ来るまでずっと走り通しだったのでリッコはひどく息を切らしていた。喉の奥が焼きつくように痛い。

「酋長さん」

息切れが収まるとリッコはビリーの背中から下りて前を歩いていた酋長に声をかけた。

「何だ」

「あの発電所は何を動力としているんですか？」

「砂だ」

酋長は短くそう言った。

「砂？」

「そうだ」

リッコが聞き返すも、酋長はそれ以上詳しく語ろうとはしない。

「それは一体どういう仕組みで」

「そこまでお前に喋ることはできん」

酋長はにべもない。ルピカがたしなめるように目配せをしてきた。これ以上余計なことを聞くなということだろう。

施設の中には奇妙な形の大きな機械やパイプで複雑に絡み合った装置のようなものがいくつも並べられている。天井を見上げるとキヤットウォークが網羅しており機械や装置の高い部分にも手が届くようになっている。

奥に向かつていく酋長についていくと、正面に巨大な扉が控えているのが見えた。がこんと酋長がレバーを下ろすと、分厚い鋼鉄の扉がゆつくりと開いていく。

「あれが火力船だ」

扉の向こうには翼を左右に二枚ずつX型に備えた小型の飛行機が十機から二十機ほど並べられていた。まるで艦載機を格納した航空母艦の内部のようだ。

「すげえ……」

ビリーが驚嘆する。

エリイはさつきからきよきよと落ち着きなくあたりを見回していた。

「さあ好きなのを選び。これだけあれば一つや二つはなんとかまともにも動かさるだろう」

「行き当たりばったりだな。まあ仕方ねえか」

「両翼を二人で片方ずつ持って運んでくれ。機体は軽く作られているから楽に動かせるはずだ」

ビリーがルピカと二人で列の一番手前の飛行機を押して運んだ。

リツコはその次にエリイがすぐ隣の飛行機を動かすのを手伝った。

酋長の言った通り機体は見た目よりもずつと軽かった。機首に一つ、両翼の下に二つ取り付けられた車輪がごろごろと転がって楽に進んでいく。二人で押せば原動機付自転車と大して変わらないくらいの重さを感じた。

「おい本当に一人乗りだな。酋長、これはどうやって開ければ？」

ビリーがコックピットを覆う透明なアクリル樹脂の窓に手を触れて言った。

「キャノピーはスライド式だ。中からも外からも普通にそのまま素手で開けられるようになってる」

「おお、なるほど」

ビリーが天蓋の取っ手のような部分に手をかけて動かすと、前面の風防の部分を残して球形の窓がそのまま後ろにスライドする。

ビリーはどこかに足を引っかけてコックピットへ乗り込んだ。ルピカがそれにならって隣に乗る。

「ああ、ここに足を乗せればいいんだな」

機体の側面にコの字型の出っ張りがあり、エリイもそれを見ると同じようにして操縦席に座った。

リッコもエリイに続いて彼女の隣に座った。

「うわ、狭っ」

「おい、もつと端に寄れよ」

「私の膝の上に座る？」

「お前ぶつ飛ばすぞ」

中は見えた目以上に狭く、二人で座るときぎゅうぎゅう詰めになる。

リッコは肩にかけていた雑嚢を足元の隙間に押しやった。

「そこに操縦桿が三つあるだろう」

リッコがエリイと揉み合っていると、酋長が隣からひよこつと顔を出した。背が低いため、機体によじ登らないと顔を出せないらしい。

「右が主電源。それを握って火力を送り込めば機体の制御システムが作動してプロペラが回り始める。真ん中はロケットエンジンだ。機尾から炎がそのまま推進剤として噴射して推力を得ることが出来る。飛行中は基本的に右の操縦桿を使いながら真ん中で速力を調節するといった形になるな。左は火炎放射器だ。機首から炎が発射される。敵を攻撃するためのものだ。まあ、これは使わずに済むことを祈る。左右の旋回、上昇と下降は手前の操縦輪で。奥のボタンを押すと車輪を引っ込めることができる。もう一度押せばまた出てくる。風防の手前にある鏡で後ろの様子が見えるようになってる。

これもわざわざ気にしなくても済むことを祈るが、戦闘時に敵に背後を取られないよう状況を確認するためのものだ」

それだけ言うと酋長は機体から下りてビリーの元へ向かって同じ説明を繰り返した。

そのあいだルカは退屈そうに箒に座ってふわふわと空中を漂っていた。ブランコにでも乗るようにして器用に浮遊しながら足をぶらぶらさせている。

説明が済んだのか酋長は「そこで待っている」と言って奥の扉を開けに行った。

先ほどと同じような鉄製の大きな扉がゆっくりと内側に開いていく。乾いた冷たい風が吹き込んできて、扉の向こうでは満点の星空の下に岩石砂漠が広がっているのが目に映る。

扉を開けると酋長が小走りで戻ってきた。

「まずは右の操縦桿から火力を流し込め。外に出たら真ん中の操縦桿でロケットエンジンを使うんだ。落っこちないように気をつけろ」

さあ行け、と酋長が手で合図する。

「まずは俺が先に手本を見せてやるよ」

そう言っただけでビリーが天蓋を閉めて一足先に飛行機を動かす。ぶうん、とプロペラが回り始め、機体が前に進んでいく。するとビリーはコツをつかんだのか機体を一気に加速させて発射口から飛び立った。空に出ると機体は一瞬下に沈んでから風に乗って上昇していく。

「エリイ」

ルカが箒にまたがってこちらに近づいてきた。

「大丈夫？ 気をつけてね」

「ああ。お前も遅れないようにな」

「分かってる」

会話を終えて前に向き直るとエリイは頭上の取っ手を引っ張って天蓋をしっかりと閉めた。大きく深呼吸してから、操縦桿を握り締める。

窓の向こうでルカが空中で停止したまま柔らかな表情でエリイを見

守っている。

エリイは真剣なまなざしで操縦桿を握ったまま機首のプロペラを見つめている。

不意に機体が大きく振動し、プロペラが勢いよく回転し始めると同時に急加速する。

リッコは思わず息を呑んだ。だが機体は壁にぶつかるともなくまっすぐと発射口に向かって突き進んでいく。

飛んだ。

外に出るとがくと機体が下へ落ちる。エリイは思い出したようにあわてて真ん中の操縦桿をつかんだ。

ぐんつと一気に加速して風に乗る。エリイが操縦輪を引っ張ると機首が上を向き、宙に浮くような感覚で機体が上昇していく。

南の方角を見るとやや前方をビリーの機体が飛んでいた。機尾のロケットエンジンが真っ赤な炎を噴射していて分かりやすい。

バックミラーを見るとルカがすぐ後ろについてきていた。箒にまたがり安定した軌道で悠々と空を飛んでいる。

雲一つない乾いた砂漠の空は綺麗に澄み切っており、周囲に人工の光はなく、玻璃を散らしたようなきらめきに三六〇度全方位を包み込まれていた。

季節は冬だったが、その空にリッコが知っている星座はない。ただ夜空にくっきりと浮かぶ満月の模様が故郷のそれと同じ見覚えのある形をしているだけだった。

眼下に広がる砂漠には大小感覚が狂わされるほど巨大な岩石の塊がごろごろと散在している。マッドベースを構成するあの巨大な一枚岩も、元はそんな岩石のうちの一つに過ぎなかったのだろうか。

マッドガルドの砂漠にはかつて巨人が住んでいた。そんな伝説がこの地にはある。リッコが耳にしたときにはそれは単なる御伽噺だと思っていたが、この景色を見ればその話も信じられるような気がしてくる。

しかし、それが本当かどうかは知らない。

砂漠の巨人 三

胴の長い白猫が砂の街の大通りを横切っていく。細い足をせわしなく動かし、往来を行く人々の動きを器用にかわしながら走り抜ける。

ふと猫は立ち止まり、顔を上げてひくひくと鼻をうごめかせた。どこか遠い異邦の地を思わせる新奇な匂いを感じたのだ。しかし猫はその匂いの主を見つけることはできず、猫もまたその匂いに強い興味をそそられずその場をあとにした。

「巨人は実在したと思う？」

シルカの問いに、メリーはすぐには答えなかった。まるでシルカの声など聞こえなかったかのように、メリーは往来を歩き続ける。

夕日は角ばった石造りの家々が縁取る輪郭線のすぐ近くまで傾いてきていたが、それでもなおその苛烈な輝きを放ち続けていた。矢のように横から照りつける日差しは砂塵が漂う大気をぼんやりと赤銅色に染めながら、うんざりするほど熱せられた路地の上に色濃い影を落としている。

「……分からない。でも、もしもかつて巨人たちがこんな途方もない広さの砂漠で水や食料を探し求めながらさまよっていたのだとしたら、それってすっごく不遇よね」

メリーはそう言って嘆くように首を振った。銀色の長い髪がそれにつられて左右に揺れる。

不遇、か。

メリーの言葉を反芻しながら、シルカは博物館で見た巨人の姿を思い起こしていた。

マッドガルドの建築物の多くはその構造上、日光をさえぎり、かつ熱を逃がす仕組みになっている。博物館の中は涼しいというほどではないにしても、外と比べると随分と居心地がいい。

巨人の化石を基にして作られたというその骨格標本は、おおよそ自分の背丈の五倍ほどはあるであろうと思われた。館内の天井は三階建て分の高さがあり、巨人は広々とした空間の中で逆に自分たちが小さくなってしまったのではないかという錯覚に陥るほど、異質な威光と存在感を放っている。

その発光領域に紫外線が含まれないという性質を持つ近代的な照明装置の明かりは光量が低くぼんやりと仄暗い。そんな中で見ると巨人は、見方によってはうっすらと大きな影のごとく立ち尽くす幽鬼のようにも思えた。化石というのは、考えてみれば死体と同じだ。ゾンビやゴーストを見るような感覚に襲われても不思議ではない。

「気味が悪い」

シルカは感想を口にした。巨人の化石とされるその骨は人間の全身骨格とよく似た形を成している。頭蓋骨から肋骨、骨盤まであまりにも酷似していて、巨大な人体模型が展示されているかのようにすら思えてくる。そんな化け物じみた不気味さがそこには漂っていた。

「どう思う？」

メリーは興味深げな表情で巨人の化石を見上げていたが、シルカがそう聞くと彼女は「この化石、本物の？」と首を傾げた。

シルカは展示板に目を向けてみたが、その文字はマディミール語で書かれていた。丁度すぐそばを学芸員風の男が通りかかったのでシルカは彼を捕まえて「展示板の文字が読めないので代わりに話して聞かせてほしい」と解説を求めた。全く読めないわけではなかったが、慣れない文字を独力で翻訳して読むのは面倒だったのだ。男は不意に呼び止められて少し驚いた様子だったものの、シルカとメリーの姿を見ると快諾して詳しく話を聞かせてくれた。

マッドガルドの砂漠には、かつて巨人が住んでいた。それは古くからこの地に伝わる伝説だった。しかし最近になって実際にマッドガルド国内の岩石砂漠から巨人の化石が発掘された。それをきっかけに伝説はただの伝説ではなく、歴史的根拠を持った言い伝えなの

ではないかと思われ始めた。しかしこの話に対しては当然、懐疑的な者もいる。誰一人として実際に生きていた頃の巨人の姿を見た者などいないのだから。

いずれにしても、巨人たちは滅びた。現代のマッドガルドには巨人などいないというのが、その何よりの根拠だ。巨人の化石が発掘されて以来、巨人たちは今もなお生きていると信じてやまない者が「砂漠に生息する巨人の姿を目撃した」などという噂を流すこともあったが、そのほとんどは今では単なる蜃気楼や幻覚などによる与太話に過ぎないことが分かっている。

伝説が真実だとすれば、巨人たちはこの砂漠でどのように生活していたのか。そしてなぜ滅びたのか。解明されていない謎は未だに多い。正確な情報を得るにはまだまだ手がかりが足りない。もっとたくさんの化石が発掘されれば巨人たちの正体があかめるかもしれないが、マッドガルドには考古学にそこまで精力的に働きかけるだけの余裕はない。国力が不安定なため、人々の暮らしを豊かにすることに直接関係するようなもの以外の分野の学問にはなかなか予算が下りないのだ。

学芸員の男はそこまで話すと苦笑して肩を落とした。シルカは礼を告げて話を終わらせ、メリーとともに博物館をあとにした。

城へ着いた頃には既に日が暮れていた。視察などと称して魔術師二人でわざわざ一日中街を散歩していたものだから、帰りもせつかなのでと歩いて帰ってきたのだ。シルカはメリーと一旦別れ、食事を済ませると資料を集めて再び彼女の部屋へ向かった。

シルカ・メルヴィル大佐はマッドガルド軍総監部の兵站総監という地位にいる。同じく総監部の参謀長であるメリーと普段行動をとりにしている。階級はシルカと同じ大佐。ただし彼女は通常、メリーと呼ばれる。愛称ではなく、一般に姓名を明かしていないのだ。シルカたち二人はともにエルザリア出身の者だった。アイリスの世界からマッドベースの塔を経てサラの世界に訪れ、マッドガルドへ

やってきた。マッドガルド政府は軍司令部の下にシルカとメリーを首脳とする総監部を設け、その隷下に対マッドスコープ戦の主力部隊を置くことで当面の戦争において彼女ら二人が全面的に指揮を執ることができるよう采配を振った。

扉を三回ノックする。「どうぞ」と中から主の声がする。

シルカが部屋の中へ入ると、ベッドに腰掛けていたメリーは読みかけの本に栞を挟んでそれを向こうへ押しやった。

メリーに促されるままシルカは丸テーブルの上に持ってきた書類をどさつと置いてその手前の椅子に腰掛ける。

「さて」

テーブルに置かれた書類の中から一枚の資料を取り出し、シルカは話を切り出した。

「先日のスラージャ沖海戦において、数で勝るマッドガルド軍がなぜマッドスコープ軍に敗れたのか」

メリーはベッドの縁に座りなおして居住まいを正す。

「マッドスコープ軍の戦力は母艦一隻、護衛艦四隻、魔術師三名。うち損害は護衛艦一隻沈没のみ。それに対してマッドガルド軍の戦力は母艦二隻、護衛艦八隻、魔術師二十七名。そのうち魔術師二十二名を失った。ただしこの戦いで計十隻いた艦船はそのいずれも直接戦闘に参加していない」

シルカは手に持った紙面越しに窓の外に目を向けた。マッドガルドの首都ガルナディアの中心部に位置する王城の外郭に当たるこの部屋の窓からは夜の街の景色が一望できた。真っ黒な空とその下に広がる砂漠の岩山を背景に小さな灯火がぼつぼつと浮かび上がっている。

「どうしてマッドガルド軍の艦船は魔術師とともに戦闘に参加しなかったの？」

メリーの問いに、シルカはぱちんと指を鳴らした。

「問題はそこなのよ。この戦いは、結果から見ればどう考えても作戦負け。ではなぜ我が軍は魔術師と艦船が同時に戦おうとしなかつ

たのか？ 私が思うにはね、根本的な原因は、マッドガルドの魔術師たちは航空戦力としての精度はかなり低かったってことなのよ」

シルカは一枚目の資料をテーブルに戻し、書類の山から別の数枚の資料を取り出してそれをメリーに手渡した。

資料に目を通すなりメリーは眉をしかめる。おそらく、シルカの走り書きの文字が汚いせいだろう。マディミール語で書かれた原文に沿うようにしてシルカはエルザリア語に翻訳した内容を上に添え書きしておいたのだ。

「そこに書いてある通り、マッドガルド王国は古来より魔術によって築かれてきた文化と伝統があり、その歴史の重みゆえに魔術文明の水準は高く、優れた技術を持っている。ただしそれはあくまで生活レベルの話であって、戦争における航空技術は私たちエルザリアの魔術師と比べるとまだまだ劣っている」

メリーは渡された資料の一枚目をめくって後ろへ回し、二枚目を読み始める。

「それはなぜか。マッドガルドの周りには他に魔術文明を持つ国がなかったから」

シルカは足を組み、背もたれに身を預けた。みし、と椅子が軋む小さな音が背中越しに伝わってくる。椅子にもたれると先ほどまでは窓の縁に隠れて見えていなかった月が姿を現す。今夜は半月だった。

「当たり前の話よね。魔術師と魔術師が互いに殺しあうような戦いを経験していなければ、それに必要な技術は身につかない。エルザリアみたいなアイリスの世界の国々と違って、このマッドガルドの魔術師たちは常に魔術師以外の者を相手に戦ってきた。意地悪な言い方をしてみれば、怠けてたってこと。だから同じ魔術師と戦う術を持たなかった」

二枚目まで読み終わるとメリーは残りのページにざっと目を通しただけでもう満足したとばかりに順番を正してその資料をシルカに返す。シルカは受け取った資料をテーブルの上に戻してから話を続

けた。

「もちろん魔術によって空を飛ぶっていう技術はこの国にも文化としては存在するけど、戦争において空中でめまぐるしく動き回りながら敵の魔術師を撃墜するなんてことに関しては、具体的な知識や技術がまだまだ発達していない」

話しながらシルカは耳のあたりから伸びる髪の毛をくるくると指でもてあそび始めた。ゆったりと柔らかく波打つ亜麻色の長い髪が蛇のように指に巻きついていく。

「マッドガルドの魔術師は一方的に歩兵ばかりを攻撃することに慣れすぎていたのよ。だから自分たちの力を過信した。魔術師は歩兵よりも強い。だから魔術師は強い。他の何よりも　マッドスコープの魔術師を前にしても、そんな単純な勘違いに気づくことができなかつた。同じ魔術師同士でありながら、何の根拠もなく自分たちはあいつらよりも強いって思い込んでた」

シルカは指先でいじっていた髪をほどき、それを肩の後ろへ押しやった。

「だから負けた」

かちり、と時計の短針が動く音がした。ベッドの脇のサイドテーブルの上に置かれたその時計は丁度午後八時を指していた。

「そもそもマッドガルドは当初、マッドスコープ側に魔術師はいないものと考えていた。それが今やマッドスコープは何人かの優秀な魔術師を従えている」

「私たちエルザリアの魔術師と同じか、それ以上に優秀な？」

「場合によってはそれもありうると思うと、是非とも一戦交えたところね」

シルカはにやりと口角を吊り上げる。

「それはともかく、先の戦いでマッドガルド軍の魔術師が自分たちの艦船から離れて単独でマッドスコープ軍の護衛艦隊に攻撃を仕掛けたのはなぜかという点、その理由の一つは、今も言ったようにそもそも敵に魔術師なんかいないだろうと思っていたから」

「予め敵が魔術師を従えている可能性もあると通達しておいたのにね」

メリーはあきれたようにため息をついた。

「じゃあなんで敵に魔術師がいなければこちらは魔術師のみで攻撃を仕掛けたほうがいいということになるのか？ それは魔術師によって空から攻撃を仕掛ければほとんど一方的に敵艦を沈めることができるから。だからわざわざ艦船がともに攻撃を参加する必要はなく、戦力を温存しておこうと考えたわけ」

シルカは足を組みなおし、椅子の肘掛けをとんとんと指で叩いた。「もう一つの理由は、退路の確保のため。もしもこちらが母艦を失えば、魔術師たちは安全に基地へ帰ることができなくなる。ただでさえマッドガルドの魔術師は空中での戦闘に慣れていないのに、海上で空戦を交えたあと母艦に降りることなくそのまま本土までの距離を飛び続けるなんてことをすればあまりに大きな危険を負うことになる。そこを敵に襲われたらひとたまりもないからね。帰る艦を失った魔術師は長時間の飛行と戦闘で疲れ果て、やがて力尽き撃ち落とされる。だからマッドガルド軍は艦で近づけるところまで近づいておいてから魔術師だけを先に飛ばし、敵に艦が見つかるよりも早く敵の艦を見つけ、敵艦を沈め次第再び味方の艦に戻るという作戦を取ったわけ」

話を聞きながらメリーはわずかに首を傾げ、視線を右上に投げかける。

「ところが、魔術師のみで敵艦を沈めるには、マッドスコープ側の魔術師はあまりにも強かった。いや、ここではむしろ敵の魔術師と比べてマッドガルド側の魔術師が弱かった、と言ったほうがいいのかもね。敵の魔術師は護衛艦隊の対空射撃を味方につけながら戦うことができたのに対し、こちらは魔術師のみで艦と魔術師の二つの敵を同時に相手にしなければならなかった。これも敗因の一つね。マッドガルド軍は母艦を失うことを恐れすぎた。結果を見てから言うてしまうと、マッドガルド艦隊がマッドスコープ艦隊とそのまま正

面衝突していれば、マッドスコープ軍にマッドガルド軍の艦を沈めることはできなかった。それくらい両軍の艦船の性能には差が開いていた。火力、速力、防御力、全てにおいてマッドガルドの艦はマッドスコープのそれを上回っていた。マッドガルド艦隊の火炮をもつてすればその艦体のほとんどが木造であるマッドスコープの艦なんかあつという間に燃え上がる。おまけに砂機関の動力を補助として備えているだけの帆船は蒸気機関を搭載したマッドガルドの船からは逃げられない」

シルカはそこで一旦言葉を区切り、ゆっくりと息をついた。

「だから次はもう失敗しない。素直に艦隊とともに正面攻撃を仕掛けさえすれば、マッドガルド艦隊は今度こそ完全に勝利を手にする」
そう言つてシルカはぐつと右手の拳を握り締める。

「でもいかに艦の性能で勝つているとはいえ、マッドガルド軍はこの戦いに参加した魔術師の大半を失っている。だから艦隊は無傷であつたにも関わらずマッドガルド艦隊は攻撃を続けることなく撤退した。それ以上魔術師を喪失することを恐れたから　　そうでしょう？」

紺碧色の瞳がシルカを射止める。

「その通り。だから今言つた話に加えて、この私が前線に出向いてやればいいつてわけなのよ。できればメリー、あなたもね」

シルカはまず自分の胸に手をかざし、次にメリーを指してそう言つた。

「そうすれば前みたいに魔術師の大半を失うことは防げる」

「私たちが次の海戦に参加するの？　そのあいだに敵がマッドベースに攻め込んできたらどうするの？　いくら鉄道のレールを切断してマッドスコープが安易に攻め込んで来れなくなったとはいえ、そんなのは時間稼ぎにしかない。戦争が始まってからもう一ヶ月以上が経つてる。私たちが次の海戦に参加しているうちにマッドスコープ軍がマッドベースに攻め込んでこないなんて保証はない」

メリーは目を伏せて小さく首を振った。

「それに防衛拠点はマッドベースだけじゃない。マッドスコープ軍は陸路からも進撃してきてる。もしもソルケットを落とされたら首都からマッドベースへの経路が断たれてしまう」

メリーの指摘は的確だった。シルカの辿った思考と完全に一致していた。しかしシルカはさらにその先を考えていた。

「マッドベースはそれ自体が天然の要塞。首都には將軍率いる常備軍がいる。ソルケットまで攻めて来ようものなら首都の常備軍とマッドベースに駐屯する軍とで挟み撃ちにしてやればいい。でも海の戦いには、私たちが行かないといけない」

シルカは椅子から立ち上がり、腕を組んで板張りの床の上を歩き始める。

「それは本当に必要なの？ 海からの攻撃は」

メリーはシルカを見上げて言った。

「必要？ いいえ違うわ。必要だからやるんじゃない。これはチャンスなのよ。少しでも勝利への確実性を上げるために、より多くの返報を得るチャンス」

話しながらシルカは部屋の中をゆっくりと歩く。ベッドの脇から反対側の壁に面した本棚の手前まで、短い距離を往復する。こつこつと、メトロノームのようにブーツの底が一定のリズムに沿って床板を叩く。

「確かに今やマッドスコープはいつマッドベースに攻め込んできてもおかしくない。でも現にまだ彼らは攻め込んできてはいない。これはつまり私たちには猶予があるということ。言い換えてみれば、次の攻撃をぶつけるだけの余裕がある。つまりチャンスよ。確かに私たちが海戦に参加しているあいだにマッドベースを攻め込まれる恐れはある。でもマッドベースだって今もなお刻一刻と要塞化が進められているんだから、そう簡単に落ちはしない」

歩きながら両手を広げ、シルカは背中越しに訴えかける。

「私たちがマッドベースで敵を待ち構えたまま、私たちを抜きにしてマッドガルド艦隊が再びスラージャ半島を攻めるのだとしたら、

また前みたいに苦戦を強いられることになる。場合によってはそもそも次の攻撃なんて仕掛けないほうがよかったという結果になるほどの反撃を受けるかもしれない。マッドガルド軍がスラージャ沖で攻めあぐねているうちに、もしもマッドスコープが実際にマッドベースに攻め込み始めたなら？ それこそこちらに海からの攻撃を仕掛けている余裕なんてなくなる。私たち魔術師は総出でマッドベースを防衛しなきゃいけないよ」

そこでシルカは振り返り、ぱちんと指を鳴らした。
「やるなら今よ」

シルカはメリーの反応を窺う。メリーは床の一転を見つめたまま沈黙を破らない。その頭脳では今おそらく高度で緻密な計算がされている。しかし考えられうる何通りの結果を算出しようとも、確率論からは抜け出せない。どこかで賭けに出るしかないのだ。

やがてメリーは口を開いた。

「悪くない」

そう言いながらメリーは小さくうなづく。

「悪くない作戦。でもあなたは本当に賭けるのが好きね。攻撃的で積極的で、それでいて打算的。いつもあなたは何もしないことを選ばない。見ていて飽きないわ。その作戦、実行しましょう」

次の総監部会議で挙げる議題が決まった。あとは具体的な実行日時、攻撃目標、参戦勢力などを他の総監部の士官たちとともに話し合っただけ。

こうしてスラージャ半島を目標とする第二次攻撃は決行された。

マディミール大陸は大きく海を挟み込むように折れ曲がった形を成している。周りを砂の大陸に囲まれたその内海は泥砂海と呼ばれている。泥砂海を中心にマッドガルド王国は南東に、マッドスコープ王国は北西に位置している。そのマッドスコープ領の沿岸地域の東端から泥砂海へ向かって大きく弧状に突き出ているのがスラージャ半島と呼ばれるものだ。スラージャ半島は泥砂海に面した周辺諸

国と海上貿易を行うためのシーレーンを数多く有していると同時に、国防における戦略上の重要な拠点でもあった。

マッドスコープの首都スコピオンはスラージヤ半島を挟んで反対側の湾岸に面している。マッドガルドが海からマッドスコープを攻めようとした場合、そのスラージヤ半島が首都を守る天然の城壁として立ちはだかるのだ。

戦争が始まってからおよそ一カ月後に行われたスラージヤ沖海戦では、マッドスコープ軍は護衛艦一隻を失うも敵の魔術師のほとんどを撃墜しマッドガルド軍の撤退を余儀なくさせるという戦果を得た。戦術的には可もなく不可もなくというところではあるものの、スラージヤ半島を防衛できたことから戦略的にはマッドスコープ側の勝利だった。しかしそのとき計十隻の存在が確認されたマッドガルド軍の艦船は全て無傷のまま戦線を離脱している。いかに魔術師を多く撃墜させたとはいえ、いずれまた人員を補充して大規模な攻撃を仕掛けてくるであろうことは容易に推測されていた。

一方その頃、マッドガルドからマッドベースへの軍事経路の遮断を目的とするマッドスコープ軍はマッドガルド領の砂漠の上で苦戦を強いられていた。マッドガルド特有の岩石砂漠という地形においてマッドスコープ軍は補給路を維持するための効率的な輸送手段を持っていなかったのだ。当時のマッドスコープ国内では、水面を泳ぐ蛙のような動きで砂を押しつけて進むという形の船が砂漠における一般的な移動手段として用いられていた。その船は魚のようなひれを持ち、砂漠の上を泳ぐように移動する。砂砂漠特有の乗り物だ。従来のその船では、岩石砂漠は越えられない。マッドスコープ軍はマッドガルド領の奥地へと歩を進めれば進めるほどその補給路が敵の魔術師による空からの攻撃で危険に晒されるといってジレンマに陥っていた。

しかし事態は一変する。マッドスコープ軍は道中で制圧してきた都市の中から魔術によって動いていたものと思われる車の残骸を発見した。車といってもその動力を地面に伝えるための部品は車輪で

はなく、蜘蛛のように伸びた八本の足だ。マッドスコープ軍は直ちにそれを本国に持ち帰り、魔術師でない者にも扱えるよう改良を施した。魔術の代わりに、砂機関を動力源として搭載したのだ。舗装された路面の上を走ることの特化した車輪でもなく、砂の海を進むことに特化したひれでもない八本の足を持つその車は、岩石砂漠と砂砂漠の両方を横断することができた。

砂機関は動力源である砂を収容するための膨大な容積を必要とするため、どうしても小型化することはできないという特徴がある。マッドスコープ独自の技術を用いて新たに開発されたその車は、元のモデルを遥かに凌ぐ大きさとなった。その結果、目立ちやすく狙われやすいという弱点を補うために、その車体は分厚い鎧で覆われた。装甲車が誕生した瞬間だった。マッドスコープは全力を尽くして装甲車を量産し、いち早くそれを前線に投じた。

こうしてマッドスコープ軍の機動力は飛躍的に向上した。戦線は一気に拡大し、両軍の戦いはいよいよ激化の一途を辿った。また、鉄道のレールを切断されたことよって輸送手段が確保できず見送られていたマッドベース攻撃作戦も、ここへ来てようやくその目途が立ちつつあった。マッドスコープは従来の列車を改造し、レールを外された砂漠の上を直接走る砂列車を開発していた。レールはマッドスコープとマッドベースの国境である砂砂漠と礫砂漠の境目で切断されているため、途中までは船のように砂漠を進み、マッドベース領へ入ると同時に移動装置を車輪に切り替え、その切断面からレールに乗り上げていくという方法だ。砂列車の開発は着々と進んでおり、その完成は目前に迫っていた。装甲車という新たな戦力の獲得も後押しして、マッドスコープは砂列車の製造が完了し次第マッドベース攻撃作戦を実行しようと考えた。

マッドスコープは前回の失敗を教訓に、少なくともマッドベース攻撃作戦始動までのあいだはスライジャ沖に海軍の全戦力を展開して敵の攻撃に備えることにした。また艦船の速力も敵のほうが優れていることが判明していたため、マッドスコープ軍は各母艦から哨

戒の魔術師を展開させ、標的を発見し次第魔術師のみで敵を撃滅するという作戦を取った。前回のスラージヤ沖海戦から三週間が経ち、アストラピア本部からの増援でマッドスコープ軍が擁する魔術師は八人になっていた。マッドスコープの母艦は全部で四隻。八人の魔術師は各母艦に二人ずつ配属され、それぞれの母艦を拠点に日の出から日没までの時間を半分ずつ、一度に四人が飛行する形で哨戒を続けていた。哨戒は日中のみ行われた。魔術師が連続して飛行できる時間は限られている。艦船を沖合いに待ち伏せさせたまま魔術師のみで泥砂海全域をカバーするには二十四時間体制で哨戒を行わせるのは到底不可能だったのだ。それでも八人の魔術師だけではマッドガルド艦隊が通過すると想定されている海域の約半分をまかなうだけでやっとだった。マッドスコープ軍は少しでも索敵範囲を広げるため、夜間哨戒は取りやめた。魔術師の夜間飛行は非常に危険である上、前回の海戦においても敵は夜明け頃に攻めてきたことから、哨戒を行うのは昼間のあいだのみで充分だろうと考えたのだ。

結果としては、その考えは裏目に出た。マッドガルド艦隊はまさに夜戦を仕掛けてきた。

深夜。水兵がラツパを吹き鳴らしながら敵襲を告げる声でラヴェンナは飛び起きた。足に絡まる毛布を蹴飛ばし、とんがり帽子を拾い上げる。

ラツタルを上って甲板に出た途端、強烈な光に晒されて目がくらむ。艦に何かが激突し、不意に足元が傾いてよろめく。

「どきなさいベルクシュタイン。そこにおいては邪魔になります」
すつと何者かに手を引かれた。優しい口調に透き通った声。サルヴァレッツァだ。

艦は敵艦の探照灯を浴びていた。まばゆい光に目を焼かれ、視野が黒ずんでよく見えない。水兵たちの叫び声がやたらと耳にこびりつく。

「私はこのことをフラヴィニー大尉のいる旗艦まで伝えるに行きます」
サルヴァレッツァがラヴェンナの手をつかんだまま話しかける。

再び甲板に振動が走る。サルヴァレッツァが腕を引いてラヴェンナの体を支える。

「ベルクシユタイン。あなたにはこの艦の護衛を頼みます　できるだけ時間を稼いで」

徐々に奪われた視力が戻ってきた。色素の薄い透明な肌。銀色の長い髪。浅葱色の双眸。目の前のサルヴァレッツァの面影が色彩を伴ってゆっくりと蘇る。

ラヴェンナがこくりとうなづくのを確認すると、サルヴァレッツァは手を離して甲板から飛び立った。

ラヴェンナも箒にまたがり、上空へと舞い上がる。探照灯を向けてくる敵艦が右方に二隻。それとは別に三隻の敵艦が前方に展開している。ラヴェンナは時間を稼げと言われた意味を察した。

ざっとあたりを見渡す。編隊を組んで周囲を旋回する敵の魔術師が六人。氷の槍を腹に抱えている。先ほどから艦を襲っていた振動はあの攻撃が原因か。

敵はラヴェンナの姿に気づくと六人のうち二人がこちらへ向かってきた。

ラヴェンナは敵を誘い出すように艦から離れる。同時に氷の弾丸を作り出す。

敵弾が闇夜に紛れて襲い来る。ラヴェンナは難なく避ける。しかし昼間と比べるとラヴェンナの回避能力は半減していた。ラヴェンナの優れた動体視力は、暗闇の中ではその力を充分に発揮できないのだ。ラヴェンナはなるべく攻撃を受ける機会を減らそうと考えた。ラヴェンナは大きく夜空に弧を描く。敵の魔術師がその動きを追う。ラヴェンナは二人の敵と自分とが一直線上に並ぶのを待つ今だ。

弾丸を連射する。放たれた氷の刃は敵の体を正確に貫き、一度に二人を撃墜する。

残りの四人を見る。四人は横一列に並んだまま氷の槍で艦を狙う。時間を稼げとサルヴァレッツァは言った。この艦は困だ。

ラヴェンナは四人の背後へと回った。敵の死角を突くのが狙いだ。ラヴェンナも鋭い氷の槍を生成する。

艦は大きく旋回する。敵がその横っ腹へ急降下　攻撃の瞬間を見極める　敵が槍を艦へ放つ　ラヴェンナも槍を敵へ放つ

四人のうち一人を槍が突き刺す　体を貫かれた魔術師はそのまま甲板へ叩きつけられる　敵の放った氷の槍は一本が海へ落ち三本が艦へ刺さった。

がくんと艦の速力が落ちる。

敵の魔術師は再び空へ舞い上がる。ラヴェンナはあとから敵を追いかける。

氷の弾を作りながらぐんぐん敵との距離を詰める。

敵は探照灯の光の中へ飛び込んでいく。ラヴェンナは敵を撃つ。きらきらと氷の弾がその光を反射する。

敵は海面近くを飛翔する。ラヴェンナもそれに追隨する。波飛沫を立てながら風圧で海が凹む。

やがて敵が急上昇　ラヴェンナもそれにならう　突如突き上げてくる水柱　避けられない！！

どっぷりと水柱に捕らえられ、波間に身をさらわれる。冷たい海水に全身がつかる。もがく足はむなしく水をかき続け、波に顔をうずめられ不快な潮の味が口に広がっていく。

ラヴェンナは箒を支えに体を海から引き上げる。

そこへ敵の魔術師が襲い来る。弾を撃ってくるかと思いきや、大波を起こしてまたもラヴェンナを海へ沈める。鼻に水が入ってげげほと咳き込み、再び波をかぶって咳き込むのを繰り返す。

杖と箒を握り締めたまま、ラヴェンナは海面から顔を出す。ずぶ濡れのローブが体にまとわりついて気持ち悪い。

「はあい、お嬢ちゃん」

頭上から声をかけられる。

菜種油色のローブの女がラヴェンナの鼻先で箒に乗って浮遊していた。

「風邪引かないうちにおうちに帰ったらいかが？」
くすくすと笑いながら挑発する。

「くそ！」

ラヴェンナが杖を向けて弾を放つも、女は一瞬で目の前に氷の壁を作り出し、それらを全て弾き返した。

「あはははははっ」

女はけらけらと笑い転げる。

「悔しかったらここまで上がってきてごらんなさい」

大きなウェーブのかかった亜麻色の髪を翻してもう一回り高いところまで舞い上がると、女は再び波を起こした。

ざばあと波に飲み込まれ、体が海に引き寄せられる。ラヴェンナは水を吸い込んでむせ返り、苦しさのあまり涙が出た。

「ほらほらどうしたの？ 早くしないと味方の船が沈んじゃうよ？」

そうだった。私が艦を守るんだ。

きつと女を睨み、ラヴェンナは箒を握る手に力を込める。ぐいつと箒を持ち上げ、箒で体を持ち上げる。上半身が海から出る。

すかさず女が杖を向ける。間髪入れずに波が襲う。ラヴェンナの体を大きく揺さぶる。しかしラヴェンナは屈しない。宙に浮かせたままの箒にしっかりとしがみつく。女は緩急をつけて繰り返し波を引き起こす。ラヴェンナは両手で箒を握り締め、腕を曲げてしがみつき波に飲まれないよう耐え続ける。

「なかなかやるね」

女はにやにやと意地悪な笑みを浮かべて近づいてくる。

何をするのかと思いきや、ぱぁんと女は頬を張った。目の奥で火花が飛ぶ。

「でも両手がふさがってちゃあ反撃もできないでしょ？」

濡れた頬がひりひりとしびれる。

二度、三度、と女は繰り返し頬を張る。ラヴェンナは左頬が次第に熱を帯びてくるのを感じた。

そのあいだも容赦なく激しい波が体を揺さぶり、ラヴェンナは箒

から引きずり下ろされないようにしがみついただけで精一杯だった。

「ごぉん、と大きな音が聞こえるときにも視界の隅で赤いものが目に映る。」

はっとして目を向けると艦に火が放たれていた。ざわっと胸に冷たいものが落ちていく。

「よそ見してる暇なんてあるの？」

女から目をそらした隙に頭を靴で踏みつけられる。

「もう一回沈めてあげる」

徐々に足に力が込められていくのが分かる。やがて全体重をかけたくる。

ラヴェンナは耐え切れずついに腕を伸ばした。迫り来る波が頭のとっぺんまで覆いかぶさる。依然として女の足に頭を押さえつけられ、這い上がることができない。されるがままに繰り返し顔面に海水を叩きつけられる。

「このまま海におぼれてみる？」

定期的に波に視界と音を奪われ、外界からの情報が断続的に届けられる。

女の体重を全て腕で支えきれはるはずもなく、ラヴェンナは徐々に握力を失っていった。箒を握る手が少しずつ開いていく。

「ふふ……限界みたいね」

ラヴェンナは手を放した。ざぶんと海に突き落とされる。

箒はどこだ。ラヴェンナは必死に腕を伸ばしてあたりを探る。

「何を探してるの？」

ラヴェンナは顔を上げた。箒は女が持っていた。ラヴェンナが手を離すのと同時に女が箒を奪い取ったのだ。

終わった。箒の支えなしでは空を飛ぶことはおろか海から抜け出すこともできない。

「ねえ、箒なしでそこからどうやって上がってくるのか、お姉さんの前でやってみせてよ」

うやうやしくラヴェンナの箒を抱えながら、わざとらしい口調で

女が言う。

ラヴェンナは悔し紛れに杖を向けて炎を撃つ。刹那、女は突風を巻き起こして跳ね返す。真つ赤な炎を浴びて濡れたラヴェンナの顔は一瞬で熱湯を浴びたかのようになった。

この距離でどうやって跳ね返したんだ!?

女の尋常ならざる強さにラヴェンナは恐怖を感じ始めた。

「あなたじゃ何をしたって私に勝つのは無理よ」

くすくすと笑いながら女が言う。

何をしたって勝つのは無理。

かちんときた。その言葉がラヴェンナの心に火をつけた。

「おい、お前」

「なあに?」

嬉しそつに女は聞き返す。

「氷がなぜ水に浮かぶか、知ってるか?」

言うが早いか、ラヴェンナは瞬時に海中で足元に氷塊を作る。その氷塊を足場にして一気に体を持ち上げる。

氷が新たな筈となり、少女の体を宙へ浮かす。

ラヴェンナはすぐさま自分の筈を取り返し、氷の上に乗ったまま後ろへ退いて距離を置く。

「へえ、驚いた。やればできるじゃない」

女は目を丸くした。

ラヴェンナは見事生還を遂げた筈にまたがって、用済みとなった氷を女へ投げつける。女はくるりと宙返りして難なくそれを回避する。

すかさず氷の刃を連射する。女は海面から氷の壁を立ち上げて涼しい顔で防ぎきる。

「ちっ!」

ラヴェンナは舌打ちしながら火炎を放射する。火炎は氷の壁を数秒で溶かすも、それを突破すると同時に向かい風で跳ね返される。

ラヴェンナは上空へ離脱してそれを回避した。

「くそっ」

ラヴェンナは体勢を立て直して女を見下ろす。

「さっきも言ったでしょ、何をしたって私に勝つのは無理だって」
喋りながら女は飄々と同じ高さまで上ってくる。

「おい、あれは何だ」

「へ？」

女は後ろを振り返る。

ラヴェンナは大きな火炎を放つと同時に激しい追い風を巻き起す。騙し討ち。女は炎に飲み込まれ追撃の熱風で吹き飛ばされる。その隙にラヴェンナは脱兎のごとく逃げ出した。

あの程度で倒せるような相手じゃない。今のうちに味方と合流しなくては。

やっこのことで戻ってきた頃にはラヴェンナの乗っていた艦は既に炎上しながら沈んでいくところだった。黒々とした煙が黒い夜空をさらに黒く染めている。

「他の連中は何をやってるんだ」

囷とはいえ他の艦が接舷して乗員の救助くらいしていてもおかしくないはず。

そこでラヴェンナは気づいた。艦に探照灯を当てていた敵艦の姿がない。考えてみれば当然だ。艦は既に沈んでいるのだから。つまりその艦は今他の方艦と戦っているということになる。

ラヴェンナは先を急いだ。旗艦へ向かうと言ってサルヴァレッツァが飛んでいった方向を思い出しながら、全速力で前進する。

やがて水平線の向こうの空が赤く染まっているのが見えてくる。

またやられているのか。

近づくにつれて徐々に激しい炎が燃え滾る音が聞こえてくる。

炎上しているのはマッドスコープ軍の旗艦だった。敵の猛攻を受けていたのか、操舵機能を既に失い、うつろに海を漂うままととなっている。護衛艦が一隻そこへ接近し、小船を渡して海へ飛び降りた乗員を救出している。しかしそこへ敵艦が追い討ちをかける。

至近距離まで近づいてきたかと思うと、その艦首から真っ赤な帯状の炎を放射する。旗艦は一際大きく燃え上がり、紅蓮の炎が黒い夜空を真っ赤に焦がす。救助に当たっていた護衛艦は慌てふためくように旗艦から離れていく。

ラヴェンナは旗艦の状況を確認した。まだ甲板に人が倒れている。全身水浸しなのは好都合だった。ラヴェンナは炎上する甲板に飛び降りる。

倒れているのはサルヴァレッツァだった。

「サルヴァレッツァ！」

背中に大きな傷を受けている。おそらく氷の槍で体を貫かれ、炎でその槍は既に溶けてしまったのだろう。

ラヴェンナはサルヴァレッツァの元へ駆け寄って彼女の体を抱き起こした。

「ベルクシュタイン……うっ！」

肩を抱くとサルヴァレッツァは傷に触ったのか苦痛に顔をゆがめた。

「お願いです……ベルクシュタイン……大尉を止めて……」

「おい！　しっかりしろ！！」

ラヴェンナはサルヴァレッツァの体を背負い上げる。

「や、やめてください……私はもうだめです……ベルクシュタイン

……私に構わず一人で行くのです……」

「まだ救助の艦がすぐそこにいる！」

ラヴェンナはサルヴァレッツァの体を背負ったまま幕に乗った。

ゆっくりと火の手をかわしながら上昇する。

敵の攻撃を注意深く避けながら逃げ惑う護衛艦を追いかける。

早く。早く手当てをしなければ。

海水を大量に飲んでいただけでもあって、ラヴェンナは喉がからからに渴くのを感じた。

護衛艦に降りるや否やラヴェンナは直ちに軍医を呼んだ。しかし軍医や衛生兵が駆けつけるまでもなく、そばにいた水兵が黙ったま

ま静かにラヴェンナの肩に手を置いた。

サルヴァレッツァは、既に事切れていた。

「嘘だ……」

さっきまで自分と喋っていた人間が、今では物言わぬ死者と化していることに、ラヴェンナは受け入れがたいものを感じた。まだ何か息を吹き返す手立てがあるのではないかと考えた。

ラヴェンナはサルヴァレッツァの頬に手を当てた。真つ白な彼女の頬は、生きているときよりもなお白かった。そのまま唇に指を当てて、ラヴェンナは彼女が最期に言っていた言葉を思い出した。大尉を止める、と。

ラヴェンナは飛び上がった。

フラヴィニー大尉はどこにいる。

当てもなく探し求めた。しかしすぐに見つかった。あたりはもう敵艦が味方の艦を焼き尽くすだけで、空を飛び敵の魔術師と戦う影は一つを除いて他に見当たらない。

ラヴェンナは理解した。味方の魔術師はもはや自分と大尉しか生き残っていないのだと。だからこれ以上魔術師を死なせないために、大尉を止めるということだ。

大尉の戦う相手は普通の魔術師のようには見えなかった。箒に乗っている様子はなく、何の支えもなく自由自在に飛び回っている。白い衣装に身を包み、長い銀髪を翻し、踊るように空を舞う。

死闘の末にメリーに狙いを定めてきたその魔術師の表情には鬼気迫るものがあつた。何が何でもお前だけは生きては帰さぬ。そんな執念を感じさせる気迫がある。どんなに弾を浴びせても、怯む様子はまるでない。

メリーは飛行に箒を必要とせず、自由な動きと制限のない加速が強みだったが、最高速度では箒で飛ぶ魔術師に劣った。相手の魔術師はそれに気づくと巧妙に通常の攻撃と織り交ぜながらメリーの回避パターンを突いて突進攻撃を繰り返してきた。メリーは機敏

な動きでそれを避けるも、魔術師はしつこく突進を繰り返す。

「大尉！」

向こうから新たな敵の魔術師が姿を現す。今戦っている相手以外の魔術師は既に全滅させたと思っていたので、メリーは思わず気を取られた。

その一瞬の隙を見逃さず相手はメリーに飛びかかる。魔術師は自らの箒を投げ捨てメリーの体に飛び移り、後ろから思い切り羽交い絞めにしてくる。

「何のつもり？」

メリーはもがくことなく問いかける。メリーを素手で絞め殺すことなどできるはずがないのだ。

「このまま貴様を海に沈める」

うなるように魔術師は言う。

「私と一緒にな」

メリーの体に巻きつく魔術師の腕が大きく膨れ上がりながら真っ黒に硬化していく。硬化ウイルスの異常増殖だ。

黒い塊は魔術師の腕だけに留まらず、メリーの体を覆い始める。

「道連れにするっていうの？」

メリーは静かに聞いた。

「そっだ」

黒い塊は相手の魔術師もろともメリーの体全身を覆い尽くさんとしていた。

「目の前で玉砕なんてされたら、あなたの仲間が悲しむんじゃない？」

メリーは焦げ茶色のローブの魔術師を見て言った。

「ここでお前を始末しておくためならば、それも一向に構わん」

メリーの体は黒い塊に多い尽くされ、徐々に手足の自由が利かなくなってきた。

「ベルクシュタイン　あとのことは頼んだ」

「大尉！！」

体が海へ突き落とされる。

女二人の体をぐるぐる巻きにした黒い塊がまっすぐ海面に叩きつけられ、そのまま海中を突き破るように沈んでいく。

敵の魔術師が生きているあいだ、メリーは身動きが取れなかった。黒い塊は魔術師の意志に従って海底へ向かって果てしなく沈み続けていた。

しかしやがて魔術師が溺死すると、メリーはゆっくりと上昇していく。術者を失った硬化ウィルスの黒い塊は新たな支配者の魔術を受けて再び操られ始めたのだ。

メリーが海面から姿を現すと、空ではシルカが待っていた。

「おかえり、メリー。ちよっとだけ心配した」

「ただいま、シルカ。心配させてごめんなさい。この黒いの燃やしてくれるかしら？」

シルカは火力を加減してメリーに炎を浴びせた。黒い塊はあっという間に炭化していきぼろぼろと崩れ落ちる。

「敵は？」

「メリーが海に沈んでるあいだにみんな逃げていったよ」

「このあとどうするつもりなの？」

「もう充分でしょ。敵の魔術師はほぼ全滅。艦隊も壊滅状態。作戦は大成功よ。味方の魔術師も休ませたいし、今日のところは引き上げましょう」

メリーとシルカは自軍の母艦に引き返し、乗員に全軍撤退の命令を下した。

ラヴェンナは味方の母艦へ逃げ帰り、フラヴィニー大尉の壮絶な最期を知らせた。乗員たちは有能な指揮官の死に心を痛めた。ラヴェンナはそれまで戦闘に必死で気づかなかったが、あの女は自分をあそこまで追い詰めておいてなぜ止めを刺さなかったのだらうと今頃になって不思議に思い始めていた。

夜空を真っ赤に染め上げた艦が海の底へと沈む頃、両軍は静かに戦場から姿を消し、真夜中の海と星空は再び静寂に包まれた。

この日、マッドスコープ軍は母艦四隻、護衛艦十二隻、魔術師八名いたうち母艦三隻、護衛艦七隻、魔術師七名を失うという壊滅的打撃を受けた。それに対してマッドガルド軍は母艦二隻、護衛艦八隻、魔術師三十三名のうち護衛艦一隻沈没、一隻大破、魔術師十二名を失うという結果だった。

こうして両軍の全勢力が激突した第二次スライジャ沖海戦は、マッドガルド軍の圧倒的勝利で幕を下ろした。

マッドスコープはこのあとマッドガルド軍が第三次攻撃を仕掛けてきていよいよスライジャ半島へ上陸を始めるのではないかと怯えたが、この戦いの直後にマッドベース攻撃作戦を実行に移したためか、結果としてこれ以後両軍のあいだで大規模な海戦が行われることはなかった。

リッコたちは岩石砂漠の上空を飛行していた。まもなくマッドガルド領に入る頃だった。

くつきりと浮かぶ満月の儼かな輝きと、黒い空を埋め尽くす星々のきらめきとが静かに砂漠に降り注ぎ、その光をあちこちで乱反射させてあたりはぼんやりと不思議な明るさに満ちている。

出発してからずっと後ろを飛んでいたル力が不意に前方へ飛び出してきた。

そのまま急加速してリッコたちの前を飛ぶビリーの火力船を追い抜いていく。

どうしたんだろう。

そう思った瞬間、機体の向こうで真っ赤な炎が膨れ上がった。ル力が火炎を発射したのだ。機体が赤い火炎を照り返す。

「何かいる」

エリイが言うと同時に前を飛ぶビリーの機体は進路を曲げて左方へとそれていく。

エリイも操縦輪を引っ張って進路を左へ曲げようとする。

「伏せる!!」

前方から燃え盛る弾丸が真つ赤な軌跡を描きながら飛来する。

「ひっ」

悲鳴を漏らしながらリッコは上半身をかがませる。弾丸は風防を突き破り背面のキャノピーにぶつかって跳ね返る。

進路が左へそれるにつれて機体が傾く。じゅうつと音を立てながら弾丸が背後から転がってきた。

「熱っ!!」

叫びながらリッコは左肘に触れた弾丸を払い落とす。

「あそこだ」

操縦輪を引いて機体を水平に保ちながらエリイが機体の右側をあとで指す。

数十メートル先で何者かがルカに弾丸を浴びせている。弾丸は幾条もの赤い軌跡を残しながら不気味なレーザーのように夜空を切り裂く。ルカはめまぐるしく飛び交いながら何者かに炎を放つ。

にわかには姿はつかめない。しかし動くたびに夜空の星を覆い隠す黒い影が目を凝らせば見えてくる。ルカが狙いを定めるあたりに何者かが闇に身を潜めながら彼女と戦っている。

赤い弾丸は確かに影から発射されている。

ルカが攻撃するたびに炎の明かりで敵の姿が見え隠れする　　意外と小さい。

「相手は魔術師じゃないのかな」

「なんでそう思う?」

エリイは進路を元に戻し始めた。前を見るとビリーの機体もまっすぐ南へ向かって飛んでいる。

「だって、筭を持ってないみたいだよ」

リッコはエリイのほうを見て説明した。

「馬鹿な。何の支えも持たずに空を飛べるはずがないだろう」

エリイは前を向いたまま返事をする。

「だから魔術師じゃないんじゃないかなって思ってた」

「だったら何だよ」

「すごく小さい……まるで人形みたい」

「人形？」

「操り人形が糸につられて動いてるみたいだよ」

「よく分かんねえな」

その説明にエリイは首を傾げる。

暗闇の中で敵の動きが正確につかめていないからかもしれないが、リッコにはその動きがとても奇妙に感じられた。

リッコはより詳しく説明しようと思いを乗り出して背後の様子を窺ってみたが、機体が前へ進むにつれてルカたちの姿は遠ざかっていき、もはやその動きをつかむことはできなかった。

リッコが諦めて前に向き直ろうとしたそのとき、一際大きな炎が立ち上がり、それは空中で火柱を立てながらこちらへ向かってきた。敵がルカの炎をまともに喰らって逃げ出したのだ。

敵はものすごい勢いで接近し、リッコたちの頭上を通り過ぎていった。前を飛ぶビリーの機体を追い越す頃には激しい火柱を立てていた。炎は風でかき消され鎮火していた。

「今の見た？」

「ああ」

敵の姿は小さな少女のようだった。身長は五十センチメートルから一メートルほど。長く伸びた髪とその身にまとったドレスはルカの炎を浴びてぼろぼろになっていた。少女は箒を持たず、手ぶらでそのまま空を飛んでいた。

あとからルカが飛んできた。リッコたちの機体に追いつくと、後方を指差しながらエリイに何かを話しかける。

「『後ろは私が見張る』ってさ」

エリイがその唇の動きを読んで代弁した。リッコはルカに「了解」のサインを出す。それを見るとルカは大きくうなづいてからビリーの機体に近づいていった。

ビリーたちにも同じことを伝えるとルカは速度を落とし、再びリ

ツコたちの後ろを飛んだ。

リツコたちは一定の間隔を保ってまっすぐと南進する。前方では少し先をビリーの機体が紅蓮の炎を噴出しながら力強く飛んでいき、すぐ後ろからはルカが倅々と滑らかな軌道に乗ってついてくる。揺れることなく、震えることもなく、すべるように進むルカの飛行は、エリイやビリーの操縦する火力船よりも随分と安定しているように見えた。

リツコは前に向き直り、座席の背もたれに肩を預ける。隣に座ったエリイがやや前傾の姿勢で操縦桿を握っているため、狭い操縦席の中でリツコは隙間を埋めるように彼女よりも前か後ろに体勢をずらさなければならなかった。互いの肩をこすり合わせるようにして座りなおすと、エリイの髪の毛が肩と肩の合間に挟まってもつれる。おっと、とリツコが思うよりも早くエリイは髪を後ろへ払いのける。そっけなく押しつけられた珊瑚色の長い髪はうなじのあたりにくるくるとまとわりついた。

「いよいよ敵に居場所がバレたか」

操縦桿をつかんで前を向いたままエリイが言った。さっきルカと戦っていた少女のことだ。子供のような姿をしていたが、彼女は確かに空中でルカと戦っていた。夜空の上で殺し合いを繰り広げていたのだ。少女の放つ赤いレーザーのような弾丸が脳裏をよぎる。リツコは弾丸に触れた左肘がひりひりと熱くうずくのを感じた。弾丸に突き破られてできた風防の穴からは風が勢いよく吹き込みひゅうひゅうと音を立てている。被弾した際に弾丸の熱を受けてか、穴の周囲は合成樹脂が溶け出して奇妙な丸みを帯びている。リツコはぞっとしない気持ちになった。ルカが上手く迎撃して追い払うことができたとはいえ、少女は敵の本拠地に戻って増援を送ってよこすだろう。そうなればさらに多くの敵に囲みを喰らうのは時間の問題だ。こちらは火力船二機と魔術師一人。敵の魔術師が十人も二十人も襲ってくるればひとたまりもない。こんな砂漠のと真ん中で撃ち落とされることになるのか。

「降りて下を歩いたほうがいいんじゃないの？」

リッコは首を伸ばして、窓越しに眼下の砂漠を見下ろした。大小様々な岩石の塊が散らばっていて地面が平らな部分は少ないが、降りられないことはないはずだ。火力船で空を飛んでいれば、赤々と光る機尾の炎ですぐに見つかってしまう。マッドベースから上手く脱出できたのが不思議なくらいだ。

「だめだ」

エリイはきっぱり否定した。

「まだマッドベースを出てからそんなに時間は経っていない。砂漠を歩いて首都まで向かえばどのくらいかかると思う？ 夜明けまでの時間は限られている。歩いて行っただんじゃ間に合わない。火力船を捨てて昼間っからだだっ広い砂漠の上をのこのこと歩いてるようなところを敵に見つかつたらそれこそ一巻の終わりだ。それを考えれば昼間砂漠の上を歩くのも、夜中砂漠の空を飛ぶのも同じだろ。背負うリスクが同じなら、移動時間は短いほうが敵に見つかる危険も減る」

地平線の向こうから一際大きな黒い影が現れ、徐々に岩山としての姿を織り成しながらこちらへと近づいてくる。確かに、歩いて砂漠を越えるのと火力船で飛んでいくのではかかる時間がまるで違う。

「そっか」

リッコは両手で肩を抱いた。震えていることに気づいたのだ。

「怖いのか？」

ちらりとエリイがこつちを見た。くつついて座っているため、体に震えが伝わったのだろう。

「へへ……分かる？ 震えてるの。私だってこういうときは一丁前に緊張するんだよ。直前までは何とも思っただけに、ことが始まってから怯えだすの。おかしいよね。普段はこんなの平気なのにさ、たまにどうしようもないくらい怖くなるものがあるの」

「ビリーも似たようなこと言ってたな……お前は怖がったり物事に

動じたりするようなタイプには見えないって」

「慣れてないからだよ、怖がることに。だからこういうときだけ、人一倍恐ろしくなる」

「ふうん……」

エリイはしばらく口をつぐんでいたが、やがて沈黙を破り「お前は何か怖いんだ？」と聞いてきた。

「何がって？」

リッコはきよとんとして聞き返す。エリイは曖昧に言葉を引き伸ばし、「なんとなくだけ」と前置きしてから言った。

「俺には、お前が純粹に死を恐れているように思えない。何かもつと別のことを心配しているように見える。でもお前が言うにはそれはよっぽど恐ろしいことなんだろう。一体何をそんなに恐れてるんだ？ それとも単に高いところが苦手なのか？」

エリイはまたちらりとこちらを一瞥する。さっきとは違い睨むような眼差し。

「別に高いところは苦手じゃないけど……どうしてそう思うの？」

言葉を選びながら、リッコは慎重に探りを入れる。

「根拠はない。ただなんとなくそう感じただけだ」

リッコは弁解しようとしたが、上手い言葉が見つからなかった。

そもそもエリイが何を指して疑問を呈しているのかも判然としなかった。

「心当たりがないなら、忘れてくれ。俺の思い過ぎかもしれない」

エリイはそれ以上追求しなかった。リッコは静かに息を漏らした。ふと少し膝を伸ばした拍子に、ブーツのかかどが何かを踏んだ。ごり、という硬い感触でさっき撃ち込まれた弾丸だと分かった。爪先で押しのけるように蹴飛ばすと、狭い座席の下でころころと転がって鬱陶しくまとわりついてくる。拾って捨てようにも狭くて腕は届かない。リッコは諦めてあまり気にしないようにした。

再び敵が現れるまでそう時間はかからなかった。首都の方角から

星空を埋める黒い影が複数。マッドガルドからの刺客だろう。ルカは箒を握り締めて加速した。びゅんと風音が耳を切る。あごを引き、上体を前に倒す。二機の火力船を飛び越えるように追い抜かし、迫り来る敵を迎え撃つ。火力船は二手に分かれて旋回する。

杖を振るう。弾を練る。十個、二十個　まだいける　二十五、三十　火を灯す　今だ！

弾を放つ。燃え盛る三十発の火球は放射状の軌跡を描いて夜空を切り裂く。

同時にルカは高度を上げる。そして再び弾を練る。まだ火はつけない。明かりで居場所がばれてしまう。

敵は火力船を狙う。ルカは宙返りして背後を取る。火を灯し、弾を撃つ。五発、十発。黒い空を背景に火花を散らす。

敵が気づく。何人かがこちらへ来る。

ルカが次の弾を作るよりも早く敵が先に撃ってきた。真っ赤な火球が一閃する。ルカはあわてて横へそれる。

早い！！

敵は次々と弾を練る。ぼぼぼつと火をともし、立て続けに連射する。旋回しながらそれを避ける。

ぐんと高度を上げて距離を取る。敵も追ってくる。連射される弾丸がルカの動きを追い続ける。その角度が垂直に達する頃、ルカは思い切り急転回した　がくと強烈な負荷がかかる。敵の弾丸が肉薄する。だがそれに触れるよりも早くルカは敵に炎を放つ。

赤い炎が巻き上がる。その明かりで目に捉えた敵は八人。燃え盛る敵をやり過ぎしながら次の弾を生成する。

他の敵が追ってくる。居場所が割れたのはこちらも同じか。ルカは大きく弧を描き、それでもかというほど速度を上げる。

エリイたちを援護しなくては。

敵の弾幕をかいくぐり、ルカも弾を撃って牽制する。放射状の弾道が交錯して菱形模様の絵が浮かぶ。

エリイたちが追われている。火力船では魔術師よりも小回りが利

かない。囲まれたら攻撃を避けきれず被弾する一方だ。

ルカの意図を読んでか二人の魔術師が立ちほだから。赤い弾丸が交差するように行く手を阻む。

「邪魔！」

ルカは片方の敵に弾を撃ちもう片方の敵に突進した。体当たりするように炎を放つと同時に急転回して離脱する。敵はごうんと火柱を立てながら墜落する。

残った敵は無視してエリイたちを追う。しかし敵は追ってくる。

赤い弾がしつこく背後から飛来する。ルカの動きを追い続ける。ルカは舌打ちして再び鋭角を描くように転回した。再びのしかかる急激な負荷。ばさあと髪が風にたなびく。急転回したルカに敵が弾道を修正するよりも早く突進する。そしてすれ違い様に火炎放射を外した！

ルカはあせった。後ろを振り向く。まだ間に合う。再び敵へ炎を撃つ。届かない！！帯状の炎は敵の手前で霧散した。

躍りになってもう一度突進攻撃を仕掛けようとしたとき、杖を持った左腕ががくと後ろへ引つ張られた。

撃たれた。しかも利き腕だ。

ルカは咄嗟に後ろへ飛び退く。同時に敵弾がまさに今いた場所を貫かんと飛来する。ルカは一旦攻撃を諦めて後退した。

逃げ出すように大きく敵から距離を置く。敵を挟んで反対側ではエリイたちの火力船が襲われている。幾条もの赤い軌跡が機体を掠める。ルカは悔しさを募らせた。

がくがくと左腕が震える。次の弾を作ろうと力を込めるも、杖を取り落とさないようにするだけで精一杯だ。

ルカはなるべく敵から離れてまずは傷を治そうと考えた。しかし左手が言うことを聞かない。

敵が背後から迫り来る。様々な角度から弾丸がルカ一人を狙って収束する。右から左からと飛来する赤い火球が三角形の軌跡を描く。標的を外した弾が次々と地面を叩く。

ルカは徐々に高度が下がってきていることに気づいた。飛行が不安定になってきたのだ。このままでは戦うどころか逃げることもままならない。

どおん、と背後で大きな轟音。

ルカは後ろを顧みた。目に映ったのは火力船と紅蓮の炎。ルカは動転した。

そして前に向き直ってはっとする。真っ黒い大きな岩　ぶつか
る！

必死に進路をそらして急上昇　乗り越えられるかと思いきや箒の穂が岩壁に激突する　がくとバランスを崩して空中に投げ出される。

当然敵は襲い来る。絶好のチャンスとばかりに無慈悲に弾丸を叩き込む。撃つだけ撃つと敵はぎゅーんと上昇していく。

どさつと砂漠の上に落下したルカは地面に散らばる角ばった岩石の痛みで思わずうめいた。しかしルカはあれだけの攻撃を受けたにも関わらず一撃も被弾していないことに気づいた。岩の向こうに投げ出されたおかげで幸か不幸かその岩が盾となり敵の攻撃をしにくくすることができたのだ。

敵は再び止めを刺しにくるだろう。

ルカは立ち上がって岩陰に隠れようとした。しかし思いのほか激突のダメージが大きく、ルカは膝を折ってその場に倒れた。砂漠の砂が汗ばんだ頬に張りつく。

戦わなきゃ。

ルカは歯を食いしばって起き上がる。震える膝を叱咤して這いつくばるように岩陰へ向かう。

ルカは岩に身を寄せて様子を窺う。

敵だ。でも今度は一入だ。他の敵は死に損ないの私なんかよりもエリイたちを狙いに行っただらうか。

ルカは岩陰に身を隠す。敵弾がなぎ払うように地面を突き刺し岩を穿つ連続音が鳴り響く。その数十数発。

ルカが物陰に隠れていることに気づいたのだろう。ルカを狙う敵は一人だけになったとはいえ、相手はしつこく再びやってくる。

どうせならあのまま死んだ振りしていればよかった。

そうすれば見逃してくれたかもしれない。ルカは甘い考えにとらわれながら再び顔を覗かせる。

敵が来る。ルカは思わず身をすくめる。しかし今度は音がしない。拍子抜けしてルカはきよきよると辺りを見回した。

そのとき、大胆にも敵が目の前に飛び降りてきた。ルカは心臓がひっくり返った。咄嗟に杖を右手に持ち替えて半ばやけになりながら炎を放つ。

大きな炎が膨れ上がり、敵の姿を包み込む。

油断しきっていたのか、敵が降りてきた場所は完全にルカの炎の射程範囲内だった。

「びっくりした」

ルカはしばらくぼかんとしたまま炎を浴びてのた打ち回る敵の姿を眺めていた。しばらくしてルカは右手で炎を放ったために火力がいつもより弱いことに気づいた。ルカは再び炎を浴びせた。なるべく苦しませずに止めを刺すためだ。

「ああびっくりした」

心臓がばくばくと脈打ち喉までせり上がってきそうになる。ルカは胸を押さえた。

高温の炎を浴びて敵の体が完全に燃え尽きても、まだ頭は混乱したままだった。まさか相手まで下へ降りてくるとは思わなかったのだ。

しかしルカはやがてこれはチャンスであることに気づいた。ひとまずのところ自分を狙う敵はいなくなったのだ。

ルカは左腕の傷を見た。傷はかなり深かったが、幸い弾は内部に留まっておらず腕を掠めただけの擦過傷のようだった。ルカは安堵の息を漏らした。興奮のために痛みを感じないだけでてつきりもつと深手を負っているかと思っていたのだ。

ル力は右手で傷口に杖を向ける。何度も杖を持ち直し、ゆつくりと深呼吸する。右手で治療したら、上手くいかずに失敗するかもしれない。

だがためらっている暇はない。ル力は治療の魔術を実行した。先端の宝玉に緑色の光が宿る。消毒をしたのち、まずは骨を再生させる。次に血管、神経、脂肪、筋繊維などの軟部組織を修復する。ここが一番気を使う。様々な種類の細胞が入り混じった軟部組織の複雑な構造は、現代の技術力をもってしても未だ魔術によって修復するより物理的な手術を行ったのち時間をかけて自然と傷が癒えるのを待ったほうが理想的な回復を遂げやすいという。しかしそんな悠長なことは言ってられないのが戦場だ。

ル力は暗闇の中で魔術の発動に伴う小さな明かりを頼りにほとんど手探りの状態で治療していた。自分の体ゆえに勘が働きやすいとはいえ、今の治療は右手で行っている。元通りに治るかどうかは分からない。ル力は自分が緊張してきていることに気づいた。杖を握る指が汗ばむ。

皮下組織まで修復できたら、あとは真皮から表皮までを再生させるだけだ。最後の仕事を仕上げるとル力はほっと一息をつく。左手のひらを握ったり開いたりして自由に動くかを確認する。問題ない。

さて反撃開始だ。左手で杖を持ち直し、自分が落下した場所に戻るとル力は意気込んで箒を拾い上げた。

「嘘でしょ」

胸がざわつとした。ル力は間違えて何か別のものを拾い上げてしまったのではないかと思った。それがさっきまで自分が乗っていた箒だとは思えなかったのだ。しかしそれは確かにル力自身のものだった。ル力は自分の目が信じられなくなった。箒は丁度柄と穂の境で真つ二つに折れていたのだ。

「空が飛べなきゃ、私は何の役に立ってというの」

思わず涙がこみ上げてくる。しかしル力は奥歯をかねてそれをこ

らえた。

敵の箒を奪うしかない。ル力はさつき倒した敵の死体に近寄る。死体は右手に箒をつかんだまま黒焦げになっていた。ぽっかりと開けた口から覗く白い歯だけがわずかに原形をとどめている。ル力は敵の箒を手を取った。炎に焼かれて筋肉が収縮した死体の腕は箒をしつこく握り締めたまま離さない。ル力が無理やりもぎ取ろうとすると、箒はばきいと音を立てて根元から折れた。だめだ。完全に炭化していた。ご丁寧にも二度も炎を浴びせて敵を焼き尽くしたのが裏目に出た。

ル力は諦めて自分の折れた箒にまたがった。そして夜空の先をきつと睨み、意を決して飛び上がる。

紅蓮の炎が噴出し、視界を真っ赤に埋め尽くす。

「あの馬鹿！」

操縦輪を引きながらエリイが叫ぶ。

「俺たちまで殺す気か！！」

ビリーが火力船に搭載された火炎放射器を撃ち放ったのだ。接近していた敵の魔術師は見事火だるまと化した。丁度向かい合うように位置していたエリイの機体は危うく巻き添えを食うところだった。

「でもすごい威力」

もつもつと黒煙を上げながら墜落していく魔術師を見てリッコが言う。

「正面の敵しか攻撃できないんだ。まずはこいつらを追い払う必要がある。横や後ろに張りつかれてたんじゃないやあこんなもん使い物にならねえ　リッコ、ちょっと派手に動くから気をつける」

エリイがぐいつと操縦輪を引き上げて機体をぐんぐん上昇させていく。天頂に向かって一直線に暴進する。そしてその角度は垂直を超え、くるりと敵の背後を取るように宙返りする。

すかさずエリイは左手の操縦桿を持ち替えて正面の敵に炎を放つ。

紅色の火炎が帯状に放射され目の前の敵を飲み込んでいく。燃え盛る炎の明かりで目がくらみそうになる。リッコは思わず顔に手をかざした。

「まだしつこいのがついてきやがるな……」

エリイは機体を左へ旋回させる。見ると右方から敵の魔術師が追ってくる。

撃たれる！

リッコは咄嗟に身をかがめた。がんと機体を叩く音が体に響く。心なしかこの火力船はやたらと装甲が薄い気がする。軽量化のために薄い金属を使っているのだろうか。被弾するたびに金属板を貫く音がリッコの心を不安にさせる。

「くっそ！ もっと早く回れないのかよ!!」

敵にも個人差はあるが、概ね魔術師のほうが火力船よりも動きが機敏だ。上手くタイミングを合わせなければなかなか隙を突くことはできない。そもそも攻撃方向が限られているというのが致命的すぎる。

「ねえエリイ。窓開けて直接攻撃したほうがいいんじゃないの？

エリイなら素手でも炎撃てるんでしょ？」

「俺もそれは考えてたが、たぶん火炎放射器のほうが火力は高い。

それに窓を開けたらこっちはたださえ動きが鈍いのに裸で敵と戦うようなもんだ。それでもいいなら、窓を開ける」

「よしきた」

リッコはキャノピーを後ろへスライドさせた。腕一本出すだけなら全部開ける必要はない。どうせこれだけ囲まれていたら少し隙間を作るくらい大した違いにはならないだろう。

リッコが充分な隙間を開けるとエリイは操縦輪を握っていた左手を右の操縦桿に持ち替えた。そして右手を窓の外へ向けて炎を撃つ。

槍状の炎が次々と敵を襲う。敵は緩やかに上昇して攻撃から逃れる。エリイの炎が届かなくなるところまで離れると敵はその距離を保ったまま赤い弾丸を撃ってくる。

「ちっ、相手のほうが射程距離は上か」

操縦桿を持ち直すとエリイは一瞬敵へ接近しようとしたが、飛来する弾丸を避けるため渋々左へそれていく。

「リッコ、窓全部開けちまってくれ」

「え、全部？」

「ああ、全部だ」

リッコは言われた通りにした。キャノピーを限界まで開けると外からの風が舞い込んできてがたがたと音を立てる。リッコはこのまま風圧でキャノピーが丸ごと吹き飛んでしまうのではないかと思っ

た。
エリイはバックミラーを見つめて注意深く敵の動きを窺っている。リッコも後ろを振り返って敵を見る。飛んでくる弾丸をエリイは上下左右の器用に動いて回避する。そして敵が丁度真後ろへ来るとエリイはすばやく体を反転させて背後の敵に炎を撃つ。

リッコは思わず息を呑んだ。エリイはキャノピーを丸ごと吹き飛ばしたのだ。朱色の大きな火炎は渦となって敵を飲み込む。キャノピーの残骸がそれとともに吹き飛んでいく。

「やれやれこれで少しは涼しくなったな」
横から吹き込んでくる風に長い髪をたなびかせながらエリイが言う。

「ばすん、と尾翼が音を立てる。敵に撃たれた。」

「上にまだいる！」

リッコは頭上を指差した。

「ちっ」

舌打ちしながらエリイは操縦輪を引つ張る。ぐいんと機体が傾き、右へ右へと曲がりゆく。

火球が雨あられと降ってくる。リッコは雑嚢で頭をかばう。被弾するたびにトタン屋根を叩く豪雨のような激しい音が鳴り響く。

「すばばん、と翼にいくつも穴が開く。」

エリイは身を乗り出して炎を撃った。敵の攻撃を回避しつつ果敢

にも応戦する。火力船と魔術師は互いに円を描きながら攻撃する。そして互いに高度を上げる。敵よりも高く、敵よりも早く。

今や敵の背後に追いつくかと思われた頃、エリイは不意に操縦輪を反転させる。逆回転して意表を突き、敵の魔術師と向かい合う。

敵を正面に捉えると同時にエリイは機首から炎を発射する。轟音とともに大きな炎が吐き出される。真紅の火炎が目の前の景色を飲み込んでいく。

火力船は赤々と輝きながら失速して夜空から落ちていく敵の上を乗り越えていく。

「そろそろやばいかもな」

機体がぐらぐらと波打つように左右に揺れている。火力船は既に自身の体を水平に保つことができなくなっていた。

「敵は？」

エリイが必死に機体のバランスを保ちながら聞いてきた。

「こつちには今のところ見当たらない。でもビリーたちが」

戦闘の末に遥か向こうへと離れていってしまったもう一機の火力船がまだ敵と戦っている。

「あいつらはあいつらでなんとかするだろ。こつちはもう降りたほうがいい。墜落しないうちにな」

そういつてエリイは速度を落としてゆっくりと地面へ向かっていく。夜の闇の中で大きな黒い海のように沈んでいた地面が徐々にこちらへ近づいてきて、その細部にはあちこちに岩石が散らばっているのが見えてくる。

エリイが奥のボタンを押して着陸のための車輪を出したとき、背後からすつと敵の魔術師が躍り出た。

「くそつ、こんなときに　！！」

エリイが対応するよりも早く敵は弾丸を連射した。赤い火球が次々と機体を殴る。

まともに喰らった。

被弾した車輪が機体から離れて一足先に落ちていく。

がくんと機首が下がり、地面が一気に起き上がる。巨大な砂漠が切迫する。このままでは激突する　墜落する。

敵はさらに接近する。そして大きな炎を撃つ。

「やばい!!!」

エリイが身を乗り出す。両手を向ける。炎と炎がぶつかり合う。

強烈な熱風が巻き起こる。リッコはエリイの代わりに操縦輪を引いた。だめだ。言うことを聞かない。

「飛び降りて!!!」

反対側から声がした。ルカだった。

見るとカーペットのような大きな布を飛ばしている。ここへ飛び移れというのか。

「早く!!!」

躊躇している暇はない。リッコはなるべく下を見ないようにして雑囊を先に投げてよこす。

カーペットは大きくたわんで、ゆっくりとまた元に戻る。エリイのほうを見ると、彼女は先に行けと目で合図する。リッコは大きく息を吸う。

飛び移る。一瞬体が宙に浮かぶ。

カーペットはリッコの体を柔らかく受け止めると、既に置かれていた雑囊を重心にゆっくりとまた水平に戻る。

「エリイ!!!」

リッコは腕を差し伸べて彼女を呼ぶ。

エリイは向かい側に迫る敵を追い払うように攻撃を続けている。

迂闊に背は見せられない。

後ろからルカが赤い火球を連射して援護する。敵は大きく飛び上がるようにして回避する。その隙にエリイがこちらへ振り向いて飛び移る。

リッコは少女の体を抱き止める。

無事に二人を救出するとルカは間髪いれずに敵へ向かった。真っ赤な火球を狙いすまして連射する。

ぼろぼろになりながらいよいよ炎上し始める火力船は既に無人。穴だらけになつた機体はゆっくりと墜落していく。

リッコたちを乗せたカーペットは少女二人の体を優しく支えながらゆっくりと地面へ降りていく。布一枚を隔てて、下には何も存在しない。心をアンバランスにさせる気まぐれな浮遊。リッコは初めての体験に胸がどきどきするのを感じた。

エリイの肩越しに覗く夜空は、さっきまでよりも輝いて見えた。

敵は一人だ。

ルカは次々と弾を放つ。敵は逃げ惑うように旋回する。赤い火球は空を切り、敵の向こうへと抜けていく。

どんなに狙いを定めても、箒が思い通りに動かない。飛行しながら箒はがくがくと小刻みに震える。

早く敵から箒を奪わなければ。

風に押されて箒の穂がたがたと揺さぶられる。折れた箒では速度が出せず敵に追いつけない。ルカが構わず加速すると穂がついに風圧に負けて吹き飛んでいった。急に体が軽くなる。前につんのめるように宙に投げ出される。

もはやこれではただの棒切れだ。リッコは左手で箒の柄をつかんだままぶら下がることしかできなくなった。

敵もそれに気づいたようだ。急遽進路を反転させてこちらへ向かって突進する。

諦めたようにぶら下がったまま敵を待ち構えながらルカも密かに弾を練る。次の一撃で蹴りをつける。静止した状態なら狙いは狂わない。

こちらへ邁進しながら敵が弾を撃ってくる。赤い火球が一閃する。ルカは腹筋に力を込めた。懸垂の要領で体を持ち上げて回避する。そして自分の弾に火を灯し向かい来る敵に反撃する。

当たった。

ルカの読みは的中した。絶好のタイミングだった。

敵は反撃をまともに喰らってがくりと崩れ落ちていく。ル力は箒の柄にぶら下がりながらそのあとを追った。

重力に従ってゆっくりと落下する魔術師に追いつくと、ル力は敵の体を蹴飛ばしてその手から相手の箒を奪い取った。

よし。これで空を飛べる。

他人のものゆえにその座り心地や操作性などの違和感はあるが、ただの棒切れと比べたらずっとまじだ。ル力は新たに手に入れた箒にまたがって空を蹴った。

空高く舞い上がると、ル力はビリーたちを探した。敵と戦っている姿は見えない。どこへ行ってしまったのだろう。まだそんな遠くには離れてないはずだと思い、ル力は西へ向かって移動する。じつと黒い空に目を凝らし、ビリーの機体を追い求める。しかし見つかる気配はまるでない。

一旦エリイたちと合流したほうがいいかもしれない。いや、どうせ空を飛べる者が自分しかいないのなら同じことだ。先にビリーたちを見つけないければならない。

もしかするとビリーたちは既に敵に撃墜されてしまったのではないか？

ル力は嫌な予感がしてきた。しかしそれならばビリーたちを倒した敵がこちらへ向かってくるはずだ。そうでないということは、まだビリーたちと戦っているか、あるいは彼らに倒されてしまっているかのどちらかだろう。

しばらく西方へ進んでいくと、星明りとは別の光が見えてきた。

何かと思って近づいてみると、そこには月夜に紛れて広大な砂漠を埋め尽くすかのような軍勢が広がっていた。各部隊の兵士と思しき者がそれぞれ松明の炎を掲げていたのだ。

マッドガルド軍か。

ル力はぎょつとした。ビリーたちを葬った敵があのような軍勢と合流していたのだとすれば、彼らがこちらへ戻ってこないのもうなづける。ビリーたちの乗っていた火力船は既に撃ち落とされてしまったの

か。ビリーたちは既に殺されてしまっているのか。それともマッド
ガルド軍に捕まっているのか。だとすれば一緒に搭乗していたルピ
カ王子はどうなってしまっているのか。

ルカは空中で静止したまま呆然とする。悲観的な想像がルカの頭
を埋め尽くした。

眼下では無数の人影がうごめいている。その数は数千人、いや数
万人の規模にも及ぶかもしれない。注意深く観察してみると各所に
移動式の櫓のようなものまで見える。

どうしよう。

一人で向かっていってなんとかなるわけではない。やはりここは
一旦エリイたちと合流して相談したほうがいいだろう。そう思って
ルカが引き返そうとすると、先方から魔術師が一人こちらへ向かっ
てきた。

見つかつた！？

ルカは応戦すべきか逃げるべきか逡巡した。迷いあぐねているう
ちに相手の魔術師は杖に火を灯して接近する。

手を出すべきではないと思いつつもルカは念のため弾丸を生成す
る。

相手は撃つてくる様子はなく、まっすぐこちらへ近づいてくる。
顔かたちがかめるくらいの距離まで来ると、相手はルカと大差な
い体格で、年齢もそう変わらない少女なのが分かる。

やがて少女はルカと同じ高さに達し、火を灯した杖を注意深くこ
ちらへ向けながら詰め寄ってくる。

ルカは杖と弾丸を背後へ隠した。少女は鋭い目つきでルカを見据
えながら対峙する。

「お前は誰だ。何をしにここへ来た」

冷たくとがった声で少女は言った。

「私は」

「弾を捨てる」

ばれていた。ルカは洪々杖を振って生成しておいた弾丸を全て下

へ投げ捨てる。

「さあ、質問に答えろ」

少女が杖を突きつける。先端に灯した明かりが少女の姿を照らし出す。少女は焦げ茶色のローブを身にまとい、同じく焦げ茶色のとんがり帽子をかぶり、その広いつばの下からは真っ黒い前髪越しに藍色の冷やかな瞳が覗く。

「私の名は、ルカ・アルダン」

物怖じせずルカは言う。

「どこの国の者だと聞いている」

鋭く釣り上がった目でルカを睨みながら少女が問う。

「アステナ。アステナ王国の中級魔術師。マッドスコープ軍を支援するアストラピア三番隊の所属隊員」

ルカは観念して自分の素性を全て明かした。しかし毅然とした態度を崩さず果敢に少女を睨み返す。ぴたつと空中で静止しているルカに対して、相手は静かに上下に揺れている。

「それで間違いないな」

「今言った通りよ」

「ついてこい」

火を消してくるりと背を向けると少女はゆっくり降りていく。ルカはあつけに取られた。杖を取り上げもせず背を向けるとは一体何を考えているのだらう。しかしルカは黙って少女に従った。

少女は軍の野営地と思しき場所へ降りた。地面に立つと少女はルカよりも背が高い。野営地は各所に天幕が張られ、一定間隔で火が灯された松明が並ぶ。少女の後ろを歩いて歩くとルカは周りの兵士たちからの好奇の目に晒された。

「ジャック」

ある天幕を訪れると、少女は思わぬ名前を口にした。

「客だ。お前の部下を連れてきた」

ルカはまさかと思った。しかし中から現れたのは紛れもなくジャック・スリーロードその人だった。

「隊長！！」

ルカは思わず抱きついた。懐かしい匂いがする。

「どうしたんですか。どうしてこんなところにいるんですか。敵に捕まってしまっただんですか」

泣きじゃくりながらルカはジャックを質問攻めにする。

「落ち着け、ルカ。ここはマッドスコープ軍の野営地だ。敵陣じゃない」

ジャックはなだめるようにしてルカを引き離す。

ルカはそう言われてはつとした。そうだ。軍が野営しているからといって必ずしもそれが敵であるとは限らない。今まさにこの砂漠の上では両軍が熾烈な戦いを続けているところなのだから、味方の軍と合流できる可能性は充分にあったのだ。

ちよつと考えてみれば分かることなのに。

ルカはてつきり敵軍の野営地だと思い込んでいた。勘違いしていた自分が急に恥ずかしくなってきた。

「さつきビリーたちが敵に襲われているところを歩哨の兵士が見つけてさ、聞けばお前たちもまだ近くにいるはずだって言うから、火を灯して待ってたんだ」

「それじゃビリーとルピカは無事なんですか？」

「ああ、二人とも中にいる」

ジャックは親指で後ろを指す。

「こいつの手柄なんだぜ。褒めてやってくれ」

そう言っただけジャックはさつきからむすつと黙ったまま隣に立っていた少女の肩をぼんぼんと叩いた。

「あ、ありがとう……えっと……」

「ラヴェンナ・ベルクシュタインだ。さつきは悪かったな。敵だと思っただけ警戒してたんだ」

ルカがおおずと頭を下げると、少女は硬い表情のまま儀礼的に手を差し伸べてきた。

「よ、よろしく……」

「よろしく」

ルカが恐る恐る手を取ると、ラヴェンナはしっかりと握り返してくる。

「隊長」

一歩下がって、ルカはジャックに声をかける。

「エリイとリツコがまだ向こうにいるんです。すぐに連れて戻ります。もう少し待っていてください」

ルカは帽子のつばをつかみ、ぎゅっと目深にかぶりなおす。

「ああ、気をつけてな」

陽気に手を振るジャックを尻目に、ルカは箒に乗って飛び上がる。

ぴん、とフリントが小気味よい音を立てて、オイルライターに火を灯す。くわえた煙草で火を吸うと、じわっと溶けるように先端が黒く焼けていく。

リツコは手ごろな大きさの岩に座って煙草に火をつけていた。

「やれやれ、一時はどうなるかと思ったね」

ふう、とため息まじりに煙を吐き出す。

「俺は正直言っただけかと思っただぜ」

向かい側に座るエリイが言う。

「まだこの若さで死にたくないな」

リツコは苦笑した。

「お前、歳いくつだったっけ」

「私？ 十九だよ。エリイは？」

「俺は十八だ」

「えっ、十八？ そんな歳には見えないけど」

「俺もそう思う。たぶんこの体は十五歳かそこらだろう」

「体は、ってどういうこと？」

「前にも言っただろ。この体は他人のものだ。俺という人間は十八歳の男だ。いや、違うな。正確には、十八歳の男だった」

だった。

過去形。それは何を意味するのだろう。リツコは頭が混乱してき
た。

「順を追って説明しよう」

エリイは大きく息をついて、地べたの上で胡坐をかいた。

「カシユー・オーウエンズという名の男がいた。この姿になる前の
俺のことだ。カシユーは十六歳のときに火の悪魔に体に乗っ取られ
た」

「火の悪魔？」

「俺たちが仮にそう呼んでいるだけだ。正確な名前は分からない」

エリイは話を続けた。

「火の悪魔が俺の体　つまりカシユーの体に乗っ取る前は、少女
の体を操っていた　この体だ」

エリイは自分の胸に手を当てる。

「火の悪魔がカシユーの体に乗っ取っていった代わりに、カシユー
の人格は少女の体にぶち込まれた。体と中身が入れ替わったってわ
けだ」

話の途中でエリイは「水をくれ」と言ってきた。リツコは雑囊か
ら水筒を出して手渡した。

「で、俺は元の体を取り戻すべく諜報機関であるアストラピアで働
きながら色々と情報を集めているが、もうかれこれ二年が経過して
いるって話だ」

エリイはごくごく喉を鳴らして水を飲んだ。口から零れ落ちた
雫が白い喉を伝っていく。

「エリイって名前も実は本名じゃないんだ。俺は少女の体で目覚め
たとき、何か身元が分かるものを持っていないか探したが、手がか
りになるようなものはほとんど何も見つからなかった。唯一、身に
着けていた装飾品に名前らしきものが彫られていたが、最初の二文
字しか読み取れなかった。『エリ』だけだ。それにちなみに俺はエ
リイと名乗ることにした。カシユーという名前は既に体とともに奪
われしまっていたからな。元の名前を使い続けていれば、この世に

カシユーが二人いることになってしまう」

強い風が吹いてきて、煙草の灰を散らしていった。砂漠の夜は肌寒い。リッコは少し身震いした。

「この体になってから変わったことがいくつもある。前よりも背が低くなって手足のリーチが縮んだこと。体の筋力が著しく低下したこと。あとは、どいつもこいつも俺を子ども扱いしやがることだ」

リッコは思わず笑い出した。事実エリイは実年齢よりも幼く見える。

「ごめん」

エリイが怒った顔をして睨むのでリッコはあわてて口を押さえた。「俺の身体能力は一気に弱体化した。代わりに、俺の新しい体には炎を操る能力が備わっていた」

エリイは手のひらを上に向け、小さな炎を宿らせる。朱色の炎がゆっくりと揺らめきながら立ち上る。

「ザラ」

「そつだ。皮肉にも俺は体を奪われたことで強大な力を手に入れた」
炎の明かりが珊瑚色のエリイの髪に鮮やかに反射する。

「なるほどね。エリイも色々あったわけだ」

リッコは煙草の火をもみ消して立ち上がる。

「お、ルカが戻ってきたかな」

ふと空を見上げると、ルカと思しき人影が丁度こちらへ飛んでくるところだった。

空から降りてくるとルカは「遅くなってごめん」と言っリッコたちを乗せていたカーペットを再び宙に浮かべた。

「マッドスコープ軍が向こうにいるの。ビリーとルピカは無事だつて。隊長もいるから、とにかく一旦合流しましょう」

リッコたちはルカの運ぶカーペットに乗せられて軍の野営地へ連れて行かれた。カーペットはルカの動きに同期して同じ高さで空を飛び、リッコは振り落とされないように端の部分を握り締めた。乾いた風が腕の隙間をすり抜けていく。遠く離れた地面を見下ろすと

カーペットを握る手が汗ばんでくる。しかしカーペットはある程度まで加速すると速度は一定に保たれ、振り回されるような感覚は収まった。

やがて砂漠の上に航空障害灯のような赤い光が散らばっているのが見えてきた。野营地だ。リッコはその規模の大きさに驚かされたが、同時に頼もしい気持ちになった。

カーペットはゆっくりと速度を緩めていく。リッコは再び端を握る手に力をこめた。野营地に近づくにつれてカーペットはルカの動きに合わせて滑らかに降下していき、リッコはにわかに体が浮かび上がるような感覚に捉われた。

野营地へ降りると、兵士たちが直立不動の姿勢で整列していた。リッコは何か場違いな雰囲気を感じながらルカのあとに続いて歩いた。エリイもきよるきよるとあたりを見回しながらついてくる。

「隊長」

やや大きめの天幕の前に髭面の若い男が立っていた。ジャックだ。隣にビリーとルピカも並んで立っている。

「二人を連れてきました」

「ご苦労。敵とは遭遇しなかったか？」

「はい。敵の姿は見かけませんでした」

「よし、いいぞ。俺は師団長に連絡してくる。上でラヴェンナが哨戒してるからもう大丈夫だと伝えてやってくれ」

「はい」

ジャックはどこかへ走り去り、ルカは空へ飛び上がった。

リッコとエリイは状況がつかめないまま天幕の前に取り残されて呆然とした。

「こんな夜中に何かと思つたろ。俺たちが敵に襲われているのを発見してから、みんな戦闘に備えて臨戦態勢だったんだ」

得意げな調子でビリーが言い、そのままリッコたちと別れたあとのことの顛末をひどく大げさな誇張を交えて話し始めた。すぐに話を膨らませて状況を正確に報告しないのがビリーの悪い癖だ。リッ

コがそれを話半分に分聞いているうちに、ルカが他の魔術師を連れて降りてきた。

「この子はラヴェンナ。ビリーの火力船が敵に襲われているところを助けてくれたの」

そう言つてルカと一緒に降りてきた魔術師の少女をリッコたちに紹介する。

「俺たちの命の恩人だぜ、な？」

ルピカと目を見合わせながら茶化すようにビリーが言う。

続けてルカはリッコとエリイをラヴェンナに紹介した。ラヴェンナはちらりとこちらを一瞥して軽く頭を下げたが、それ以降はそっぽを向いてつんとしたまま黙ってしまった。

士官と思しき者が天幕を一つ一つ回りながら、整列している兵士たちにそれぞれ中へ戻るよう合図していた。兵士たちはぞろぞろと列を崩して天幕の中に戻つていき、何人かの残った兵士が松明の火を消していった。急速に人の気配が減つていき、深い闇に包まれた野営地は息を殺したように静まり返る。

「待たせたな」

急に後ろから肩を叩かれてエリイはびくつと飛び上がった。ジャックだ。既に火は全て消されていたためあたりは真つ暗になっていたのだ。エリイは恨みがましい目でジャックを睨んだ。

「みんな中へ入れ」

ジャックは手に持っていたランプに火を灯し、天幕の入り口の垂れ布を引いてリッコたちを促した。

天幕の中は十畳間くらいの広さで、七人程度なら容易に収容できた。木箱の上に合板を置いて机代わりにしたものが真ん中に置かれ、周囲には簡易ベッドが六つ、それとは別に丸めた御座のようなものが茶箆筥の横に二つ立てかけられている。

ジャックはランプを置くと外套のポケットから地図を取り出し、それを机の上に広げた。リッコたちは机を囲み、頭を寄せ合うようにして広げられた地図を覗き込んだ。

「ここがマッドベース。ここがマッドガルドの首都ガルナディアだ」
ジャックの骨ばった指が地図の一点をとんとんと叩く。地図はマッドベース、マッドガルドの全域とマッドスコープの一部を描いた縮尺の小さいものだった。

「俺たちは今ここにいます」

ジャックが指差したのは、丁度マッドベースとガルナディアの間地点からやや西へそれたところだった。

「んで、ここからまっすぐ東へ行くと、次の拠点はソルケットだ」

ジャックの指がソルケットと呼ばれた都市を指し示すと、横に置かれたランプの明かりが彼の手でさえぎられて地図上のマッドスコープの部分に影が差した。

「俺たちの最終目標であり、同時にマッドガルドの最後の砦だ」

ジャックはリッコたちの現在地とソルケットとを交互に指し示す。

「次の戦いで全てが決まる」

ソルケットは、もはや目と鼻の先にあった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8930p/>

砂漠の巨人

2011年10月5日03時26分発行